吸血鬼コロシっていう
おかしな体質

上平　英

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

何がどうしてこうなった!?　ツタヤでなのムービー無印、Ａｓを見て、その後ネットサーフィンしまくって、アルカディアや暁、ハーメルンと二次小説読んでいくうちに、月村家に興味を持って殴り書いてしまいました！

月村家の子達って可愛いから仕方が無いっていうか、同じサブキャラのアリサｓｓが多いのに対してすずかｓｓが少なかったから思い付きで書きました。

特に後悔していないが、他の作品も更新したい。

プロットはＡｓ終了まで、っていうか魔法にはまったく関わらない設定なので、あま

り進みません。

恭也×忍はどうなるんだろう……。

目次

プロローグ　☆　――――――――　1
第1話　満月の夜のトラウマ　――　15
第2話　さすがの恭也さんも、美由希さんの魅力には敵わない　――――　34
第3話　初勝利したし克服できた？　65
第4話　湯煙温泉～月村さんとの邂逅～　――――――――　83
第5話　高町家にお泊り。美由希さんと2人で過ごす1日　――――――　119
第6話　再会　前編　――――――　190
第7話　再会　後編　――――――　221

プロローグ　☆

〈中村　拓也〉

吸血鬼……狼男、フランケンシュタインの怪物と並ぶ三大怪物で、人間の何倍もの力を振るうことが出来、蝙蝠や狼、霧などに変身する事も可能で、催眠能力など、様々な能力を持った怪物で、その一番の特徴は人間の血を吸う習性である。

よく小説やアニメ、漫画などの題材に使われるものである。

吸血鬼は暗闇で怪しく光る真っ赤な瞳をしていて、紫色の淡く月明かりで光る髪、綺麗な顔の美女で、口からは2本の鋭く尖った牙が見え、満月を背に下その姿は――。

その姿は――。

おしっこちびりそうなぐらい怖いですっ！

いや、本当に怖いです！

何!?　マジで!?　どうなっているんだ!?

現実で吸血鬼と遭遇するなんてあり得ない！　あり得ないよっ！

さっきまで普通のお姉さんっぽかったのに!?

「はぁ～……、いい匂い……」

吸血鬼のお姉さんがなにやら呟いている！　爛々と輝く真っ赤な瞳が俺の首筋をロックオン!?
「あああ……」
俺の口からは情けない声しか出ない。もうガクガクでブルブル！　腰が抜けてまったく動けません！
「怖がらなくていいのよ……お姉さんが気持ちよくしてあげるから」
無理です！　怖い！　怖いです！
お姉さんの顔がゆっくり首筋に近づいてくる！
誰だよ!?　川まで月見みしに行こうって言ったバカは!?
誰だよ!?　小学生のクセして親が留守だからって内緒で夜中に出かけたヤツは!?
俺です！　俺ですね！
もうっ！　なんでよりにもよって怪物と出会っちまったんだよおおおお！
とうとう首筋まで迫ったお姉さん！
首筋に生暖かな吐息があたってます！　誰か、誰か助けてぇえええええええ～！
「はぁあああ……ほんと、いい匂い……。うふふ、それじゃあ、いただきます」
カプ……。
いったぁあああああああああああああぁいいいいいいいいっ！

「うく……うく……ペロっ、――ふぅ、やっぱり美味しっ」
嬉しそうなお姉さん！　でも俺、すごく痛いから！　っていうかのしかかられて重……っ！
「むっ。――んぐ、うぐ、んぐ……」
ぎゃあああああああ～！　どんどん飲まれてる～！
死んじゃう！　そんなに飲んだら死んじゃうからやめてぇぇぇぇぇ！
「んっ、うふふ……」
1分か、10分かは分からないけどようやくやっと離れてくれた……。
河川敷の草むらに仰向けで倒れている小学2年生。
吸血鬼に襲われ、現在体にはまったく力が入らない……。
そういや恭也さんが吸血鬼に噛まれた人間は、吸血鬼になるって言ってたじゃん!?
このまま寝たら日の光を浴びて死んじゃうんじゃない、俺!?
ヤバイ！　ヤバイよ！　俺、まだ7年ぐらいしか生きていないのに死んじゃうなんて嫌ぁぁぁぁぁぁ～！
「あらあら、泣いちゃって、何か怖い事でもあったの？」
あなたが俺の怖いものです！　吸血鬼のお姉さん！
「ペロっ……うふふ、涙まで美味しわね」

そう呟きながら俺の涙を舐めてくるお姉さん！　俺、もう気絶していい!?　気絶していいですか!?

ゴソゴソ……。

「あらあら、まだ子供なのにこっちの方は……より大きいわね」

まだ何かするつもりですか吸血鬼のお姉さん!?　っていうかズボン脱がさないで！

オチンチン見ないでぇえええええ！

「あああ……いけないことなのに、いけないことなのに我慢できないわ……。皮被ってていい匂いで、こんなに美味しそうなのにお預けなんて無理よ」

「あうっ……」

お姉さんにオチンチン掴まれた!?　お姉さん何するの!?　ああっ!?　オ、オチンチンが……オチンチンが！　食べられたぁあああああ～～!?

「うちゅ……じぶっ……はぁあああああ～……」

口のなかでもごもごされる！　ヌルヌルで熱くて、牙があたって少し痛い！　それになんか変な感じがする！　と、口を離してくれた？

「私の口で大人にしてあげる」

あひゃあああああああああああ！　痛い！　痛いです！　オチンチンの皮のなかにお姉さんの舌が入ってきたぁあああああ！

「うふふ、これで大人ね。――あら？　こっちも可愛いわね」
皮が剥けてグロいピンクが見えた……。それと嬉しそうに玉袋を握るお姉さんも……。
もう、どうにでもしてください……。

◆

「うふふ、どう？　私の体は。結構スタイルには自信があるのよ？」
月明かりで白い肌が輝いてます。お母さん以外の裸初めて見た。
「お姉さんも気持ちよくしてあげてるんだから、君もおかえししてね？」
ふがっ!?　顔の上にお尻乗せるって酷い……。
「ほら、しっかり舐めないとまた血をいただくわよ～」
わかりました！　わかりましたから顔に擦り付けないでぇええ！　顔がヌルヌルしたのついてるから！　一生懸命舐めますから～！
「うふふ、そう……、そうよ。隅々までオマンコを舐めるのよ。私もオチンチン舐めてあ

げてるんだから」
　１０分以上舐めさせられて、舐められた……。
「あらあら、オチンチンがまたビクビクし始めたわね？　今度は何がでるのかしら？　さっきはおしっこだったから、今度こそ精子かしら？」
　オチンチンがっ！　マジでヤバイ！　破裂しちゃう！　何したんだよこの吸血鬼～！
「ほおら、これならよく見えるでしょ。お姉さんの厭らしいオマンコがあなたのオチンチンを食べると・こ・ろ」
　それより瞳の輝きがヤバイです！　いや、お姉さんの股にのみ込まれていってるオチンチンの方がヤバイです！
「んく……、はぁうんっ。ほんと大きいわね……んっ！　ふふっ、やっと先が入ったわ。いくわよ？」
　どこに!?
　ずぶぶぶっ！
　あうぅっ！　オチンチンが全部のみ込まれたぁあああああ!?　熱っ！　すごく熱いっ！　オチンチンがとけるぅうううう！
「あふぅぅ……、子宮にゴリゴリあたってるわ。ふふっ、これは本当に当たりだわ」

お姉さんの手が俺の上着のボタンを全部外す！　やめてぇえええええ！
「うふふ、本当に可愛らしい。ほら、お姉さんの吸ってみる？」
お姉さんが前かがみになっておっぱいを顔の前で揺らしてくる。
「ほら、美味しいわよ～」
口もとに乳首を差し出してくるお姉さん。ガクブルで従順な犬になっているからお姉さんの言う通り乳首を吸い始めた。
「あははぁ……」
嬉しそうな声が上から聞えてきた。こちらはというと、乳首を吸うことが、現在唯一の癒しというか、安心感になりました。赤ちゃんのころを思い出すってこの事なんだろう……。
怖さを忘れるように両手で抱きついて、おっぱいを吸う！
「あらあら、そんなにおっぱいが吸いたかったの？　うふふ、可愛いわねぇ」
聞えない！　俺には何も聞えない！　目を瞑れ！　口のなかのものしか感じるな！
「ん～、まだ吸わせてあげたいけど、ここはお外だし、見つからないとも限らないから、ね？　そろそろお姉さんをイせてくれないかな～って」
背筋に感じた悪寒！　仰向けでのしかかられていた状態から、お姉さんは腕立て伏せをするように両手を地面に立てて、後ろに倒れた。

股を開いたお姉さんにのしかかるような格好になってしまった。
そのままがっしりお姉さんに両手両足を使われて捕獲された。テレビでよく見たクモが獲物を捕食するような感じです。
「ほら、腰を動かしなさい」
え？　何を言って……。
「こういう風に前後に腰を動かすのよ」
ほらほらと腰を前後に揺するお姉さんっ！　オチンチンが捩れて絞めつけられて、舐められて、頭が爆発しそう……。
「ほら、さっきので分かったでしょ？　私に全てをぶつけるつもりで腰を振るのよ」
さあ、っと大きく股を開くお姉さん。腰を振りやすいように少しだけ腰を持上げてくれているけど、感謝はしない！
もう自棄だ！　がむしゃらに……もう自棄なんだ!!
何も考えない！　もうどうにでもなってください！
お姉さんのおっぱいを抱いてがむしゃらに腰を振る！　頭が真っ白になりそうだけど、もう関係ない！　どうにでも、どうにでもなってください！
「あはっ！　やる気になったのね！　ぅんん……、いい！　いいわ！　すごくいいじゃない！」

すごく嬉しそうなお姉さん！　無理やり顔を起こしてキスしてきたよ！

……ああ、俺の初めてのキスが、吸血鬼……。

痛っ!?　って牙で唇傷つけられた!?　お姉さんの舌が入ってきて口のなかを舐められる！

「あぁぁん！　もう我慢できない！　どうしてこの子の血ってこんなに美味しいのよ！」

うぎゃ!?　今度はまた押し倒された!?　ほんとになんなんだこの吸血鬼のお姉さんは!?

「うぶぶっ!?」

またキスされたと思ったら、舌を吸われた！　っていうか血も一緒に吸われてる!?

「じゅる……あふぁあ、うく……はぁぁんっ、美味しいし、気持ちいいぃ……！　あはぁあ……」

今度はお姉さんにのしかかられるという、まったく逆の格好になって、ぐちょぐちょと変な音がつながっているところから聞えてきた。

っていうかお姉さん激しいよ！　ほんとに！　もう……！　何かがで、出ちゃう……から！

「うふふ、我慢しないでいいのよ。我慢しないでお姉さんの子宮にたっぷり注いでしょ

うだい」

お姉さんがキスをしながら囁いてくる！　お姉さんの真っ赤な瞳がさらに輝いたところで、俺のオチンチンは爆発した。

「あああああぁぁぁあああああああああああ！　――ああっ！　熱い！　それにこの快感！　うふふ！　うふふふふっ！　あはははははははははは！」

オチンチンが跳ねて何かが出るたびに嬉しそうに両手で体を震わせる吸血鬼のお姉さん。嬉しそうな高笑いと怪しく輝く真っ赤な瞳をどこか他人事のように見ながら俺は意識を手放した……。

◆

〈月村　忍〉

どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう……！

場所は河川敷。

私は裸。

私の下には押し倒されて、虚ろな瞳を開けたまま気絶している、服が乱れた小学生ぐらいの小さな男の子。

さらに言い訳できないように私と彼のアレはしっかりつながっていて、私のオマンコから白いのがもれ出ている……。

そして思い出すように蘇っていく記憶。

眠れなくて満月のしたを散歩していた時に、河川敷で小学生ぐらいの子供を見つけて、時間も遅いから呼び止めて注意しようとした時、怒られると思って焦っているようすだったこの子の体から、すごくいい匂いが漂ってきて……。

確かめるように嗅いでいく内にだんだん自分が抑えられなくなった……。

すごく美味しそうな匂い。男の子に出来ていた擦り傷から滲んだ血が私の、夜の一族の細胞を刺激して、つい襲ってしまった。

発情期が2日後だったし、不意打ちで、この子の血が普通の輸血パックや恭也の血よりもすごく美味しい事が重なってしまって犯してしまったんだ。

ああ……本当に自己嫌悪……。

まさか私が小学生低学年みたいな小さい子を逆レイプしちゃうなんて……。

んんっ……。

ああ、そういえばつながったままだったわね……。

ずぶぶぶ……じゅぶ……こぶぅ……。
あふぅ……。男の子の精子が漏れちゃった。
ああ、本当にいい匂いね。ペロ……味もすごく美味しいし……。
あらあら、オチンチンがベトベト……綺麗にしないと。
「ごめんね」
拭くものも無かったし、オチンチンを舌で舐めて綺麗にしてあげる。
「ああ……本当に美味しいわね。んむ……んじゅゅっ、味もまだ薄いけどこれから大きくなっていけば……」
……ああっ!? 私ってば何を考えてたの!?
それよりも今は男の子を介抱するのが先でしょ！
レイプ目で気絶してるんだから！ 助けないと！ それよりこの子の事をノエルにどう説明すれば!?
「忍お嬢さま～！ どこですか～!?」
っ!! ノエルが私を探しに!? 少し散歩しに行くとしか言っていなかったし、探しに来るのは当然ね。
声の聞えた位置からまだかなり距離がある！ ここを探し当てるまで時間がある！
即座にオマンコに手を入れて精子をかきだす！ 気持ちいいし、精子が勿体無いけど

我慢しなきゃ！

散らばった衣服を集めてショーツとブラジャーを装着！　上着を着て、スカート穿いて、髪型を整える！

ふうっ、完璧ね。

次にレイプ目の空ろな男の子の目をそっと閉じて、肌蹴た衣服を整える！　う～ん、それにしてもよくあんなサイズのものがパンツに収まるわね。ズボン越しでも大きいの分からないし、謎だわ。

「忍お嬢さま～！　どちらへ行かれたんですか～！」

そろそろこっちへ来るわね。

男の子をおんぶしてノエルの声のする方へ向う。

「忍お嬢さま、その子は？」

「……ん～。血を吸っちゃった。テへっ」

「……」

あら？　首を少し傾げてウインク＆舌出して、優しく頭をコツンすれば大抵の事は笑って見過ごしてくれるんじゃなかったかしら？

「顔色が最悪です。とにかく輸血ですね。忍お嬢さま、私が代わりに背負います。急いで屋敷に帰りますよ」

「……はい」

第1話　満月の夜のトラウマ

雲ひとつ無い満月の夜。
紫色の髪鋭い牙と真っ赤に輝く瞳、お姉さんの裸。
創造の産物であるはずの吸血鬼が舌舐めずりをしながら俺にゆっくりと迫ってきた。
首筋に噛みつかれ、痛みを感じながら血を吸われる。そしてオチンチン食べられた……。
夢のなかで繰り返し蘇る断片的な記憶。
お姉さんの怪しい真っ赤な瞳と淡く輝く紫色の髪。
嬉しそうに吊り上がる唇。
体を弄られ、オチンチンを舐められて、女の子の股にオチンチンが食べられた。
吸血鬼のお姉さんは俺をおもちゃのよう扱い、どんどん体が変な感じになっていって、頭が真っ白になっていって……。
――あはははははは！
「うわあああああああああっ!?」
俺は叫び声をあげて目を覚ます。

「……はぁはぁ……はぁはぁ……はぁ……はぁ～……」

最悪の気分だ。荒い息を落ち着いて整える。

もう本当に最悪だ……。

少し前から満月の夜に毎回見るようになった夢。

吸血鬼に襲われる夢。

もうなんなんだよ……。

俺は私立の小学校に通うごく普通の小学生なんだぞ!?　名前も中村　拓也って普通なのに、いったいどうしてあんな夢を見るようになったんだ？

「もう嫌だ。忘れたい……。吸血鬼に襲われる夢なんて見たくねぇよ」

しかも、夢の最後は絶対吸血鬼のお姉さんの高笑いとか、最悪の起こされ方だし……。

「拓也～！　そろそろ起きなさ～い！」

お母さんの声。

「もう起きてるよ～！」

正直、お母さんに起こしてもらいたかった……。

パジャマから小学校の制服に着替えるためにだるい体を起こした。

ああ……あの夢を見たあとってオチンチンが腫れて痛いんだよな……お父さんお母さんは病気じゃないって言ってたけど……。

ほんとに最悪だ……。

◆

「行ってきま～す」
「気をつけていくのよ」
「は～い」
自宅のマンションから出て、小学校へ向うバス亭まで歩き、バスに乗り込む。
ここから学校まで３０分ほどバスに揺られる事になる。
「おはよう、中村くん」
いつもの先客がバスの一番後ろの席に座っていた。
「おはよう、バニングスさん、……月村さん」
同じクラスの外人みたいな金髪のアリサ・バニングスさんと、紫色の髪をした月村すずかさん。
あと１人、高町なのはっていうヤツがいて、３人はいつも一緒にいる。学校では仲良

し3人組と認識されてる。
他の友達ともあいさつを交わして開いた席に座ろうとするが、ここで問題が……。
席が後ろ側しか開いてない。
いや、バニングスさんや月村さん、それにその間に指定席のように座るのはも可愛いから学校でも人気だし、近くに座るのが嫌ってわけじゃないよ？
自分でも3人ともすごく可愛いって思うし……。
でもね、でも……。
「どうしたの中村くん？　座らないの？」
なかなか座らない俺に声をかける月村さん。そう、この子が問題なんだ。
大問題なんだ……。
「どうしたの？」
「はっ！　はい！　何でしょうか!?」
「バス出発するよ？　座らないと危ないよ？」
「そ、そうですね！　座ります！」
仕方無しに最後尾の1つ前の席、もちろん月村さんから一番離れている位置に座る！
「ねえ、中村くん」
「何？　バニングスさん？」

視線を前に向けたまま返事をする。
「あんた、最近変じゃない？」
「変？　何が？」
「まあ、変なのは前からだったけど、最近あんた、すずかのこと避けてるでしょ？」
なっ!?　なぜバレタ!?　おかしいところなど１つもなかったはずなのに!?　っていうか前から変って失礼な！
「そんなことないよ～？」
俺はまったく動じずに答える。さてと、昨日借りた本を読まないと。
ぐいっ。
「いだっ！　何するんだよ！」
髪を引っ張られた！　絶対１０本は抜けた！　マジで泣きそう！　酷いよ！　マジで酷い！
「あ、ゴメン。――って、それより、なんですずかを避けるか言いなさいよ」
表情を消して平然と返す！　怪しまれないようにな！
「避けているつもりはな――」
「――いわけがないでしょ」
断言ですか……。

バニングスさんが指をさしてきた。
「あんた本逆さまに読めるの？」
「あ、や……」
クソ！　慌てすぎだぞ、俺！　本を逆さまとかどれだけベタなんだ!?
即座に直して読み始める！　１２×３２……算数の教科書……うん、分からない。
本を閉じて鞄にしまう。
「さて――」
学校に着くまで寝るから、着いたら――。
「ねえ、どうして中村くん。どうして避けるの？」
言おうとしたら月村さんがとうとう参加してきたぁあああああ！　絶対に後ろを見るんじゃない！　見ちゃダメだぁあああ！
「こっち見なさいよ！」
い、や、だ！
「ねえ、こっち見て話そう」
「……はい」
月村さんには逆らえません……。
「え、えっと何？　なんですか？　月村さん」

「どうして避けるの？」
　不安げに、悲しそうに訊いて来る月村さん。ゴメン、なんか申し訳ない気持ちになるけど……。
　ここは正直に――。
「……いんだ……」
「え？」
「聞えないわよ！　何？　はっきり話しなさいよ！」
　聞えていた風の月村さん。だけどバニングスさんには聞えなかったみたいだ。もう一度言う。
「月村さんが怖いの……」
「はあ？」
　意味不明と眉を歪めるバニングスさん。こちらを見たあと、月村さんの顔を見て訊ねた。
「すずかが怖い？　なんで？　何かしたのすずか？」
「わ、私はなにも……」
　うん。月村さん自身が怖いわけじゃないんだよ。
「それが……、最近夢を見るようになって」

「「夢？」」

首を傾げる2人。俺はうなずいてから話し始める。

「うん。吸血鬼に襲われる夢を、ね……」

「吸血鬼？」

「――っ！」

バニングスさんは眉をひそめて、何を言ってるんだという表情になり、月村さんはビクッと体を跳ねさせた。

「その吸血鬼がすずかに似てるって言うの？」

バニングスさんは俺の言いたい事を先読みして言った。さすが学年1位の学力を持つバニングスさんだ。

俺はうなずいて打ち明ける。

「そうなんだ。夢で薄く光る紫色の髪の、真っ赤な目をした吸血鬼のお姉さんに襲われる夢を見るんだ……」

「紫色の髪に真っ赤な目ね～。紫色の髪は確かにすずかの特徴だけど……」

「……」

じろじろと月村さんの髪を見るバニングスさん。月村さんは何か考えるように無言で俯いている。

「ねえ、中村くん」
　月村さんが話しかけてきた！
「な、なんですか？」
「ん～、とりあえず敬語はやめて」
「は、はい！　――いや！　うん！　わかった！」
　ニッコリうなずく月村さん。――すごい迫力っ！
「その吸血鬼のお姉さんって私にそんなに似てるの？」
「え、あ……紫色の髪ってのが似てる。顔は目がずっと赤く光っててわかんなかった……」
「それでなんでそんな夢を見るようになったの？」
「それは――」
　記憶を探る……。え～と……確か。
「そう！　高町さん家の恭也さんに本とビデオ借りたときだ！」
「本とビデオ？」
「吸血鬼が出てくるヤツですごい怖かったのをよく覚えてるんだ……」
　恭也さんに借りた本とビデオの内容を思い出す。ああ……ほんとに怖かったな……。
「どんな内容だったの？」

バニングスさんが気になると聞いてきた。
「確か……ビデオではバンパイアのハーフで、バンパイアハンターの男の人がバンパイアたちと戦うヤツで、始めからバンパイアが何人も血を吸って殺してた……。お父さんもお母さんもいなかったし、恭也さんに1人で見てみろって言われてて……正直見たことを後悔したよ……本の方も同じような感じで吸血鬼が人を襲う話だった」
「それは怖そうね……」
「……」
同意するバニングスさん。だけど、月村さんは難しい顔をしたままだ。
「ほらこの本を借りたんだ……」
「ずいぶんと分厚い本ね」
「え～と……これ」
俺の取り出した本は分厚い大きな本で表紙には月明かりに照らされた、真っ赤な目の女の人が口から血を流して微笑んでいるものだ。
「うわああ……」
「……」
手にとってパラパラと読み始めるバニングスと、何ともいえない表情で表紙を睨む月村さん。

「ちょっとこれ、まだ習ってない漢字ばかりじゃない。あんたに読めるの？」
　意外そうに訊いて来るバニングスさん。失礼な！
「読めるわけ無いだろ。お父さんとお母さんに読んでもらったんだよ」
　頭のいい君たちと違って中の下から下の上ぐらいだからね！　普通に読めません！
「威張って言うことじゃないわよ……」
「こんな難しい本すらすら読めるのはバニングスさんぐらいだよ」
「そりゃあ……塾に通っているし……あ、すずかも読めるわよね？」
「あ、ああ、うん」
　そういや、月村さんっていつも分厚い本読んでたなぁ～。
「じゃあ、あんたは恭也さんに借りたビデオと本読んで、夢ですずかによく似た女の人に襲われたから、すずかを避け始めたの？」
　呆れたようなバニングスさん。
「そ、そうだけど……」
「バッカじゃないの？」
「いや、そ、それは……」
「そんなんですずかを避けるなんて酷いとは思わないの？」
「そ、それは……ごめんなさい……」

「私に謝ってもしょうがないでしょ。勝手に避けられたすずかに謝んなさい」
「ご、ごめんなさい。月村さん」
座席に座って土下座する。
「え、あ、べ、別にいいよ。中村くん……」
気にしていないと微笑む月村さん。どこかまだ悲しそうだった。ほんとにごめんなさい……。
「なにしてるの？」
後ろから聞えるお馴染みの声。姿勢を正してあいさつをする。
「おはよう、高町さん」
続いてバニングスさんと月村さんもあいさつをした。
「おはよう、なのは」
「おはよう、なのはちゃん」
「おはよう」
と、なのははバニングスさんと月村さんの間の席に座った。
「なにしてたの？」
なのはが尋ねてきた。
「なにって謝罪？」

「謝罪？」
「うん」
「そーなんだ」
　会話終了。
「ってそれだけなの!?」
　溜まらないとバニングスさんが席から立ち上がって怒鳴ってきた。
「それだけって……」
　他に何が？
　首を傾げる俺となのは。バニングスさんが拳を目の前で握り締めながら話し始めた。
「もう！　あんたらは！　最近中村くんがすずかを避けてたみたいだから、避けていた理由聞いて謝らせたのよ！」
「ああ、そういえば！　なんで避けてたの？」
　はっと気づいた様子で訊ねてくるなのは。バニングスさんがすぐに答える。
「恭也さんに借りた本とビデオで怖い夢見て、怖い夢に出てきたヤツがすずかに似てたから避けてたそうよ」
「ああ……。拓也くんってホラー系嫌いなのによく読んだり、ビデオ見たりしてるもんね～」

呆れたように言うなのは！　バニングスさんに続いて呆れられた……。
「お兄ちゃんも拓也くんにホラー系の本とか貸すから、どうせまた何か怖いものが出来たんでしょ。今度は何？　この前は狼男が怖いって犬怖がってから、今度はゾンビ？　吸血鬼？　それともフランケンシュタイン？」
「――なっ!?　おまっ！　それは秘密だって――」
なのはの口を塞ごうとするが距離が遠くてダメだ！　月村さんもいるからなお、無理！
「へぇ～、中村くんってすごい怖がりなんだぁ～」
「狼男の本読んで、犬が怖くなったの？　――ふふ」
バニングスさんが嬉しそうな顔でこちらをニヤニヤ見てきた……！　そして月村さん！　その質問！　そして最後に気づかれないと思ったか!?　笑いやがったな!?　クソッ！
「そういえば秘密だった！」
今頃口を塞ぐなのは！　だから……だから――。
「だからおまえは近所の高町さんになって、高町さんから卒業できないんだ」
「にゃ!?　そんな理由でなのはって呼ばなくなったの!?」
驚くなのは。そんな理由だと!?　俺の秘密を暴露しまくったヤツがそれを言うのか

!?　もう知らん！

丁度学校にバスが到着したようなので、さっさと出口に向う。

「じゃあね、近所の高町家の高町さん」

「うう～……！」

後ろで唸っているようだけど、無視！

◆

バスから降りて授業が始まり、早４時間目ももうあと１０分で終わろうかというところ。

俺は蛇に睨まれたカエルのように固まっていた。

始まりは授業開始。

背中に鋭い視線を感じたんだ……。

視線を感じる場所は真後ろ……一番端の窓側、後ろから２番目の席に座る俺の後ろは月村さん。月村さんしかいないんだ……。

まるで嘗め回すような視線が朝から続いていた。
当然、1時間目から4時間目まで「視線を感じるんだけど、どうしたの？」とかやんわり注意するチャンスもあったけど、吸血鬼に完全にビビッてる俺ではそんなこと言えるわけもなく視線に耐えていた。
で、手鏡を持っていなかったから窓ガラスの反射で後ろの席の月村さんの様子を覗いて見ると――。
月村さんはまるで美味しそうなケーキをどこから食べようかなと悩んでいるような、ヤバイ顔で俺を眺めていたのだ。
何この子、超怖いんですけど!?
しかも、なにやら後ろから、はぁはぁ聞える！
身の危険を感じて体から嫌な汗が出ちゃう！　さらにおしっこちびりそうになったところで、午前の授業が終わった！
終了と同時にバニングスさんがいつものように月村さんを昼食に誘いに来た。
――ここだ！
逃げろ！　トイレへ急げ！
俺は戦略的撤退を行った……午後はそのときになってから考えよう……。

◆

授業中。私はずっと前の席に座っている中村くんを眺めていた。
最近、中村くんに避けられ始めたのは気づいていた……というか、あからさまに避けられていたからね。――本人は気づかれていないつもりだったようだけど……。
はぁ……。
それにしても避けられていた原因がまさか恭也さんだったなんて……。
しかも、吸血鬼が怖くなって、私が夢に出てくる吸血鬼に似てるから怖くて避けてたなんて、『夜の一族』っていう吸血鬼みたいな一族の私は笑えない。
中村くんに私が吸血鬼だってバレたら絶対怖がられるよ。
恭也さんもなんでお姉ちゃんと付き合ってるのに、吸血鬼に悪いイメージを持たせるようなものを中村くんに貸すの？
はぁ……。
それにしても中村くんってそんなに怖がりだったんだ。私自身クラスであんまり喋

るタイプじゃないから知らなかったなぁ～。
ふふっ、でも狼男が怖くなって犬を怖がったって、フランケンシュタインを読んだら人形を怖がるようになるのかな？
う～ん……どうなんだろう？
試してみたいような気もしないでもないな～。
……それにしてもいい匂い……。
何の匂いだろう？
中村くんから匂ってくる……。
香水かな？　でも小学生が香水つけるかな？　そういえば、避けられ始めてからいい匂いがし始めたんだよね。
本当に何の匂いだろう？
はぁ……、美味しそう……。
――っ!?
今いったい私は何を……!?
な、中村くんの血が吸いたいって思っちゃった？
「……か！　すずか！　すずかってば！」
「――っ！　あ、はい!?　――って、アリサちゃん」

「どうしたのよ、すずか」
「いや、な、なんでもないよ」
　はぁ……危なかったぁ……。
「ほら、昼休みよ。屋上に行きましょ」
「うん」
　中村くんはいつの間にか消えてた……。いい匂いの正体……知りたいな。

第2話　さすがの恭也さんも、美由希さんの魅力には敵わない

午後の授業も華麗に気に抜けた俺は校門のバス停でバスを待っていた。

「あれ？　拓也くんも今帰りなの？」

後ろから声をかけられた。振り返ってみるとなのはと、バニングスさん――と、月村さんだった。

くっ！　まさかバスの時間が重なるなんて……！

こいつらいつも教室に残っていたはずなのに今日に限ってなぜだ!?　それに帰りはあまりバスを利用しなかったんじゃないのか!?

俺の疑問に答えるように、なのはが話し始めた。

「もう、いきなり帰るんだから急いできたんだよ」

「は？　急いで？　なんで急ぐ必要があるんだ？」

「え？　今日家のお兄ちゃんに本返しに来るんでしょ。それに道場で遊ぶって聞いていたけど？」

「なんで高町さんがその事を……？」

俺は言っていなかったはずなのに!?
「お兄ちゃんが言ってたよ」
「恭也さんが!?」
なぜだ!?　なぜ言ったじゃないですか恭也さん!?　秘密の特訓だからカッコイイのに、話したら秘密の特訓じゃなくなるじゃないか！
「むう……お兄ちゃんは名前……。もう！　なんで私だけ苗字で呼ぶの!?」
「そうよね。同じクラスだし、いい加減名前で呼び合ってもいいんじゃない？」
「うん。そうだよね」
お怒りのなのは。そこに便乗するバニングスさんと月村さん。
「え、い、いや……それは――」
「昔は普通に『なのは』って呼んでたのに……」
涙目のなのは。……うっ。なんか悪いことしているみたいな気分になってきた。
と、そこでバニングスさんが詰寄ってきた。腰に手を当てて人差し指を突きつけてくる。
「なにか名前で呼べない理由でもあるの!?　言ってごらんなさいよ！」
校門の前で大声出すから、周りまで騒ぎ始めた！
っていうか、バニングスさんの瞳がヤバイ。外人さんの青い瞳に見つめられると何で

もはいてしまいそうになる……。
　それに、ここで言わないなんて無理だ……。
「さあ、言いなさい！　さあ、さあ、さあ！」
　どんどん詰め寄るバニングスさん。顔が近い。
「う、あ……、だ、だって、お、女の子を名前で呼ぶなんて恥ずかしいじゃん……」
「「はあ？」」
　くっ！　正直に答えたのに！　3人ともポカンとなった。
「恥ずかしかったから、いきなり『高町さん』って呼び始めたの？」
「女の子を名前で呼ぶってなんか恥ずかしいって」
「恥ずかしいんだ」
　なのはにバニングスさん、月村さんがニヤニヤこちらを見つめてきた！　クソぅ……。
　それからニヤニヤ3人娘に弄られること5分後に、やっとバスが到着し、解放された。
――一時的にだけど……。

◆

目的地に一番近いバスから降りる。
「ちょっと！　あんた待ちなさいよ！」
速攻でバスを降りて逃げようとしたところを、バニングスさんに呼び止められた。その後ろには高町さんと月村さん……。
「なんですか？」
目的地に向いながら聞く。もちろん早歩きで。
「なにってあんた！　目的地が一緒なんだから、一緒に行けばいいでしょ!?　なんで１人で先に行くのよ！」
グイっ！
「ぐへっ!?」
いきなり首根っこを掴まれた……、一瞬目の前が真っ白になったんだけど!?
「なにするんだよ!?　マジでさっき息止まったぞ！」
「あ、ゴメン……」
ぱっと手を離すバニングス。だけどすぐに気を持ち直して問い詰めてきた。
「――って、それよりさっきの話よ！　何で１人で先に行くのよ！」

「男1人で女の子と、それも複数と一緒に歩くなんて出来るか！」
　それも学校で人気のある3人と一緒に、しかも、そのなかの1人の家に行くなんて恥ずかしすぎだ！
「はぁ……、まったくあんたは……」
「どうしてこうなっちゃったんだろう？」
「ふふっ……可愛い……」
　やれやれと呆れた風のバニングスさん、首をかしげながら苦笑いするなのは……、そして明らかにお姉さんやお母さんみたいな、年上の雰囲気を漂わせながら微笑む月村さん。
　こいつらほんとに恥ずかしくないのか？
　っと、ここで１００m先の前方によく知った人を発見した！　俺は足に力を込めて走り出す！
「あっ！　中村くん！」
「拓也くん!?」
「？」
　後ろで3人組みが何か行っているが関係ない。無視して飛び出す！
「恭也さ～ん！」

「ああ、拓也か」
　あちらが認識したところで鞄から本を取り出す！　そして――その本で殴りかかる！　狙いはとどいてダメージが大きい腹だ！
「覚悟ぉおおおおお！」
「ふっ、甘い」
「くっ……！」
　腹を打ち抜こうとした本を冷静に受け止められた！
「まったく……随分と手荒い返却方だな。そんなに怖かったのか、ん？」
「すごくっ……！　すごく怖かった！　それに変な夢まで見るようになったし、最悪だ！」
「ははは、それはよかったな」
　いい笑顔で微笑む恭也さん。俺がこの本のおかげでどれだけ悩まされているかを知らないのか！
「あら、たっくんじゃない。早かったわね。家に帰らずまっすぐ家にきたの？」
　と、眼鏡三つ網ポニーの美由希さんが話しかけてきた。あ、いたんだ。
「こんにちは、美由希さん。道場で新技試しに着たよ」
「うふふ、また漫画とかの技？」

ぐしゃしゃと優しく頭を撫でてくれる。この人料理は破壊的だけど優しくて好きだ。
「うん！」
元気よく返事をする。
「やれやれまたか」
恭也さんは腰に手を当てて苦笑してる。
……。
う～ん……美由希さんは学校帰りっぽくてセーラー服か～。
……よし。今日こそ恭也さんを倒してこの体にうずまくムカつきを全部発散させてやる！
そうと決まれば！　がばっと顔を上げて恭也さんを睨む！
「恭也さん！」
「ん？　どうした？」
「今すぐ勝負して！」
「さっき帰ってきたばっかりなんだが？」
「今すぐっ！　勝負して！」
服を掴んで頼む！
「いいじゃん！　勝負してよ～！」

「着替えてからでもいいだろう……」
めんどくさそうな表情になった恭也さん。美由希さんがこちらをフォローしてくれた。
「いいじゃない、恭ちゃん。勝負してあげたら？」
「さすが美由希さん！　そんな美由希さんが大好きです！」
恭也さんから手を離して、美由希さんの手を取る。
「どうしよう恭ちゃん。告白されちゃった～」
微笑む美由希さん。冗談だと分かっているだろうけど、若干頬が赤い……ような気がする。
ん～。やっぱり美人だよな～。
――ゾクっ！
背後に何か寒気を感じた！
何だ!?　何が……。
「へぇ～、拓也くんってお姉ちゃんが好きだったんだあ。だから私のこと名前で呼ばなくなったんだあ」
ヒッ!?　こ、怖っ！
背後にいたのはいつの間にか近くまで着ていた３人組。そして俺が絶賛恐怖を感じ

ているのは、なのはだった。
　ていうか、マジで怖い！　笑顔なのに、笑顔なのに、細められた瞳はどんより濁っていて、ものすごい迫力を感じた！
　急いで美由希さんの後ろに隠れる！
「ちょっ!?　たっくん!?」
　戦闘力では恭也さんよりも低い美由希さんだけど、恭也さんはシスコンだから対高町さんには使えない。だから美由希さんの後ろに隠れる！
「……美由希さんバリアー」
「なんで私を盾にするの!?　大好きじゃなかったの!?」
「俺を守ってくれる美由希さんが大好きなんです」
「普通男の子が女の子を守るんじゃないの!?」
「でも美由希さんは女の子の前に武人だから。恭也さんも女としてみるなって言ってたし」
「恭ちゃ～ん!?」
「だから美由希さん、俺を守って」
「い～やぁあああああ！」
「――ねえ、ふざけてないで、いい加減お話ししよう」

「「ヒッ!?」」
　完全に美由希さんと俺のやり取りを無視して、目の前まで接近したなのは！　その目はドス暗く、「先に道場に行ってるからな～」と恭也さんも逃げてしまうほど、怖ろしかった……。
「じゃ、じゃあ、私も……、じゃあね！　たっくん！」
「なっ!?　美由希さんまで!?」
　どうしよう！　盾が無くなった！　しかも、恭也さんへの復讐の手段が無くなった！
「ねえ、お話ししよう？」
「た、高ま――」
　――そっ……。
　優しく頬に添えられる高町さんの左手。温かいのに、暖かいのに、冷たく感じる……。
　ど、どうしよう!?　恐怖で体が動かない！
　なんはの口がゆっくりと動く。
「な、の、は」
　……へ？
　しっかりと目を正面から見られる。
「『なのは』って呼んで」

「いや――そ、それは――」
目を離そうとしたが、なのはの左手と濁った瞳が動くのを許さない！
「私、ずっと我慢してたんだよ？　いきなり『なのは』って呼ばれなくなって」
「うっ……」
「私、悲しかったんだよ？　何か悪いことでもしたのかな？　って考えたり、悩んだり……、理由を話してくれるまで我慢しようって決めてたのに……名前で呼ばなくなった理由が『恥ずかしいから』って」
でも小学校に入ったら女の子と遊んだり、名前で呼び合ったりするのは恥ずかしいんですよ……？
さらに右手が添えられる。もう足がヤバイです。迫力に負けて倒れそう……。
「ねえ、拓也くん」
「は、はひっ！」
口が回らない！　ここまでビビッタのはあの夢を初めて見たとき以来だ！
「これから『なのは』って呼ばなきゃ、――本気で怒るから」
素敵な笑顔で宣言されました……。
「わかり、ました……。なのは……さん」
「なのは」

「わかりました。なのは」
「うん！　いいよ」
ぱっと手が離され、濁った瞳や暗いオーラも消えた……。
はぁはぁ……はぁはぁ……。
よく泣かなかった……よく泣かなかったぞ、俺ッ！

◆

『高町さん』から『なのは』と呼ぶように強制されてからすぐ、俺は逃げ出すように道場へ走った。
刷り込まれた恐怖を忘れるためだ。
ああっ、それにしてもマジで怖かったな。
……まったく、それにしてもなのはの迫力はなんだったんだ？
前に桃子さんに感じたものに近い迫力だったぞ？
はあ……。

それより、さっさと準備しよう……。
やっと完成した漫画の技を試せるんだし、嫌な事は忘れよう。
「おお、来たか」
「あれ？　士郎さん？」
なんで恭也さん達の父にして喫茶店翠屋オーナーの士郎さんがいるんだ？
「今日は翠屋が休みだからね。久しぶりに恭也と拓也くんの試合を観戦しにきたんだ」
「ん～、試合ってものでもないんですけど？　遊びだし」
「あはははは」
笑う士郎さんだけど、若干苦笑いな気がする。
まあ、別にいいんだけど。
「やっほー、たっくん。生きてたんだね」
「何気に酷い！」
ショックを受けて道場に倒れる！
「あはははは～、ごめんごめん」
「うう～……」
美由希さんがしゃがんで頭を撫でてくれるが、心は癒されない……。俺の恭也さんを倒す作戦がなくなっ――あれ？

ライトグリーンなものが視界に入った。
パンツだ。
あれ？　美由希さん、いつもジャージなのになんで？
コツンっ。
疑問に思いながら見ていると美由希さんに頭を小突かれた。痛い。
「まったく……、女の子に興味持つのは早いんじゃない？」
立ち上がり微笑む美由希さん。俺はふらりと立ち上がって美由希さんの両手を取る！
「ナイスです！　美由希さん！」
「ええっ!?」
完全に戸惑う美由希さんだけど、俺の心は燃えていた！　これで恭也さんに勝てる！
――かもしれない！
「お～い、始めないのか～？」
いつの間にか恭也さんが準備し終えていた。
「すぐに準備する！」
俺は急いで準備を開始した！

◆

準備が終わり、いよいよ始まりました俺ＶＳ恭也さん！
審判は士郎さん。観客は美由希さんに、なぜか仲良し３人組。
「拓也くん、がんばって～！」
「負けるとは思うけど、がんばんなさいよ、拓也！」
「拓也くん、がんばって」
３人で遊んでろよとは思うけど、応援してくれてるし、あっち行けとは言わない。
それより、美由希さんの位置を確認しておく。真後ろか。
「じゃあ、そろそろ始めようか」
「「はい」」
審判役の士郎さんが片手をあげる。
それと同時に戦闘態勢をとる。
恭也さんの武器は木でできた小太刀の二刀流。なんでも御神流とかいうもので、剣道とは違うものだという事は教えてもらった。

その流派には必殺技がいくつもあるらしいけど、見せてもらうだけで、教えてもらっていない。これは遊びじゃないんだって言われて。

まあ、技は知っているし、試合では使わないそうだから関係ないけど。

一方、俺は武器は士郎さんに貰った刀！

もう！　この重さがたまらない！

銃刀法違反になるだろうから、本物じゃない模造刀だろうけど、重さから鍔から刀身の輝きから本物っぽいんだ！

鞘もカッコイイし！

恭也さんの持ってる小太刀は木でできた木刀だけど、そっちもカッコいいんだよな～。

「……嬉しそうだな？」

恭也さんが真剣な表情で訊ねてきた。

「そりゃあ、当然！　漫画みたいな勝負ができるんだから楽しくないわけがないよ！」

「漫画って……」

「……あはは」

なのはのついでに名前で呼ぶ事になったアリサとすずかが呆れたように呟くけど、テンションマックスな今の俺には関係ないね！

「あははは……、拓也くんって昔から漫画とかアニメとかに影響されやすいんだよね～」
「別にいいだろ！　好きなんだから！」
強いのに憧れて何が悪い！　俺は漫画もアニメも好きだし、やれる可能性がある技なら試してみたいと思うのは当然だろ！
「始めるぞ」
完全に戦闘モードに入った真剣な恭也さん。おっと、忘れていた。
俺はゆっくりと鞘から刀を抜いて構える。
うう……大人用だし、長いから抜きにくいし、動かさずに構えたままはキツイ。
でも――。
「本の恨みも、これまでの恨みもあるから、今回はなにがなんでも勝たせてもらう！」
「――ふっ、いままで一度も勝ったことのないクセして……。――やってみろ、拓也」
――シンっと静かになって空気が変わる。
「準備はいいね？」
土郎さんの手が振り下ろされる！
「――では、始めっ！」

◆

「――では、始めっ！」

父さんの合図で始まった勝負。

俺は１８歳、相手は７歳。

そして俺は古武術、永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術の師範代で、相手はド素人小学生。

……周りから見れば子供を虐めているようにしか見えないが、俺は勝負で手を抜くつもりはない。

子供と、しかも相手は遊びだと思っているこの勝負では、流派の技を使わないと父さんと決めているので、俺の攻撃は純粋な二刀の小太刀による攻撃だが、それでも普通の小学生が避けたり防いだり出来るはずがない。

それに俺は師範代クラスの実力者。

だが俺の攻撃をこいつは軽く――ではないが、きちんと避けたり、防御する。こいつは決して普通の小学生ではないのだ。

「クソ！　ほんと子供にも容赦が無い！」

悪態をつく拓也。

一応かなり手加減してるんだぞ。まあ、今回はなのはたちの前で負けるわけにはいかないから、いつもより若干本気だが。

それに勝負の勝敗は一撃が入るか、気絶するかだから、不意に技を決められて負けるわけにはいかないんだ。プライド的にも……。

なので最初から離れさせずに小太刀で攻め続け、集中力を切らせる！

拓也は集中力が高くなったり低くなったりムラが大きいからな。そこを攻めさせてもらう。

「――っ！　もう！　仕方ないな！」

イライラし始めた拓也は俺の予想通り、回避や防御が疎かになり始めた。

――が、ここからが本番だ。

「とっておきを見せてやる！」

ほらな。

ばっと俺から離れた拓也は刀を真っ直ぐ上に軽く投げ、重力で真っ直ぐ落ちてくる刀を腰にさした鞘で受け止めた。まったく器用なヤツだ。

刀を鞘に戻した拓也は居合い抜きの構えをとった。

「――すう……」

呼吸を変化させ、異様な雰囲気を纏う拓也。
はあ……、今度はいったいなんの漫画だ？
いや、それよりなんで漫画で居合い抜きが覚えられるんだ？
一応できてる剣術の基礎もガンダム見て練習して覚えたヤツと言っていたし……。
いやいや、今はそれよりも集中だ。
あいつが居合い抜きの構えを取ったって事は、できるって事だ。油断は出来ない。
御神流の技はもちろん、虎の子の神速も封じられているし、不意の一発は怖い。
集中して周りの全てを消し、拓也を狙う！
「――っ!?」
拓也目掛けて攻撃を仕掛けようとした瞬間――拓也から動いた！
なっ!?　拓也から動いた!?　居合いはカウンター技じゃなかったか？
どんなとんでも技が飛び出すのかと、俺は距離を取って警戒したが、その警戒が無駄だった事をすぐに思い知らされた。
ガチャガチャッ……。
「あ、あれ!?　抜けない!?」
「……」
居合いの格好から刀が抜けなくて困っている拓也……。

最大の勝負となったところでのハプニング……。観客も、父さんでさえ呆れていた。
俺も高めていた集中が切れかけた。
まあ、冷静に考えてみれば当然か。
普通、小さな子供が大人用の刀を腰にさした状態から高速で、しかも滑らせながら抜くなんてこと出来ないよな。腕の長さ的にも。
「クソ！　予定が狂った！」
無理やり刀を鞘からだす拓也。ここで倒す事も簡単だが待ってやる。ここで攻撃して倒したら、なのはたちに怒られそうだからな。
「よし！　改めてとっておきを見せてやる！」
「さっきと構えが変わったが、それはいいのか？」
「別の必殺技使うからいいの！」
「そうか」
こいついくつ必殺技持ってるんだ？
「行くぞ！」
「こい！」
先ほどと違って正面から突っ込んでくる拓也。左手で刀の鍔近くの柄を持ち、右腕は力を入れずに流している。

なんだこの構えは？　右腕がないみたいな……。
「くらえ！　天！」
横に凪ぐ刀の一閃！　相変わらずド素人の子供とは思えない鋭さだ！
「――っ!?」
「地！」
横に凪いだ刀を戻しての二連激!?　なんとか避けられ――っ!?　まだ続いている!?
戻した刀を頭上に上げて、さらに左足を大きく上げ、一気に振り下ろしてきた！
「じいいいいいいいいいいん！」
「うおおおおおおおおっ！」
気合を入れて全力で後ろに下がる。――っく、危なかった……。さっきのは本当でもらいそうになった。
「ちっ！　避けられたか！」
悔しそうな拓也。様子は完全に子供だが、放った技の切れ味は抜群だった。
道着の襟部分が少し切れるほどだ。拓也の刀は一応本物だが歯を潰している。なのにこの威力――マジで怖ろしい子供だな。
だが――。
「もう通じないぞ」

そうだ。どんなトンでも技だとしても、一度受ければ、もう次から対処できるし、筋力など身体能力でも俺の方が有利。

拓也もこれまでの経験でそれが分かっているらしいが、構えは変えなかった。

「なら、今度はとっておきのとっておきだ！　今日は初勝利＋これまでの恨み全部晴らさせてもらんだからな！」

「恨みって、勝負で一度も勝てないのも大人と子供の勝負以前に、おまえは遊びで俺はずっと鍛えている剣士だから、俺が勝つのは当然の事だ。それともう1つは、おまえが怖がりのクセしてホラー系を見たがるからだろ？　俺はただ本を貸しただけだ」

そう。昔からつきまとってくるのがうるさくて、追い払うのにホラー系の本やビデオを使っていたからな。

今回も「この本とビデオを見終わったら勝負してやる」って言って追い払ったんだし。

……いや、これだけの理由だと俺が大人気ない最低な高校生にみえないか？

それは違うぞ。

俺は再び拓也に襲い掛かる。

「くう……！」

苦悶の表情を浮かべる拓也。俺の視界の端に映った妹、なのは。心配そうな表情で拓也を見つめていた。

そう。これが……なのはが理由だ。

昔から俺につきまとう拓也に、拓也につきまとうなのは……。

数年前、父さんが仕事で大怪我して、俺が家族を守るんだっていきがってバカみたいに無茶な修行して、母さんが父さんの見舞いと翠屋の経営で苦労し、美由希も母さんの手伝いなどで、１人になったなのはを近所で母さんの友人の家に昼間預けていた。

その預けていた家も両親が共働きでなのはと拓也の２人きりになる事が多かったが、うちのように夜遅くまで帰ってこないわけではなかったからなのはを預けていたんだが、預けた家の子供、拓也に問題があった。

拓也がものすごいバカだという問題が！

「いい加減倒れろ！」

「やだ！」

ほんとに！　昔からこいつはなにかの影響に受けやすくて、子供らしい、天真爛漫という言葉を使えばいいイメージになるだろうが、俺からすればこいつはバカだ！　ものすごいバカだ！

どれだけバカかっていうと、夏に熱いという理由で家のなかで全裸で過ごしたり、バカのような悪戯したり、突然ふらりと夜中に外に出て行ったりするほどのバカなんだ。

しかも、１人だけならいいものを、拓也はなのはを巻き込んだ！

周りに大人がいなかったせいもあるだろうが、なのはを悪戯に巻き込んだり、全裸にする必要はないだろう！

今はお互い昔の事はすっかり忘れて、拓也も女の子と遊ぶのが恥ずかしくなり出したようだが……、父さんの退院の日取りが決まって、お互いの両親が気づいた頃、拓也となのはは、男と女の違いを不思議がってお互いであれこれ弄りあっていたそうだし！

もちろんその後キツイお仕置きを2人とも受けたそうだが、理解していないからってお互いで弄り合ったりしちゃだめだろ！

……だが、そのおかげで子供は大人がしっかり見ていないとダメだと気づき、俺も修行の量を減らして母さんの手伝いして、バカとなのはの2人といられる（見張る）時間を増やして、なのはが実は寂しがっていて我慢していた事にも気づけて、俺も無茶な修行で体が壊れかけていた事に気づいて大事にはいたらなかった。

拓也がバカだったおかげで結果的にいい事があったのは確かだ。

だがしかし！　しかし俺は！　こいつをものすごいバカだという認識を一生変えるつもりはないし、このバカだけにはなのはを渡すつもりなども一切ない！

父さんも母さんものん気になのはのお婿さん候補などと言っているが、俺は認めん！

ああっ！　だんだんイライラしてきた！

「うわっ!?　やばっ！　やばいって！　マジで本気じゃん!?」

「ちゃんと手加減している！」
本気ならもう終わってるに決まってるだろう！
「ちょっ!?　いきなりマジでどうしたんだ!?　怖すぎる！」
逃げに入る拓也！　止めだぁあああ！
「――っ！　美由希さん、そこどいて！」
突然の拓也の声で座っていた美由希が立ち上がって場所を空ける。拓也は美由希がいた場所に逃げ込む。
俺は左手に持った小太刀を真横に凪ぐ！
ガンっ！
「くっ！」
なんとか刀を盾にして止める拓也だが、圧倒的に筋力で勝っているのは大人で長年の修行で鍛え込まれた肉体を有するこちら。拓也の体が浮いて美由希のすぐ近くに飛んだ。
「いた～――っ！」
倒れることなく美由希の隣に着地する拓也。痛がっているポーズをとるが、甘い。
勝負は非情なものなんだ。追い討ちをかける！
「くらえ！」

美由希がすぐ近くにいるが、これなら大丈夫だ！　上段の構えから両手で小太刀を真っ直ぐ縦に、拓也だけに当たるように振り下ろす！　手加減はしてるが当たれば痛いぞ！

――ニヤリ。

「――っ!?」

笑った!?　まさかなにか――「とっておきのとっておきを見せてやる！」――っ！

そうだ！　まだなにか隠している技があるんだった！

だがこの場からの逆転？　そんなの無理――。

「奥義――」

――っ！　やっぱり何か隠してたのか！

そういえば右腕が一切使われていない！　だが今はその右腕が以外が動いていないし、その動きも妙だ！

絶対に何かある！

――が、右手以外動かないという事は右手に集中すればいい事！　両手で小太刀を振りかぶっているが、手加減していて力はそこまで込めてないから対応も可能だ！

俺の目で全て見切って、逆にカウンターを決めてやる！

――バッ！

――動いた！

「――っ!?」

綺麗な肌色の形のいい太もも、美しい逆三角形に、その美しさを彩っているライトグリーンの……こ、これは――!?

「パンツ!?」

「え？　ああっ！　きゃあああああああああああああああ！」

俺の驚きの声の後すぐにあがる美由希の悲鳴！　右手に気をひきつけさせて美由希のスカートを捲ったのか！　って拓也がいない！　あの野朗っ！　どこに――。

ガオンッ！

「――っ!?」

顎を突きぬけ脳を揺さぶる衝撃！　いったい何が……？

「恭ちゃん!?」

「お兄ちゃん!?」

「――っ」

美由希となのはの声で、意識が浮かび上がり、何とか倒れる事は回避したが、綺麗に脳を揺さぶられた。

立って入られない。無様に膝をつく。

いったい何をしやがったんだ？
顔を上げると満面な笑みとポーズを決めながら技名をつぶやいた。
「飛天御剣流、龍翔閃！」
……るろうにのアレか？
刀の腹で顎をかち上げるっていう？
本当に漫画の技でやられたのか、俺は？
ヤツは刀を鞘に戻して、美由希をキラキラした眼で見ながらつぶやく。
「さすが美人で有名な美由希さん！　兄も美由希さんの魅力には敵わなかった！」
「え？　そ、そうなのかな？」
満更でもなさそうな美由希。そこは怒るところだろ！
「――って、女の子のスカートめくっちゃダメでしょ」
可愛く怒るな！　ニヤニヤしながら言っても説得力がないぞ！
「でも、戦略は大事だって土郎さんが」
あんなもの戦略とは言わん！　そこのところきちんと叱らないと！　美由希！
「ん～……、まあ、恭ちゃんに勝てたのは事実だしな～」
「そうだよ！　いつもと違ってスカートはいてる美由希さんがいることが絶対で、勝負が始まってすぐに攻撃避けて、早めに大技を出す！　ここで別に避けられることは予想

していて、次にもっとすごい大技があるって嘘ついて、美由希さんがいる場所までおびき寄せて、美由希さん立たせて、近くの位置にやられたフリをして移動！　そこで大技っぽい雰囲気だして右手だけ動かす！　恭也兄さんが右手に釘付けになったところでスカートを捲って、恭也兄さんが美由希さんのパンツ見て動きを停める！　そこを新技で倒す！」

誇らしげに長々と語る拓也。

「がんばって思いついた恭也さんに勝てる手段なんだから！」

「じゃあ、拓也くんの戦術に見事にハマってやられちゃったんだ……」

苦笑いの美由希。同情するような目でこちらを見てきた。

「ううう……」

視線が痛い……。

クソ……！　最初から計算どおりだったのか……。というか子供の考えた作戦にやられるなんて……。

うう……情けない……。肉体的なダメージはほとんどないが、完全に脳を揺さぶられたし、精神的なダメージでまだ立てない……。

そこでやっと父さんが勝者の名を叫んだ。

「勝者――拓也！」

その直後、父さんの笑い声が道場に響いた。
7歳に負けてしまった……。

第３話　初勝利したし克服できた?

〈中村　拓也〉

「俺、大勝利～!」

道場からところ変わって、高町家のリビング!

初めて恭也さんに勝利した俺は、上機嫌で桃子さん特製のシュークリームを食べていた。

士郎さんと桃子さん、美由希さんに、仲良し３人組もいるけど、関係ない。

本当だったら仲良し３人組と仲良くおやつなんて食べないけど、もう秘密の特訓してることもバレたし、名前で呼ぶように強制されたからもう色々気にしないことにしたんだ!

あ、今ここにいない恭也さんは裏山に行くとかでいない。なんか落ち込んでいたようだから、俺に負けたことが悔しいんだろ。

ははは!　これまで勝負挑んでボコボコされていた恨みだ!　ぞんぶんに落ち込んでもらおう!

「お兄ちゃんに勝つなんてほんとにすごいよ!」

「恭也さんに勝っちゃうなんてすごいんだね、拓也くん」
なのはとすずかが褒めてきた。
「ふふふ！　もっと褒めて！」
初勝利を飾った俺をもっと褒めて！
「まあ、作戦はあれだったけど、恭ちゃんに勝ったのは事実だからね～」
「こちらとしては、あんな方法で負けた恭也が情けないだけどなぁ」
「ふふふ、まあ、仕方ないんじゃない？　いままでの拓也くんの努力が報われたってことで」
美由希さん、士郎さん、桃子さんも褒めてくれた！
さらにここで隣でうずうずしていたアリサが、とうとう我慢できないと目をキラキラさせながら詰寄ってきた。
「あんたが恭也さんとの試合で使った技ってゲームの技よね!?　あと、最後のも剣心の必殺技なのよね!?」
おおう！　ものすごい興奮してる！
分かるヤツだったか！
「もちろんそうさ！　何度も練習してできるようになった必殺技なんだ！　すっごい格好いいだろう！」

「うん！　生でゲームや漫画の技が見れるなんて思いもしなかったわ！」
「はははは！　もっとすごい技も覚えてるんだぜ！」
「じゃあ、チンミの通背拳は？」
「おお、すずか！　なかなか渋い！　一応通背拳も使えるよ！　まあ、成功率は１０回に１回なんだけどね～。――ってどうしたのは？」
難しい顔、っていうか微妙な顔だ。
あれ？　アリサもすずかもいきなりなんだ？
「い、いや……、少し前と態度がかなり変わってるから……」
「そうよね。昨日……いや、道場に行く前と今じゃ、あんた変わりすぎてて、なんかこっちが対応に困るわ」
「うん……さっきまで私のことも怖がってたのに、今は――」
すずかの言葉を吐き捨てる。
「はっ！　恭也さんに勝利した俺に怖いものなんてあるわけないだろ！」
吸血鬼のお姉さんも一発で倒してやるよ！　吸血鬼ごとき怖くないね！
「……拓也くん見事に調子にのってるね」
「そうね」
「ふふ、そうだね」

勝手に言ってろ！　俺は3人組を無視して士郎さんを指差す！
「今度は士郎さんに勝つ！」
「ほう――今度は僕かい？」
……途端に温度が下がったような気がした。
「――っ！　さすが士郎さん！　ものすごいプレッシャーだ！」
「僕は恭也と違ってさっきみたいな作戦は通じないよ？」
「でも、美由希さんじゃなくて桃子さんのスカート捲れば！」
「ふふっ」
――っ！　士郎さんが隣に座っていた桃子さんの肩を抱いた！
「それでも僕には通じない――諦めるんだね」
「あらやだ、士郎さんったら」
甘ったるい雰囲気をだす2人！　パンツ見せたぐらいじゃ動揺しそうにない……！
「くっ！」
作戦が通じなきゃ勝てる相手じゃない……。
「――負けた。ううっ、まだまだ特訓しないと勝てないか……」
「あはは……。――まあ、たっくんはスジも発想もいいんだから、まずは正面から恭ちゃんに勝てるようにならないと」

よしよし、と美由希さんが頭をなでてきてくれた。
「ん～」
美由希さんに抱きつく。あったかくて優しいからやっぱり好き～！
「あはは、甘えん坊だねたっくんは」
「私にも甘えてくれていいのに～」
後ろでなのはが何か言ってきたけど、関係ない！　ん～落ち着く～。
思う存分甘えたあとは、ソファーから立ち上がり、帰り支度をする。
「拓也くんもう帰るの?」
なのはが残念そうに聞いてきた。
「うん！　恭也さんもいないし、家でおやつ食べなきゃいけないからね！」
「あんたここでおやつ食べたでしょ……」
アリサが呆れたように言ってくるけど、
「いま帰ればギリギリ、家でもおやつが食べれるんだ！」
そう！　いまから走って帰れば、夕飯まで時間が空いておやつが食べれるのだ！　これは帰らない手はないだろう！
「拓也くんって食いしん坊なんだね」
すずかが笑う。い、意外と可愛いな……って、そうじゃない！　先におやつだ！

「そういうことだから、じゃあね！　士郎さん、桃子さん、おじゃましました～！」
「気をつけて帰るのよ～」
「道路に飛び出さないようにな～」
「は～い！」
さあ、急げ！　おやつが家で待ってる！

◆

〈高町　恭也〉
「ふんっ！　ふんっ！　ふんっ！　ふんっ！」
俺は今、家の裏にある山でがむしゃらに剣を振っていた。
7歳の子供に負けてしまった。という現実から目をそらすために……。
だが何十何百回木刀を振っても心は癒されない。
――はあ……まったく、自分が情けない。
子供の作戦に見事に嵌り、不意をつかれて敗北するなんて。

しかも、父さんや美由希、なのはの前でだ。
――俺はまだまだ未熟だ。
師範代クラスになったと父さんに認められて、調子にのっていたんだろう……。
実戦であれば俺は死んでいたはずだ……。
「恭ちゃん……もう7時だよ」
背中から聞えたのは美由希の声。
7時?　素振りをやめて周りを見てみると薄暗く、山から見下ろせる街には違う光が灯っていた。
拓也に負けてしまったのは4時ぐらいだったから、もうすでに3時間も素振りしていたことになるのか……。
「はあ……」
自然とため息が口から漏れた。
美由希が心配そうにタオルを差し出してきた。
「はいこれ」
「すまない」
タオルを受け取り、汗を拭い、帰り支度して美由希と一緒に山を降りる。
美由希は特に何も言わない。いや……言えないんだろう。

あんな格好悪い負け方をしてしまったんだ。
はあ……。
山を降りて家の玄関を潜ると、玄関に父さんが立っていた。
「おかえり、恭也。美由希」
「「ただいま」」
父さんは苦笑しながら言った。
「美由希のパンツを見たぐらいで動きを停めてやられるなんて、まだまだ修行不足だな」
「と、父さん！」
顔を真っ赤にして美由希が怒鳴る。一方の俺はというと、父さんの言葉に反論も出来ず、さらに自分の不甲斐なさに正直、泣きそうだった……。
「父さん……」
「なんだ、恭也」
「俺を……もっと鍛えてください……」
搾り出すように、泣いてしまわないように我慢しながら、父さんに頭を下げる。
俺は誰にも負ける事なんて許されなかったのに、負けてしまった。
俺が……、俺が家族を守るって誓ったのに、負けてしまった。
それは俺の心のどこかに隙があったから、油断があったから、慢心があったからなん

だ。
　もっと厳しい鍛錬を積まないと！　慢心や油断をしないよう体も心も強くしないといけないんだ！
　それに――。
　それにあんな方法で負けるなんて嫌なんだ！
　俺は美由希となのはの兄にして、永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術の師範代でもあるんだから、格好悪いところなんて見せられないんだ！
「お願いします！」
　俺は頭を下げたまま顔だけ父さんに向ける。
　俺の気持ちが伝わったのか、父さんはふっと笑いを少しだけ漏らすと、親指を立てて笑顔で、
「じゃあ、美由希のパンツを見ても動じないようにしないとな。――とりあえず美由希には鍛錬中下着で――げふっ！」
「セクハラだよ、お父さん」
　美由希の一撃で父さんは沈んだ……。
　父さん……俺は真剣なんだ。ちゃんと聞いてくれ……。

◆

〈中村　拓也〉

恭也さんに初めて勝った俺は家に帰って上機嫌でおやつを食べました！

そしてその後、お父さんもお母さんが帰ってきて、夕食も終わって、今はお父さんとお風呂に入っています！

「おお～、ついに恭也君に勝ったのか～」

お父さんの背中をゴシゴシと洗いながら、どうやって勝ったかを話した。

「うん！　美由希さんのスカート捲って、恭也さんが驚いているところに龍翔閃を決めたんだ！」

「美由希ちゃんの……。それは俺も見学しとけば……い、いや。うん。すごいな拓也は～」

お父さんが褒めてくれた！

「と、ありがと拓也。こんどは俺が洗うよ」

「うん！」

お父さんの背中を洗い終わったから、今度は交代して背中を洗ってもらう。
「ん～……それにしても拓也のはすごいな～。体はまんま子供なのに……」
「ん～?　なにが～」
「いや、なんでもないよ」
変なお父さん。
「流すぞ?」
「うん!」
体を洗い終えて湯船に入る。はあ～……まったり気持ちいい……。
「拓也」
「なに、お父さん～」
「前に言ってた淫……、いや、吸血鬼のお姉さんの夢。まだ見てるのか?」
「ん～……今日も見たんだけど――」
「なにっ!?　そんな羨ましい夢をまた!?」
いきなり大声出すお父さん。
「どうしたの～?」
「い、いやっ!　な、なんでもないよ。うん、なんでもない。ああ、それよりも、もう月村さんっていう女の子は怖くなくなったのか?」

「うん。恭也さんに勝ったし、吸血鬼なんてもう怖くないよ」
「そ、そうか」
「今度また夢で襲われたら返り討ちにするんだ」
「それはすごいな～。――そのあとでいいから俺の夢にでてくれないかな～、そのエッチなお姉さん……」
「ん～」
まったりお風呂を楽しみながら時間が過ぎていく。
――お風呂の曇ったガラスにお母さんが映った。
一緒に入るのかな～っと思ったら一言、
「――あなた。あとでいろいろお話しましょう」
と言っただけで、あっちに行ってしまった。怒ってるみたいだった。
あれ？　お父さんが震えてる？　寒いのかな？　でも、お風呂温かいよ？

◆

恭也さんに勝利してからすでに3ヶ月。
俺は恭也さんと何度も試合したけど、一度も勝てなかった。
なんで勝てないんだろう?
高町家の道場で恭也さんにボロ負けした俺は翠屋に行って、士郎さんに訊ねた。
「ねえ、士郎さん」
「どうしたんだい?」
「恭也さんにどうやったら勝てるの?」
美由希さんのスカート捲っても効かなかったし、どうすれば勝てるんだ?
士郎さんは難しい顔をした。
「そうだねぇ。拓也くんにとんでもない才能やセンスはあるんだけど。恭也に勝つとなると……」
「無理なの?」
士郎さんは首を横に振った。
「いや、前みたいに作戦たてたら勝てただろう。どんなに強くても隙や油断、慢心があれば倒せなくはないよ」
「じゃあ、また作戦たてるの?」
「あ、いや。試合だし、一対一で堂々と恭也と戦ってほしいな。そうすれば君も純粋な剣

の腕も上がるだろうし」
「でもそれじゃあ勝てないよ？」
「ん～。そもそも拓也くんはまだ体のできていない子供で、そもそもきちんと鍛えていないからな～。長年鍛えた恭也に勝てないのは当然なんだよ」
「なら勝つのは無理ってことじゃん」
「そ、それはそうだけど……」
士郎さんが困った顔のまま固まっていると、桃子さんがやって来た。
「はい、拓也くん。ショートケーキと紅茶のセットよ」
注文していたおやつだ！　すっごく美味しそう！
「ありがとうございます！」
フォークを持ってケーキを食べ始める！
「あははは……」
士郎さんの笑い声が聞えたけど、俺の興味はすでにケーキだ！　ああっ！　美味しい！　う～ん！　今回はいちごは最後に食べよう！
「うふふ、美味しそうに食べてくれるから、私も嬉しいわ～。シュークリーム食べる？」
「はい！」
桃子さんが微笑んでシュークリームを持ってきてくれた！

「ありがとうございます!」
「うふふ、どういたしまして」
紅茶もすっごく美味しいな～!
「あはははは……拓也君、恭也に勝つ方法はもういいのかい?」
「ん～……、また今度でいいや。今はおやつ優先～」
「そ、そうかい……」
士郎さんがなんか落ち込んだ～。

◆

〈高町　士郎〉
「ん～、美味しい～!」
カウンター席に座った拓也君がシュークリームを幸せそうに食べていた。
身長はなのはと同じぐらい。髪も黒で顔もすごくいいとは言えないまでも、整っている。

両親も普通のサラリーマンで正式に武術や剣術を習った事もない普通の……あ、いや、少し子供っぽい？　……いや、普通の小学2年生ならこれぐらいが普通なのかな？

アニメや漫画が大好きで影響されやすくて、わがまま言ったり、イタズラしたり、急に女の子と距離を取ったかと思えば、逆にちょっかい出したり、仲良くなったり……。

それを考えると、なのはやアリサちゃん、すずかちゃんは歳相応じゃないんだろうな～。

っと話が逸れた。

要約するとこの子の才能が惜しいんだ。

この美味しそうに紅茶を飲んでいる拓也くんが秘めている才能が。

少し前の試合――マグレであっても、絡め手であったとしても、恭也に普通の子供が勝てるはずがないんだ。

ろくに体を鍛えてもいない。漫画やアニメの動きを真似しただけの子供なんかに……。

それに恭也を倒した際に拓也君が見せた、飛天御剣流の翔龍閃という技。まさに漫画から剣心が飛び出して技を決めたように見えた。

前々からこの子がアニメや漫画にハマって、キャラクターが使用する技を再現できる再現したいと思ったら、その技を覚えるまで夢中になって努力するのは知っていたが、

恭也との試合を見学させてもらう度に驚かされる。
特に居合い抜きの構えなど、雰囲気もあり、さまになっていた。刀が子供用であればさぞ切れ味鋭い居合い抜きを見せてくれたことだろう。
恭也を倒せたことからも、この子には天賦の才能があると僕は確信している。
なんせ通背拳を漫画で覚えたぐらいだ。
通背拳は御神流の『徹』と『貫』に通じるものがある。
本当に、正直いうと、この子を鍛えてみたい。
この子がその気になれば、確実に御神真刀流小太刀二刀術の全ての奥義を歴代最速で、しかも、高いレベルで使える剣士になる事だろう。
「どうしたの?」
「あ、いや、紅茶のおかわりは?」
「お願いしま～す」
見すぎてしまったな。気を取り直して空になった拓也君のティーカップに紅茶を注ぐ。
「ありがとうございます」
美味しそうに飲む拓也くん。
はあ～……きちんと鍛えたらどこまで強くなるんだろう……?

「ん～、最高～！」

はぁ～……実に惜しい……。

こちらが流派の技を教えたいと思っていても、拓也くんは漫画やアニメが好きで、再現できたら面白いっていう考えだからな。興味のない技は覚えてくれないだろうし、厳しい鍛錬も積む気はないだろう。

はぁあああ……本当に惜しい……。

第４話　湯煙温泉～月村さんとの邂逅～

士郎さんに恭也さんに勝つ方法を尋ねてから1ヶ月。
俺はマンションの屋上で練習に励んでいた。
「せぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
くっ！　また失敗か。
士郎さんに頼み込んで製作してもらった新しい武器！　この武器の扱いはほんと難しい。
――けどこの武器を使いこなせれば、恭也さんの不意をつける！
はあ……。
まだまだ練習したいけど、もうすぐ朝ご飯だ。
きちんとあと片づけをしてからマンションの3階にある家に帰る。
「ただいま～」
「おかえり～」
靴を脱ぎ、廊下を通って、洗面所で手を洗う。

そしてリビングへ移動して、テーブルに着いた。お父さんとお母さんはすでにテーブルに着いていた。
今日はハムエッグとトーストか～。
「いただきま～す」
お父さんとお母さんに俺と家族そろって食事を始める。
トーストにハムエッグを乗せて食べていると、お母さんが話しかけてきた。
「そういえば、拓也」
「なに～？」
「今度の日曜になのはちゃんのところと一緒に温泉旅行に行く～？　去年は行けなかったでしょ」
「ん～、どうしようかな～？」
正直、温泉は好きだけど、女の子たちと一緒に行くのってちょっとな～。
去年はお父さんが急な出張になって、お母さんも具合悪くて、俺も1人で女の子と温泉旅行が恥ずかしくて行かなかったんだよな～。
だけどもうなのはやアリサ、すずかとも名前で呼び合ってるし、周りにからかわれるのも慣れたし、からかわれなくなったもんな～。
「今年はお父さんも行けるぞ」

「お父さんも!?」
「ああ、もちろん！　母さんとも久しぶりに温泉行きたいし、高町さんのところは美人ばっかりだしな～。すごく楽しみだ！」
「最後のほうはどうかと思うけど、まあ、許しましょう」
　苦笑いのお母さん。どうしようかな～。お父さんもお母さんも行けるんだったら行こうかな？
「あ、そういえば！」
　お母さんが突然両手をポンっと叩いた。そして、うふふっと微笑んだ。
「高町さんのところのなのはちゃんにね。絶対拓也を参加させるようにって、頼まれていたんだわ」
「なのはが？」
「ええ、そうよ、なのはちゃんが。それとアリサちゃんっていう子とすずかちゃんっていう子も参加するそうでね～。その子達も拓也にぜひ参加して欲しいんだって～」
　ほっぺたを両手で挟んで喜ぶお母さんと、
「ははは、モテモテだな～」
　と笑うお父さん。
　正直、学校の女の子ばっかりと温泉行くの面倒くさいな～。

でも、行かないともっと面倒くさそうだな～。
だれか男子でも誘おうかな～？
「本当にどうしようかな～？」

◆

ゆっくり時間が過ぎていき、とうとう温泉旅行に行く日になった。
結局俺はなのは達と温泉旅行に行く事にした。
まあ、行かないとかいうとアリサあたりが騒ぎそうだからな。おとなしく参加するとなのは達に言っておいた。
一応、女の子ばっかりのなかに行くのも嫌だったから、クラスの男子を誘ってみたけど、お父さんやお母さんが休みじゃなかったりして皆ダメだった。
皆本当に……、本当に行きたそうにしていたけど、2泊3日で温泉旅行はいきなりすぎたみたい。せめて1週間前に言っておいてくれってすっごい形相で怒られた……。
だから現在はワゴン車に乗って、お父さんの運転で集合場所の高町家へ向って走行中

だ。追加メンバーの男子はいない。
車に乗ってから１０分もしないうちに高町家が見えてきた。
俺のうちと同じようなワゴン車が高町家の門に１台停まっている。
お父さんはその車の後ろに車を停車させた。
荷物だけ置いといて車から降りる。
「おはよう拓也くん」
車から降りてすぐになのはがやって来た。
「おはよう、なのは」
「ほんとに拓也くんも行くんだね」
嬉しそうに言うなのは。久しぶりに俺の家と高町家の合同温泉旅行で、すずかやアリサも参加するんだ。相当楽しみなんだろうな。
「おはよう、拓也。ふふっ、ちゃんと来たのね」
「おはよう、拓也くん」
「おはよう、アリサ、すずか」
アリサとすずかがひょっこり現れた。２人とも余所行きの服を着ていて、温泉旅行が楽しみなのか、楽しそうな空気が伝わってくる。
子供だな～と、思うけど実は俺も楽しみだったりするからな～。

「え～と、うちが３人と、なのは、アリサ、すずかの３人、士郎さんと桃子さん、恭也さんと美由希さんの４人で……１０人か～」
「違うわよ」
「へ？　なんで？」
　訂正してくるアリサ。あれ？　俺、計算間違えた？　でもさすがに足し算は間違わないと思うんだけど……？
　俺の疑問に、すずかがニッコリ笑顔で答えた。
「私のお姉ちゃんや、え～と……お手伝いさんのファリンとノエルも参加するの。あと、アリサちゃんの執事の鮫島さんも」
「へ～、それじゃあほんとに大所帯だね～」
　合計でえ～と、１４人かな？
　と、ここで玄関からぞくぞくと出てきた。
　あいさつに行っていたお父さんとお母さん。それにいつもの士郎さんや桃子さん、美由希さんが出てきて、次にいっつもベンツの運転してる鮫島さん、紫色の髪の始めて見るショートカットのお姉さんと、肩のした辺りまで伸ばしたお姉さんの２人組みが出てきた。
　そして最後に恭也さんが出てきて、あいさつしに行こうとした時、首筋に寒気を感じ

た……。

あ、あれ？

恭也さんと出てきたお姉さん……。

どこかで……、どこかで、見たような？　……あれ？

どこで、どこで……？

「……はじめまして、忍お嬢さま付きのメイドでノエルと申します」

「はじめまして～、すずかお嬢さま付きのファリンです～」

お手伝いさんってメイドさんだったのか～……ん？　あれ？　ノエルさんの視線になんか色々変なものを感じる？

――っ。

一瞬、すずかのお姉さんの――たぶん忍さんがこっちを見て驚いたような表情になった？

――っ!?　あ、足がガクガクする!?　な、なんで!?

いつの間にか目の前まで迫った忍さんっ！

ほ、ほんとに動けない!?

うふふっと微笑みながら自己紹介してきた。

「はじめまして。拓也くんだよね？」

「ひゃ、ひゃい！　な、中村、たっ、た、拓也です！」

く、口が上手く動かせない！

「私はすずかの姉の月村忍。恭也と同級生なの。今回は私たちも参加させてもらうからよろしくね」

「ひゃい……」

なんで、こんなに怖いの～!?

「あははは！　緊張してるの？　可愛い～！」

頭を撫でてくる忍さん。……はっきり言って怖いです。なんか身の危険を感じる……。

温泉旅行……、こなきゃよかったかも……。

◆

恭也のところの温泉旅行に、妹のすずかとノエルとファリンも一緒に参加する事になったんだけど、この子と再会するとは思いもしなかった。

まさか、数ヶ月前に暴走して襲っちゃった子と……。
しかもこっちを見て明らかに怯えた様子を見せていた。
すずかと同い年の子供に怯えられたのは少しショックだけど、私がこの子にやった事を考えれば当然よね……。
なんせ有無を言わさず逆レイプしちゃったんだから……。
あの時の記憶はしっかり処理してるから、怯えているのは深層心理に恐怖心が宿ってしまったからなんだろう。
ノエルも私が襲った子だったことに驚きつつも、きちんとファリンと自己紹介を行なった。
怪しまれないように私も2人に続いて、自己紹介をするために彼に近づく。
輸血したあとに記憶処理して家に帰したのは私とノエルだから彼の名前は知っている。確か中村拓也くんだったはず。
「はじめまして。拓也くんだよね？」
「ひゃ、ひゃい！　な、中村、たっ、た、拓也です！」
うん、拓也くんだったね。それにしても見事に怯えられてるわね～。
「私はすずかの姉の月村忍。恭也と同級生なの。今回は私たちも参加させてもらうからよろしくね」

「ひゃい……」

ふふっ、なんだかだんだん可愛いくなってきちゃったかも？

涙目で足をプルプル震わせるところなんか、小動物みたい。

それにこの匂い……。

いい匂いが拓也くんからしてる……。

「どどど、どうかしましたか？」

泣きそうな拓也くん。ふふっ、なんだかイジメたくなっちゃう子ね。

「なんでも～。ふふっ、それよりお姉さん拓也くんのこと気に入っちゃったなぁ」

「ええっ!?」

驚きなどの負な感情が入り混じった声。う～ん、そんな風に驚かれるとショックだな～。

「お姉さんと一緒に行こうか～」

「ヒッ……」

拓也くんを後ろからだっこする。夜の一族だからこれぐらい軽い軽い。それに拓也くんも完全に固まってるから持ちやすいわね。

「あ～、忍さん！　拓也くんは私と一緒に行くの～！」

「あらあら、なのはちゃんも？　拓也くんってモテるわね～」

と、ここで恭也がなのはちゃんのところに向った。
「ならなのはは俺と一緒に行こうか？」
いつもとは違う優しい微笑みを浮べて誘う恭也だったけど、なのはちゃんは、
「嫌！　私はアリサちゃんやすずかちゃん、それに拓也くんと一緒に行く！」
バッサリと切り捨てた。
「――ううっ……！」
なのはちゃんの言葉にショックを受けて地面に両手をついて落ち込む恭也……。いつものストイック＆クールで寡黙な恭也では想像もできないような情けない姿だけど、家族大好き＆シスコンでもある恭也なら仕方がないわね。私もすずかに一脚されたら落ち込むもの。
まあ、恭也は置いといて、
「じゃあ、なのはちゃんのところに私も入れてくれるかな～？」
「うん！　それならいいよ」
こうしてどちらの車に誰が乗るかが自然に決定した。
アリサちゃんのお家が出した1台目のワゴン車には鮫島さん、士郎さん、桃子さん、恭也、美由希ちゃん。
中村さんのお家が出した2台目のワゴン車には、中村くんのお父さんとお母さんの美

夏さん、ノエルとファリン。それになのはちゃんに、アリサちゃん、すずかに、拓也くんと私が乗り込んで出発した。

◆

士郎さんの知り合いの方が営んでいる温泉旅館に無事に到着した私達は、部屋に荷物を置いてまずは温泉に行く事にした。

士郎さんと桃子さんはまだお風呂に入らないという事で、行くのは2人を除いた全員で。

「温泉、温泉、温泉！」

拓也くんが嬉しそうにはしゃいでいる。ふふっ、車の中では私がずっと抱きかかえてきたからね～。その反動かしら？

ああ、それにしてもいい匂いだったわ……。

嗅いでいると安心するし、自然と微笑んじゃう。すずかもいい匂いがするって言っていたし、何か拓也くんにはあるのかしら？

……まっ、いいっか。

それよりも――。

「拓也く～ん」

「なっ、なんですか？　し、忍さん……」

後ろから抱き着いて抱え上げる。うふふ、怯えちゃって可愛い～！　すずかやその友達もなんか子供にしては大人びているから、この子みたいな純粋に歳相応な小学生が異様に可愛く感じるのよね～。

「お姉ちゃん達とお風呂入ろうか～？」

「ええ～？」

あからさまに嫌そうな声をだす拓也くん。

「俺、お父さんと……」

嫌そうな顔の拓也くんにアリサちゃんがつっかかってきた。

「なに？　私たちとお風呂入るのが嫌なの？」

不機嫌そうに呟くアリサちゃん。まあ、この年頃の子に男と女の違いとか羞恥心とか薄いわよね。大人びているのは表面だけで、本当の中身は子供みたいな。

「拓也くんも一緒に入ろうよ～」

なのはちゃんもか～。

「え？　ええっ……」
すずかは～……、一族関係の事で色々教えてるし、恥ずかしがりだから、入りたいとは思ってないみたいね。
拓也くんはそんなこと考える余裕もない様だし。
「きょ、恭也さん！」
恭也に助けを求める拓也くん。拓也くんのお父さんは何故か羨ましそうな視線を拓也くんに送ったあと、ニカっといい笑みを浮かべたあとさっさと男湯のほうへ消えて行ったから、ここで頼れるのは恭也ぐらいよね。
恭也もなのはちゃんが小さいといっても、同い年の男の子と一緒にお風呂に入るのが許せないようだから、
「ほら、拓也を離すんだ、忍。拓也は男湯に入るんだからな」
と、男湯に連れて行こうとするけど……。
「別にいいじゃない恭ちゃん。ほら、看板にも１０歳以下は大丈夫って書いてあるんだし」
美由希ちゃんが看板を指差して言ったことで、話が完全に傾いた。
「ならいいじゃない。拓也、背中流してあげるわね」
「久しぶりに拓也くんとお風呂だ～！」

「……え、あ……、ま、まあ、いいのかな？」
わきわきと手を動かして笑うアリサちゃん、嬉しそうななのはちゃん、戸惑い顔だったけど最後に諦めたすずか。
「……」
「恭也さ～ん……」
「……ふう……、風呂に行くか」
――恭也も諦めた。

◆

拓也くんと一緒に入ることになった私達は女湯の脱衣所で、はしゃぎながら服を脱いだ。
すずかも、なのはちゃんもアリサちゃんも早々に服を脱ぎ、体にタオルを巻いてお風呂に消えていく一方、３人が着替え終えて消えたところで、美夏さんが拓也くんに着替えることを許した。

「あははは……そういえば、そうだったね～」
　美由希ちゃんが苦笑しながら頭をかいた。
「なにが？」
　私が首を傾げると、美由希ちゃんは少し頬を赤らめ、耳元で呟いた。
「拓也くんって8歳でなのは達より子供っぽいんだけど、その……あ、あっちの方はもうほとんど大人サイズなんだよ」
「ええっ!?　そ、そうなの？」
　拓也くんのアレは体でたっぷり味わって知っていたけど、ここは小声でおどろいたようなフリをする。
「あはははは、5歳ぐらいまでは普通だったんだけどね」
　話が聞えていた美夏さんが苦笑しながら拓也くんの腰にタオルをしっかり巻きつけた。
「よし、これでいいよ～」
「お母さんありがとう！」
「走っちゃダメよ～！　あとかけ湯も忘れないようにしなさ～い！」
　許可を貰った拓也くんは急いでお風呂場へ向った。美夏さんははしゃいでいる子供に注意して自分もお風呂場に向う。

「さてと……私達も行きましょうか」
「うん。そうだね」
残された私達も湯船へと向う。うふふ、さっき私から逃げるために急いだんでしょ？
拓也くん。
これからたっぷりお姉さんが可愛がってあげるわね。

◆

皆で湯船に入る前に体を洗い湯船へ入り温泉を楽しみ始めてすぐ。私はゆっくりと目標へ向って移動を開始する。
目標は拓也くん。距離は2メートル弱。周りにはすずか、アリサちゃん、なのはちゃんの3人と美夏さん。
ゆっくりと、ゆっくりと移動しながら拓也くんの後ろにまわる。
途中他の皆に見つかったけど、悪戯にのってくれたようで拓也くんに警告はしない。
射程範囲内に入ったところで両手を広げて拓也くんに抱きつく。

「拓也く～ん」
「ヒッ!?」
　驚き怖がる拓也くん。というかヒッってなによヒッって。
　湯船に背中を預けて、股の間に拓也くんを座らせて抱きしめる。そして顔を寄せて抱きしめている手を伸ばしてほっぺたをつつく。ん～、柔らかいわね～。
「なんでそんなに私のこと怖がるの～」
　訊ねながら体を弄る。へえ～子供なのに意外と筋肉があるわね～。
「ひゃっ!?　な、なに!?　――っ！」
　あはははは、夜の一族の本能かしら？　ちょっと触っちゃった。まあ、濁り湯で他の皆には気づかれないから大丈夫。いざとなれば事故ですませればいいんだし。
「し、ししし忍さんっ……!?」
「お、お姉ちゃん！　離してあげないと可哀想だよ！」
　怯えている拓也くんを無視してお湯のなかで色々触っていると、我慢できないとすずかが立ち上がって大声を出した。
　あら意外ね。最初は幼なじみのなのはちゃんが止めると思ったのに。あと立ち上がった位置的に全部拓也くんから丸見えよ。まあ、拓也くんに見る余裕なんてなさそうだけど。

「にゃはは、そうだね。怖がってる？　みたいだし」
「そうね。なんか怯えてるみたいだし」
なのはちゃんに、アリサちゃんがすずかに遅れてやんわり注意してきた。
なんていうか悪者みたいになっちゃったなぁ。
まあ、拓也くんが固まって、尋常じゃないぐらい震えているからかもしれないわね。
ん～……、でもこのままは嫌ね。
「ねえ、拓也くん」
「な、なんですか？」
「そういえばなんで私をそんなに怖がるの？」
「そ、それは……」
口ごもる拓也くんの代わりに、ゆったり温泉を楽しんでいた美夏さんが答えた。
「あ～、たぶんそれね。夢が原因だと思うわ」
「夢？」
「うん。何ヶ月前だったかな～？　今は見ていないらしいけど、満月の夜に吸血鬼のお姉さんに襲われる夢みるようになってね～。その吸血鬼さんが紫色の髪してるらしいから、同じ色の忍ちゃんも怖がってるのよ。この前はすずかちゃんを怖がっていたし」
「――っ」

あの時の記憶はしっかり処理したはず――。

「へぇ～、そうなんですか～」

自然に、自然に応対する。まさか記憶が残っているの？　これは月村家の次期当主として確かめないと。

「ねえ――」

――拓也くん。と、訊ねようとした時、

「あんたまだ怖がってるの？　まったく……本読んだり、ビデオ観たぐらいで吸血鬼が怖くなるなんて怖がりね～」

え？　アリサちゃん？

「にゃはは、でもお兄ちゃんの貸した本ってすっごく怖いから仕方ないよ～」

なのはちゃんも？

「この前、恭也さんを倒したから、もう吸血鬼なんか怖くなくなったとか言ってなかったっけ？」

すずかまで？　え、いや、それより恭也を倒したって？

「し、仕方ないだろ！　今まで忘れてたのに一気に思い出しちゃったんだから！」

大声で反論する拓也くん。

え～……と、結局記憶は戻っていないのかな？

「拓也くん」
「ひゃっ、……あ、は、はい！」
「本やビデオ見て吸血鬼が怖くなったの？」
「え、あ、そ、それは――」
　真っ赤になる拓也くん。ぎくっとか、特に不信な様子もないから、純粋に恥ずかしいのかな？
「へぇ～、そうなんだ」
　とりあえず納得しておくけど、警戒は緩めない。
　そして拓也くんが本当に私の事を覚えていないか、色々と反応を見る事にしよう。
「んふふ～」
「し、忍さん？」
「なあに～？」
「あ、あの……、なんで抱きついてるんですか？」
「それは拓也くんが可愛いからよ～」
　拓也くんが逃げないように両手でおなかを抱き寄せて、子供の小さな肩にあごを乗せて頬を擦りつけた。
「美由希さ～ん……」

拓也くんは美由希ちゃんに助けを求めた。
「あははは、好かれちゃったね」
美由希ちゃんは温泉に夢中だ。
「……」
拓也くんはすずか、なのはちゃん、アリサちゃんに助けを求める視線を送った。
「が、がんばって」
「う～……、私も抱きつきたい……」
「まあ、がんばりなさい」
3人とも一定の距離から動かない。
拓也くんを助ける者はいなかった。
「おか、お母さ――」
最終手段。
「ふう～……、そろそろあがろうかな～。じゃ、忍ちゃん。拓也をよろしく～」
「はい。わかりました～」
不発。
私の天下となった。
「ん～……拓也くん～」

顔を摺り寄せて拓也くんの匂いを嗅ぐ。
ああ、本当にいい匂い……。なんでこんなにいい匂いがするのかしら？　香水のような酔ってしまいそう……。
「ん、はぁ……」
ヤバイわね……。なんだか体が熱くなってきちゃった……。
子宮辺りが疼く……。
首筋から目を離せない……。
今すぐ血を飲んで欲望を満たしたい……。
拓也くんの頬を汗が伝う。
「ペロっ」
「ひっ」
ああ……美味しい……。それに怯えちゃって可愛らしい……。
このまま可愛がりながら血を――。
「――忍お嬢さま」
「――っ」
ノエルに肩を叩かれ、私は正気を取り戻した。
――っ！　……はぁ……。危なかった。皆もいるのに拓也くんの血を飲みそうに

なっちゃった。
「忍お嬢さま、大丈夫ですか？」
「え、ええ。大丈夫よ。少し湯あたりしたみたい……」
ノエルの問いに、おそらく少し赤くなっているであろう目を手で隠しながら答えた。
本当にどうしたのかしら？
発情期もきていないし、輸血パックの血も飲んできたのに……。
先に温泉から出ていくすずか達３人を見送りながら、私は拓也くんを観察し続けた。

◆

まったく酷い目にあった。
吸血鬼のお姉さんにそっくりな人になぜか気に入られて、ずっと抱きつかれて温泉を楽しめなかった。
はぁ……。
いや、忍さんがただ夢に出てくる吸血鬼のお姉さんにそっくりなだけで、俺が勝手に

怖がっているだけなのは分かるけど、なんでか俺は忍さんを怖がってしまうんだ。
温泉で見た忍さん体……。
胸のかたちとか、女の子の、あそことか。
それが、吸血鬼のお姉さんとほんとうにそっくりで、食べられそうな気持ちになるんだよな。
特に汗を舐められた時なんか怖くて怖くて泣きそうだった。
はぁ……。
しかも、お母さんもなのは達は先に温泉からあがちゃうし、そのあとずっと忍さんに体を触られ続けて……。
まあ、温泉から出たあとすぐに忍さんはノエルさんを連れてどっかに消えちゃったから、温泉旅行にきてはじめてゆっくり羽根を伸ばせて、恭也さんや美由希さん、なのは達と卓球が楽しめた。
楽しめたんだけど……。
現在、俺、ピンチ……。
旅館で前もって予約された部屋は、
お父さんとお母さん、それに俺で１部屋。
士郎さんと桃子さんで１部屋。

恭也さんと鮫島さんで1部屋。
忍さん、すずか、ノエルさんとファリンさんで1部屋。
美由希さん、なのは、アリサで1部屋。
だったんだけど……。
現在の部屋割りは――。
お父さんとお母さん。
士郎さんと桃子さん。
恭也さんと鮫島さん。
そして1部屋の仕切りを取り払って大部屋にしたところに、
美由希さん、なのは、すずか、アリサ、忍さん、ノエルさん、ファリンさんと俺が寝ることになってしまい。
そして夕食も終わって布団を敷く時。
ファリンさん、ノエルさん、忍さん、俺、すずか、なのは、アリサ、美由希さんの順番で寝ることになってしまったんだ。
何でこの順番!?
というか、お父さんとお母さんのところで寝たかった！　それに男1人とか酷くない!?

しかもだよ……。

「う～ん……、抱き心地もいいわね……」

「いい……、匂い……」

忍さんとすずかに両方から挟まれてる……。

しかも両方とんでもなく力が強いっ！

忍さんが胸に顔を埋めさせようと頭を抱いてくるのに対して、すずかは腰に抱きついて顔をこすり付けてくるから、身動きがまったく取れないし、息し辛いし、おなかが締めつけられる！

どうしてこうなった!?　どうしてこうなったんだ!?

この姉妹はどうして俺が逃げられないように挟んでるんだ!?

っていうか、おしっこ！

マジでおしっこしたい！

「ん～……」

あ、ぐうっ！　す、すずかっ！　今締め上げるのはマズイ！　マズイって！　おしっこ漏れちゃうからマズイって！　俺にとんでもない黒歴史刻む気か!?　ここで漏らすって人生最大の汚点になるんだって！

「は、はなせ～……」

両手を動かしてすずかの手を解きにかかる！　まだ余裕があるけど、油断は出来ない！　いくら巨大で強いダムでも決壊するときは簡単に決壊するものなんだから！

――っ！

ほんとにこいつはっ……！　力が強すぎだ！　どんなゴリラだよ!?

ギュっ！

あぐっ!?

締めつけが増した!?　く、苦しい！　ほんとヤバイって！

「ん～……」

ん～じゃないよ！　ほんとに離して！　痛いから！　肋骨折れるから！

「ん～……、うふふふ……」

と頭上から姉の声が。あなたもですか!?

ぐへっ！

両腕で抱きしめられて胸に頭を挟まれる！

ま、や……、い、息が出来ないって！　く、苦しい！　誰か！　ほんと誰でもいいから助けて！

「た……ぁ……て……」

もう意識がヤバイ……。

両手で忍さんを押して体を離そうとするけど動かない！
それどころか――。
「うふふ……お姉さんの体に興味があるの？」
耳元で囁く忍さん！
忍さんの雰囲気が夢のなかに出てくる吸血鬼のお姉さんと同じモノになった～!?
「まったく、私が寝てる間におっぱい触るなんて悪い子ね」
いや、俺……っていうか、あなたが悪いんじゃないの？　っていうか、押しつけてきたのあなたですよね？
「い、いや……お、俺……、お、おしっこに――」
――行きたいだけ。
「ん～？　そうなの？」
相変わらず耳元で囁く忍さん。でも、首筋にかかる荒い吐息が、雰囲気がヤバイ……。
「そう……です」
なんとか口を動かしておしっこに行きたいことを告げる。
これで離してくれるはず――だったんだけど、忍さんは――。
「内緒よ？」
「えっ？」

布団のなかに潜り込んだ。
――え？　――っ!?　ちょっ、ちょっと！　忍さん!?
布団のなかでパジャマのズボンとパンツが引き下ろされて……、ぱくっ。
「ううっ」
この感じ、またオチンチンを食べられた!?
ヌルヌルで熱いのがオチンチンを包み込んで、忍さんの生暖かい吐息が下腹辺りに当たる。
ううっ、へ、変な感じ……。
オチンチンが熱くて包まれて……、気持ちいい……のかな？
「はぁはぁ……、忍……さぁん」
「じゅちゅっ、はぁ……、さっ、遠慮しないで。私のお口に出していいのよ？」
「出してって!?」
小声で驚きの声を出すけど、忍さんはオチンチンを再び咥えて吸い始めた。
忍さんの包み込むような口の温かさとやさしい吸いつきにおしっこが漏れそうになってくる。
「し、忍さんっ、本当に出ちゃうよ！」
「うふぅ……、じゅちゅ……」

「ううっ、出、出るぅぅぅっ！」
我慢の限界を超え、おしっこが漏れてしまう！
奥から温かいモノが溢れ出して、次から次へと吸われていく！
「だ、ダメ……、そんなに吸わないで……、し、忍さんっ」
「じゅるるる……、ゴクゴクっ、ゴクッ……。はぁぁぁ……」
たっぷり、最後の一滴まで飲まれちゃった……。
それに、布団のなかで……、女の人の口におしっこ出すなんて……。
掃除するかのようにオチンチンを舐められながら、あまりのことに戸惑っていると、掃除を終えた忍さんが布団の中から顔を出して……。
「ごちそうさま」
と笑顔でつぶやいてきた。
本によくでてくる妖艶という言葉が似合いそうなエッチな笑顔で……。
「あ、赤い目……？　――っ!?」
夢に出てくる吸血鬼のお姉さんのような夜の黒に怪しく光る赤い目が見えたと思った瞬間、忍さんの谷間に顔を埋められた。
「ん、な、なに!?」
いきなり胸に抱かれて戸惑うけど、忍さんはやさしく微笑みながら頭を撫でてきた。

「今夜はお姉さんがサービスしてあげるわ。ほら、なんならおっぱい吸ってもいいのよ？　浴衣だから下着もつけてないし、吸いやすいわよ？」
　ほらほらと浴衣を肌蹴させる忍さんだけど……。
「そ、それよりもさっき目が赤……」
「赤いのがどうしたの？　もしかして目が赤かった？　拓也くんもおしっこでも目に入ったのかしら？　まあ、そんなことよりもお姉さんがおっぱい吸わせてあげるって言ってるのよ？　こんなこと滅多にしないんだから、ほら」
「むぐっ!?」
　口の中に無理矢理乳首を差し込まれた！
　体を寄せられて動けないように頭を固定される。
「うふふ、かわいいわね。このまま朝までしゃぶらせてあげるわね。――皆には秘密よ？」
　忍さんの胸から顔を覗くと赤い目があって――。
「このことは皆には秘密なんだからね」
「秘密……」
「そう、お姉さんと2人だけの秘密。誰にも話したらダメ。――いいわね？」
「……。……話さない。秘密……」

あれ？　なんでうなずいてるんだ？
「うふふ、いい子ね。さあ、ご褒美よ。お姉さんのおっぱいを楽しみなさい」
「はい、忍お姉さん……」
「うふふ、本当にいい子ね。あんっ、うふふ、ちゅうちゅう吸って。赤ちゃんみたい……。ふふっ、気持ちいいわ」
「忍お姉さん……」
オチンチンがムズムズする……。
「あら、今度はこっちが反応しちゃったわね。私のなかで慰めてあげたいけど今はダメ。代わりに手で抜いてあげるからね」
「ううっ、忍お姉さん……」
「ああ、本当にいい匂い……。まるで発情期……、いえ、発情期のときよりも興奮しちゃう……」
「拓也……くん」
ん？　すずか？　なんで体を擦りつけてくるんだ？
「うふふ、すずかまで発情しちゃったのかしら？　やっぱり拓也くんには何かあるみたいね。まあ、それはあとあと調べるとして、今は――」
「し、忍お姉さん……」

「私の手で気持ちよくなりなさい」
細く長い指でオチンチンを包まれて上下に擦られたり、握られる。
忍さんの胸に顔を埋めて乳首に吸いつきながら、オチンチンを弄られた俺は、そのまま何かを吐き出して、意識を手放した……。

◆

温泉旅行2日目の早朝。朝霧が出てきた頃。
私の目の前には、私のおっぱいに赤ん坊のように吸いつきながら寝ている拓也くんがいた。
さらに布団の中では拓也くんのパジャマのズボンが引き下ろされていて、下着まで脱げていて……、私の手から拓也くんの精液の匂いが香っていた。
その状況だけで私が何をしたか理解できた。というよりも、私はしっかりと覚えていた。
ま、まさか拓也くんのおしっこ飲んじゃうなんて……、しかも手コキしながらおっぱ

い吸わせるなんて……。

まるっきり痴女じゃない！　夜の一族だからって歳はもいかない拓也くんに何回悪戯してるの!?

「忍お姉さん……」

「――っ」

た、拓也くんのまだビクビクしてる……。もう5回は抜いてあげたのにまだ硬いままだし……、すごいわ。

――って、私は何を……。

夜の一族だからって私がここまで翻弄されるなんて、やっぱり拓也くんには何かあるの？

今度うちに呼んでじっくり調べてみようかしら？

「んっ……、ん」

寝返りをうとうとするけど、後ろから抱き着いているすずかが邪魔で寝返りをうてない拓也くん。

まだ起きないみたいだから、今のうちに体から拓也くんの臭いを消さないといけないわね。あ、それとズボンとパンツもなおしてあげないと。

……。

……おいしそう……って、落ち着くのよ！　このまま襲っちゃったら本当にマズイから、そう！　早くお風呂に向いましょう！

はぁはぁっ、本当に……、私をここまで翻弄するなんて……、ぜ、絶対にし、調べてあげるんだから……。

そして調べたら……、私は――。

第５話　高町家にお泊り。美由希さんと２人で過ごす１日

色々あった温泉旅行から数ヵ月後。夏休みもそろそろだという７月の第２土曜日。俺は両親の都合で高町家に２日ほどお世話になることになった。

なんでもお母さんの実家のほうで何かがあったとか。詳しい事情は知らないけど、どうやら悪いことじゃないそうだ。楽しそうに２人で旅行鞄用意してたし、一ヶ月ほど前から決まっていたことだからね。

予定日の数日前辺りにも「久しぶりに夫婦水入らずで」とか、２人が楽しそうに会話しているのも覚えてるから、本当に悪い事が起きたわけじゃなさそうだ。

そして土曜日の朝、予定通りにお泊りの準備をして両親と３人で高町家に向い。俺は高町家に預けられることになったわけだけど……。

「ごめんなさい、拓也くん。なのはは家にいないの」

困った顔をしてる桃子さんからなのはの不在を伝えられた。

「え？　なのはいないの？」

高町家で恭也さんと美由希さんの２人に並ぶ、遊び相手の不在に驚くと、頬っぺたに

手を当てた桃子さんが説明してくれた。
「驚かそうと思って、今日拓也くんが泊まりに来ることを知らせてなかったから、お友達のところにお泊りに行っちゃったのよ、ごめんなさいね」
「お泊りって、アリサやすずかのところ？」
「ええ、アリサちゃんのお家にね。すずかちゃんも一緒のはずよ」
「へー、そうなんだ」
なのははアリサの家にお泊りか。すずかも一緒に。さすが仲良し3人組だな。
……あっ！　なのはがいないってことは、俺の遊び相手が誰もいないってことにならないよね!?
「じゃあ、桃子さん。恭也さんと美由希さんは？」
「恭也のほうは今日の夕方まで翠屋のほうでアルバイトをする予定だけど、夕方には終わって帰ってくるわよ。今日は美由希が家にいるから、拓也くんと一緒に遊んでくれるそうよ。明日になれば、恭也もおやすみだから」
「よかったぁ～」
桃子さんの言葉に安心する。ふぅ、ちゃんと遊び相手がいたのか。まあ、なのはがいないのは少し残念だけど、用事なら仕方がないしね。今日は美由希さんに遊んでもらおう。

さっそく頭を切り替えて、俺は改めて桃子さんに頭を下げる。
「２日間、お世話になります。桃子さん」
「ええ、ゆっくりしていってね、拓也くん」

◆

「ほらほら、もっといくよ～！」
「ちょっ！　はやっ、強いって！　美由希さん！」
美由希さんから俺に向って振るわれる小太刀に似せた２本の木刀。現在俺は、高町家の道場で美由希さんと戦っていた。これが美由希さんとの遊び、なんだよね。かなりの体育会系だけど。
洋服から青ジャージに着替えてる俺に、黒ジャージ姿の美由希さんが木刀を振り下ろす。……ものすごく楽しそうに。
「大丈夫だよ！　これぐらい、たっくんなら大丈夫だって！」
「なんで断言できるの!?　おわっ!?」

振り下ろされた木刀を後ろに下がってかわすと、美由希さんは俺の行動を先読みしていたように踏み込み、もう片方の手に持っていた木刀で、胸の中心を目掛けて鋭い突きを放ってきた！

――ヤバい！　このままじゃ避けられない！

普通に避けるのは無理！　俺は上体を後ろに逸らして、そのまま後ろに倒れる！　尻餅をつくように後ろに倒れた俺の上を木刀が通り過ぎていく！　あ、危なかった……。

危険が去っても大量の冷や汗を流して今もビビッている俺だが、美由希さんはというと、目をキラキラとさせて喜んでいた。

「さすがだね！　今のをかわすなんて！」

「かなりギリギリだったよ！　いくらなんでも突きは危ないって！」

「ゴメンゴメン。でも、たっくんなら絶対かわすって信じてたからね」

あはははは、と笑顔で言ってくる美由希さん。俺は座ったまま両手をあげて美由希さんに抗議する。

「さっき美由希さん驚いてたよね!?　信じてたって嘘だよね！　仕留めるつもりだったよねっ！」

「……。よし、そろそろ休憩にしようか」

「……強引に話を逸らしたね、美由希さん」

ジト目で美由希さんをにらむ。美由希さんは俺を見てくすっと笑うと、自分と俺が持っていた木刀を元の場所へとしまう。

木刀をしまうついでにと、美由希さんは道場の隅に置いていた水筒からコップにお茶を汲んで持ってきてくれた。

「はい、たっくん」

「……ありがと」

美由希さんからコップを受け取ってちびちびと飲む。少し温めだけど、今はそれが丁度いい。

仕方がない。さっきのことはこのお茶に免じて許してあげよう。……いつものことだし。

俺の隣に腰を下ろした美由希さん。お茶を飲みながら話しかけてきた。

「それにしてもたっくんって、本当に強くなったよね」

「ん？」

お茶を飲むのを止めて隣の美由希さんを見上げる。いきなりなんだ？

「だってほら、少し前みたいに漫画のトンでも技使わなくても私となら2分ぐらい戦えてるじゃない。それって、純粋に剣の技術が上がってるって証拠なんだよ」

と、微笑まれた。

「……でも、すっごく手加減されてるよ？」
相変わらず御神真刀流……えーと、小太刀二刀術の技は使用禁止だし。ワイヤー？とか糸を使った攻撃も使用禁止。その他にも色々と手加減して俺の相手してるよね？
俺の言葉に苦笑する美由希さん。頭をやさしく撫でられる。
「それでもだよ。たっくんが真面目にしっかり鍛錬したら、すぐに強くなって私なんかあっという間に追い抜かれちゃうと思うよ」
「ん～、そうかなぁ？」
「ふふ、絶対そうだよ。たっくんが成長すれば、いまある体格差だってほとんどなくなって。体力や筋力だって私以上につくんだからね」
「成長……、成長かぁ……」
お茶を飲み干して美由希さんを見る。下から上まで見る。……成長ねぇ。
コツン。
美由希さんに頭を軽く殴られた。美由希さんは少し顔を赤くして、胸を隠して言う。
「もう、どこ見てるのかな、たっくん」
「？」
美由希さんの言葉に首をかしげる。どこって言われても……。
「別にどこも見てないよ？　ただ、美由希さんに勝てる気が全くしないな～って思って

ただけ。俺、鍛錬苦手だし、そもそもそんなに成長するのかわからないから」
「……え？　そ、そうだったの？」
ポカンとする美由希さん。
「どうしたの？」
「べ、別にっ！　なんでもないよ！　あは、あはははは……」
「？」
変な美由希さん。
それからしばらく休んで、もう2、３度試合したんだけど、結果はやっぱりボロ負けだった。
うう……、最後は２０秒もかからないで瞬殺された……。

◆

道場での鍛錬を終えて、俺は美由希さんと一緒に高町家の母屋へと戻ってきていた。
道場でかいた汗を流すためにお風呂に入る。お風呂の準備は鍛錬の前に美由希さん

がしてくれてた。
脱衣所で服を脱いで浴室に入り、まずはシャワーを浴びる。体に張り付いていた汗がお湯と一緒に流れていく。
あ〜、気持ちいい……。
汗をある程度流し終えたところでシャワーを止める。さてと、頭を洗おうかな。
お風呂場用の小さな椅子に座って、シャンプーが入った青いボトルに手を伸ばす。ごく最近、というか、小学校に上がる前までは、なのはと一緒によくお互いの家でお泊りしていたし、かってもわかってる。
まあ、なのはがいない間にお泊りするのは久々だけどさ。
そういや、なのはってどうやってアリサやすずかと仲良くなったんだろう？　1年生ぐらいのときに気づいたら仲良くなってたよね。ある日突然、1日、2日ぐらいでさ。
「たっくーん」
そんなことを考えていたら脱衣所のほうから声をかけられた。
「美由希さん？　なーに？」
「湯加減はどう？　熱くない？」
「んー。これから頭洗うところだからまだ湯船には入ってないよー」
「そうなの？　――じゃあ、丁度いいね」

「……ん？」

丁度いい？　何言ってるんだ、美由希さん。そう思って入り口がある後ろを向くと――。

ガラッ。

浴室から脱衣所に続く扉が開かれた。

「美由希さん？」

後ろを振り向く。湯気で少しだけ曇った視界に裸の美由希さんが映った。裸の美由希さんは「やっほー」とこちらに軽く手を振って、浴室のなかに入ってくる。ちなみにお風呂でも美由希さんはメガネ装備だ。

「どうしたの、美由希さん」

「お背中流しにきちゃった、てへっ」

浴室に入ってきた美由希さんに俺が訊ねると、少し恥ずかしそうにしながら舌を出して、そう返してきた。

……美由希さん、もう高校生だよね？　てへって……。

「……」

「……」

顔を見合わせたまま固まる俺たち。長い沈黙が浴室を支配し、時間が停まる。

「――あ。……え、……えっと、わ、わーい」
長い沈黙のあと、とりあえず俺は両手を上げて喜んでみた。
まあ、少し表情が硬くなって、声が片言だったかもしれないけど、美由希さんは……。
「ううっ……、気を使われた。たっくんに、子供に気を……」
その場にしゃがんで落ち込んでしまった。床に敷かれている正方形の小さいタイルのひとつに指で『の』の字を書いてる。涙目で。
あららら、どうやら俺には演技の才能はあまりないらしい。気を使ったことがバレたようだ。
俺は空気を換えるために息を吐き、美由希さんの頭を撫でる。
「よしよし、泣かない泣かない」
そうやさしい声でつぶやきながら美由希さんの頭を撫でる。昔……、1年ぐらい前に美由希さんに慰めてもらったように。
「……たっくん」
慰めるのが効いたのか、美由希さんはタイルに『の』を書くのを止めて顔を上げ――、
「――っ」
――ようするが、途中で止まってしまった。
「あわ……、あわわわわわ……！」

口をパクパクさせながら、美由希さんの顔がどんどん赤くなっていく。
「美由希さん？」
「……んく」
声をかけるけど、美由希さんは喉を鳴すだけ。何かに夢中で聞えてないみたいだ。
いったい何を夢中で見てるんだ？　美由希さんの視線を追ってみる。
えーと、視線の先は……。
――俺の股間。もといオチンチン。
美由希さんがそれを食い入るように見つめていた。
なんでこんなところを美由希さんは見てるんだ？　そんな風に俺が首をかしげていると、オチンチンに熱くて湿ったものが。
湯気？　いや、美由希さんの息か。って、いつの間にか美由希さんの顔が近くに……。
――あっ。
先っぽの、むき出しになってる部分にまた美由希さんの鼻息が当たった。息で濡れていた表面が少し乾いて、何かが昇ってきた。
「――んっ」
思わず口から声が出てしまう。オチンチンから感じたのは吸血鬼のお姉さんが夢でやっていたのに近いものだった。

むず痒くて、だんだん熱くなって、ちょっぴり痛くて、恥ずかしくて、ぞわぞわして、気持ちいい。

そんな、色んなものが混ざっているような感覚。

そういえば、吸血鬼のお姉さんはオチンチンを弄ったり、美味しそうに咥えてたっけ。そういえば温泉旅行でも忍さんが俺のオチンチン咥えてたな……。

……。

「……ねえ、美由希さん」

「――っ！　な、何かな、拓也くん」

二度目でやっと顔を上げてくれた美由希さん。あれ？　いつものたっくんじゃなくて、拓也くん？　首を傾げる俺に、顔を真っ赤にしたまま美由希さんは咳払いをして、立ち上がった。

「あ！　せ、背中！　背中を流すんだったね！　ほら、後ろ向いてたっくん！」

そう急かすように俺に背中を向けさせる美由希さん。あれ？　たっくんに戻った？

変な美由希さんと思いながら、シャワーの横にある鏡を使って様子を窺うと、美由希さんは片腕で額の汗を拭っていた。

……美由希さんもオチンチン触りたかったのかな？

「じゃあ、用意するね」

そう言って洗面器にお湯を溜める美由希さん。どうやらいつもの美由希さんに戻ったようだ。
「あ、美由希さん。まだ頭を洗ってないよ」
背中を洗うなら、まずは上の頭からだよね？
「そうだったの？　じゃあ、頭から洗ってあげるね」
「うん！」
……もうひとりで出来るけど、やってもらえるなら、甘えさせてもらおう。
「ふふっ、この美由希お姉さんが全身をピカピカにしてあげよう♪」
「あ、頭と背中だけでいいよ……」

◆

「ちょっ、み、美由希さんっ」
「ほら、あんまり動かないの」
「んっ！　あ、頭と背中だけでいいって！　他は自分でできるよ！」

「だーめ。もうここまで洗っちゃったんだから、お姉さんが最後まで洗ってあげる」
そう言って俺のお腹をスポンジで洗ってくる美由希さん。すでに頭と背中は洗い終わっていたけど、美由希さんはスポンジを持ったまま後ろから手を伸ばしてきて、前を洗い始めたのだ。
「……あうっ、く、くすぐったいよ、美由希さん」
「えへへへ、ん～、かわいいなぁ。ここがくすぐったいの？　ほらほら、お姉さんが隅々まで洗ってあげるよ～」
胸やお腹、わき腹に触れてくるスポンジにくすぐったさを感じて体を丸めるが、美由希はそんな俺を無視して洗い続ける。
しかも俺が逃げないように、しっかり右腕を俺の腰に回して。
「美由希さぁん……」
「ん～、どうしたのかな～？　まだまだ洗えてないぞ～。うりゃうりゃ♪」
「ひゃっ、んんっ、ちょっ……、う、うんん……！」
左手に持っているスポンジでわき腹から胸を洗われる！　や、やめ……、息が……、変な声が出るから、やめて……って！
もう耐え切れないと俺は体ごと後ろを振り返り、両手を使って美由希さんを放そうとするが、両手を突き出す瞬間に抱きしめられ、あっけなく捕まってしまった。

美由希さんは胸に俺の頭を埋めさせるように抱いて言う。
「よしよし。もうすぐ終わるから大人しくしてようね～」
トントンと背中を叩かれる。……美由希さんは俺を幼児だとでも思ってるのだろうか？
少し不機嫌になって顔を横にずらすと、肌色のなかにピンク色なものが目に入った。
これって美由希さんの乳首？
少し大きめの乳輪に、ツンと起ってる乳首。
……。……そうだ！
乳首を見てあることを思いついた俺。俺は抵抗を止めて美由希さんの腰に両手を回す。
「ん～？　どうしたのかな～？」
やさしい声で訊ねてくる美由希さん。顔を見なくてもニコニコしてるのがわかる。
俺は一旦胸の谷間から顔を離して、乳首へと顔を近づけた。
口を開いて、乳輪ごとパクッと咥える。
「あんっ」
ビクっと震える美由希さん。俺は口に咥えたまま、舌で乳首を舐める。
「ん……、あ、……んんっ……、たっくん……」

「れろっ……、あむ、ん……、んむ……」
一旦口を離して、もう一度咥えなおし、そのまま唇を絞める。
「どう、したの？　おっぱい……欲しくなっちゃったの？」
震える声で訊ねる美由希さん。まるで赤ん坊におっぱいをあげるように片手で俺の頭を支えてくれる。
……あれ？　俺の予想では「もう、イタズラしちゃだめよ」とか「エッチなんだから」とか、いつもみたいに叱って解放してくれるはずだったんだけど……。
「ぁん、し、舌がザラザラしてて……、く、んんっ……」
美由希さんは俺を離そうとはしてこない。
試しに空いている両手でおっぱいに触れてみるけど、美由希さんは頭を撫でてくるだけ。
開いてる乳首を指で摘まんだり、指で捏ねてみても、
「ん、そっちも吸いたいの？　拓也くんはよくばりだね」
と、微笑むだけ。
……。
ん～……なんだかバカらしくなってきちゃったなぁ。全然怒んないし、むしろうれしそうに抱きしめてくるし。

結局俺はそれから１０分ぐらい美由希さんにおっぱいを吸わせてもらった。いちおう、それ以上前を洗われずに済んだのでいいけど……なんだろう、この敗北感は……。

◆

あれから俺はもう一度シャワーを浴びて、今は浴槽に浸かっていた。浴槽の淵に背中を預けて手足を伸ばす。洗い場では美由希さんがシャワーを浴びていた。

ぼーっと浴槽から洗い場にいる美由希さんを見つめる。

しっとりと濡れた長い黒髪。大きな胸に細い腰、丸いお尻。やっぱりなのはやアリサ、すずかと違って、美由希さんは女らしいよなぁ。特におっぱいとか。三人娘のツルペタなんかと比べるまでもなく大きいし、あそこにも毛が少しだけだけど、生えてるし。

「……よし。じゃあ、私も入るね」

シャワーを止めて、浴槽に入ってくる美由希さん。いつの間にか美由希さんは体を洗い終えたらしい。俺が手足を引っ込めてスペースを空ける。

「ありがと、たっくん」

「うん」
お礼にうなずいて、またお湯の温かさにまったりし始める。
……ん？　なんで美由希さんは立ったままなんだ？　早く座らないのかな？　視線の前に美由希さんの股があって見えちゃってるんだけど……。
相変わらずぼーっとしながら、今度は正面にある美由紀さんの股辺りを見つめていると、上から声をかけられた。
「ねえ、たっくん。ちょっと立ってくれる？」
「？　いいけど……」
素直に立ち上がる。美由希さんも立っているので、正面から裸で向い合う格好だ。それにしても大きいなぁ。俺の背はギリギリ美由希さんの胸ぐらいまでしかない。成長すれば追い抜けるのかな？　まったくその姿が想像できないけど……。
そんなことを考えていると、美由希さんが浴槽に座って肩まで浸かり、そのまま手足を伸ばしてきた。長い足が俺の近くまで伸びてきてる。このまま座れないこともないけど、これじゃ狭いな。
「ほら、こっちにおいで」
「？」
浴槽の淵を背もたれにした美由希さんが俺に向って手招きしてきた。大きく股を開

いて、ニッコリ笑顔を浮べてくる。
え？　この股の間に座れってこと？
視線を向けてみれば、うんうんとうなずいている美由希さん。どうやら正解らしい。
――なら、と俺は浴槽に膝立ちになって美由希さんに近づく。太ももの間でくるりと体の前後を入れ替えて、お尻を美由希さんの股の間に入れた。
そのままゆっくりと背中を美由希さんに預ける。２人で入った分、浴槽からお湯が溢れた。
これでいいの？
そう確かめようと振り返ろうとするが、先に美由希さんに捕まってしまう。
後ろから首から胸へと両腕をまわされて、抱きしめられる。背中で潰れて広がる美由希胸の感触が伝わってきた。うわ、スベスベであったかくて、やわらかい……。
他にも太ももや腕、胸の感触を味わいながら、俺は丁度いい位置に体を合わせていき、お湯に肩まで浸かった。
後ろの美由希さんが笑いながらつぶやく。
「あはははは、少し前までなのはと３人で入っても余裕だったのに。もう、２人でもちょっと狭いね」
「ん～？」

そう言われてみれば、確かに。少し前ぐらいまでお泊りのときは3人でお風呂に入ってたっけ。最近のお泊りのときは恭也さんや土郎さんばかりと入ってるから忘れてた。まあ、家になのはが泊まりに来るときも、最近はお母さんと入ってたから忘れても仕方ないか。

それに、今はそれよりも……。

「ふわああぁ……」

「あれ？　眠たくなっちゃった？」

「……うん、少し」

美由希さんに訊ねられて目を擦る。道場でのこともあって、正直すごく眠たいんだ。今、すっごく気分がいいし、このまま寝たい。

「ん～……」

ねむ、ねむ……。

丁度いい枕もふたつある。フカフカで弾力があって、スベスベ。温かいし、いい匂いもする。ああ、本当に眠たくなってきた。

「ふふふ。――じゃあ、そろそろ上がろっか？」

「……うん」

美由希さんの言葉にうなずく。このまま浴槽で眠ったら美由希さんに迷惑がかかっ

ちゃう。

眠気を我慢して立ち上がる。俺に続いて美由希さんも立ち上がり、一緒に脱衣所へ。

そのあとはタオルで頭や体を拭いてもらい、新しい服に着替えた。

んー、それにしても眠い……。

◆

お風呂から上がった俺と美由希さん。眠たかったけど、先にお昼ごはんを食べようと翠屋に向かい、お昼ごはんを済ませることになった。

ちなみに、美由希さんが高町家で料理をするという選択肢は最初からない。俺も美由希さんの料理を食べるぐらいなら、と眠気を我慢して翠屋へと歩きました。

翠屋についたあとは、ウエイター姿でお店を手伝っている恭也さんにお願いしてお昼ごはんを用意してもらって食べた。うん、お菓子だけでなく、料理もすごく美味しかった。さすが士郎さんと桃子さん。

前に食べた美由希さんの『かわいそうな卵焼き』とは別物だった。……本当に別物だった。思えばあのとき、あまりの味に泣いてしまって美由希さんに慰められたんだったな……。美由希さんには悪いけど、もう二度と食べたくないです……。

美由希さんとお昼ごはんを食べ終えたあとは、お店の邪魔にならないように高町家に戻って、お昼寝することに。

眠たいのを我慢していたところに満腹感も加わった俺は、もう限界……。

美由希さんの腕を支えに階段を上がって、美由希さんの部屋へ。

「ほら、もうちょっとだからねー」

「うん……」

ベッドまで連れて行ってもらって、そのまま布団の上に仰向けで寝転がる。今は春だし、暖かいから布団をかけなくても寒くない。

「ふふっ、おやすみ、たっくん」

「うん……」

そのまま俺はすぐに眠りについた……。

◆

私のベッドの上で寝息を立てて眠っている、『たっくん』こと、拓也くん。お風呂から今の今まで私に迷惑をかけないよう頑張って起きていたのもあって、ベッドに寝転んでからすぐに寝てしまった。

「うん……」

仰向けから横向きに拓也くんが寝返りを打つ。ふふっ、かわいいなぁ。

このまま拓也くんの寝顔を見ていたいけど、先に洗濯物片付けないといけない。翠屋にお昼ごはんを食べに行く前、洗濯機を回していっていたから、今丁度終わったぐらいだろうし。

「ちょっと行ってくるね。おやすみ、たっくん」

小声で寝ている拓也くんにそう言ってから私は静かに部屋から出いく。音を立てないようにドアを閉めて、1階へ。脱衣所へと行くと、丁度洗濯機が回り終えたところだった。

「よし。じゃあ、さっさとすませちゃおうかな」

そう気合を入れて腕まくり。洗濯機の蓋を開けてカゴに移し、庭へ干しに行く。

庭へ出て空を見上げると、青空とお日様が。

「うん、いい天気♪」

雲ひとつないし、雨も降りそうにない。風もあってすぐに乾きそう。私は庭へ出て洗濯物も干し始めた。

２人分のジャージにバスタオルが2枚。タオルも2枚で拓也くんのシャツとパンツを干して終わり。まだカゴには私の下着が入ってるけど、下着は私の部屋に。うん、最近物騒だし、いくら家族だからってお父さんや恭ちゃんには見られたくないからね。

カゴを直して、私は下着だけ抱えて2階へ上がる。静かに自分の部屋のドアを開けると、拓也くんはスヤスヤと寝息を立てて熟睡中だった。

ふふ、寝てる寝てる。

私は起こさないように気をつけながら、手早く下着を部屋に干す。いちおうドアを開けても見えにくい位置に干してるけど、ベッドの上にいる拓也くんには丸見えだね……。

まっ、でも下着ぐらい今さらかな。お風呂だってまだ一緒に入ったりしてるわけだしね。

そう微笑み、私はゆっくりとベッドに近づく。拓也くんの寝顔がよく見える特等席に腰を下した。

「ふふ、本当にかわいい」

手を伸ばして拓也くんの頭をやさしく撫でる。男の子らしい1本1本が太い髪の毛。ん～、このクセのある髪がいいんだよねぇ。クセになる触り心地っていうか。

自分でもわかるニコニコ笑顔を浮べて拓也くんの頭を撫で続けていると、突然拓也くんが小さく私の名前を呼んだ。

「美由希、さん……」

――っ！　もしかして起しちゃった!?

突然名前を呼ばれた私は、拓也くんの頭から手をどかしてその場に正座する！

ベッドの側で正座した私は、内心ビクビクしながら拓也くんの様子を窺うが……。

「……。……あれ？　起きて、ないの？」

相変わらず目を閉じている拓也くん。試しに小声で拓也くんを呼んでみるけど、反応は返ってこなかった。どうやらさっきのは寝言だったらしい。

「もう、驚いちゃったじゃないの」

よくも驚かせてくれたなぁ～、っと人差し指で拓也くんの頬っぺたをつつく。つんつん、つんつん、つんつん……ふにぃ。

「――あははっ」

拓也くんの頬っぺたプニプニしてる。お肌もスベスベだね。

膝立ちになり、もっと顔を近づけて拓也くんの顔を覗き込む。

クセのある少し長めの黒髪に、細い眉毛。整った鼻筋。今は閉じているけど、普段はくりくりとしたかわいらしい瞳。全体のバランスもいい。

ん～、よく見れば拓也くんって、結構なイケメンさんなのかな？　今はカッコイイよりもかわいいって言葉のほうが似合うけど、将来、成長すれば恭ちゃんぐらいのイケメンさんになるかも。

手足も長いし、絶対身長もぐんぐん伸びるよね。もしもそうなったら――。

『――美由希さん』

思わず妄想で作り出してしまった将来の拓也くん（予想）がこちらに笑顔を浮べてきた。その笑顔は拓也くんにはあんまり似合わない気取った笑顔で……。

「――っ！　……っ、ぷ……、あ、ははっ、……くっ」

だ、ダメ……っ！　わ、笑っちゃ！　うく……っ、た、拓也くんが起きちゃう……っ！

必死に口を押さえて笑い声を堪える！　今は何も考えちゃダメ！　何も……っ！

『――美由希さん』

「――っく！　うぅ……っ！　……っ！　んん……っ！」

やっ、やっぱりダメ……っ！　成長してイケメンになっても、今みたいな笑顔しか想像できない！　それに拓也くんなら高校生になっても、いままで通り私に懐いてきそう

だしね。

『美由希さ～ん』

って、ニコニコ笑顔を浮べて抱きついてきそう。うん、やっぱりこっちのほうが拓也くんには合ってるね。

気取ったのは似合わない似合わない。

そう私は気を取り直して、立ち上がる。あー、もう少しで起しちゃうところだったなぁ。気をつけないと。

私はその場で背伸びする。さっきまで姿勢が姿勢だったので、背骨がコキコキとなった。

「んんっ……、ん～……。ふあぁぁ……」

凝り固まった体を解す気持ちよさを感じていると、思わずあくびが出てしまった。そういえば、私も少し眠たくなっちゃったなぁ。私のベッドは拓也くんが使ってるし、私はリビングのソファでお昼寝しようかな？

とりあえず立ち上がって時計を見る。今の時間は１時４０分。３時ぐらいまで私もお昼寝しようかなぁ。拓也くんもあんまり寝すぎると夜眠れなくなるだろうし。

そう考えて私は携帯電話を取り出し、携帯電話の目覚ましを３時にセットした。スカートのポケットのなかに携帯電話を入れる。

「さてと……」

1階に行こうかな、とドアの方へ向おうとして……立ち止まる。ゆっくりと視線をベッドのほうへ向けて……。

「……2人でも眠れる、かな?」

そう思って静かにベッドに近づいてみると、タイミングよく拓也くんが寝返りを打った。ベッドの中央から端へと移動して、十分なスペースが出来上がった。

ギシ……。

ベッドの上に膝を立てて、そのままいつものようにベッドに寝転がる。うん、十分寝れるね。

仰向けで横を見ると、同じ位置に拓也くんの頭が見えた。

「……」

壁のほうを向いて、横向きで寝ている拓也くん。まだ小さい背中が私の目に映った。

拓也くんを見ながら、自分の体を拓也くんに寄せていく。拓也くんと同じように横向きになって、体が触れ合うぐらいまで近づき、後ろから抱きつく。

「いい匂い……」

拓也くんの首の後ろに顔を埋めると、シャンプーのいい匂いがした。いつもと違う、お父さんや恭ちゃん同じシャンプーの匂いだった。

でも、もっと鼻を近づけて嗅いでみると、やっぱり恭ちゃんとは違う拓也くんの匂いがした。

こっちもいい匂い……。懐かしい……匂いだぁ……。

クンクンと匂いを嗅ぎながら拓也くんを抱きしめていると、だんだんと眠気が強くなってきた。

眠気と心地よさに、私は深い眠りに入っていく。

「おやすみ、たっくん……」

私は拓也くんを抱いて、そのまま意識を手放した……。

◆

ピピピピピピ。

ベッドでお昼寝をしていた私は、目覚ましにとセットしていた携帯電話の音で目を覚ました。

スカートのポケットに入れていた携帯電話を取り出して、目覚ましを止める。そして

ベッドから起き上がろうとして――。

「あれ？」

体が動かない。というか、動けない。あれれ？　っと首を傾げて見ると、拓也くんが腰に抱きついて眠っていた。

寝る前は後ろから自分が抱きついていたはずが、いつの間にか抱きつかれる側になっていたようだ。まだ夢のなかにいる拓也くんは、しっかり私の腰に手をまわしていて、胸に顔をうずめて眠っていた。

そんな拓也くんの姿に思わず私は微笑んでしまう。ふふ、まだまだ甘えん坊さんだね。

――あ、そういえば……。

胸に顔を埋めて寝ている拓也くんの姿に、今日のお風呂での出来事を思い出す。

私を抱きしめながら、乳首を吸ったり舐めたりしてる拓也くんを――。

あのときはいきなり拓也くんに乳首を咥えられて少し驚いたけど……。

――すごく……気持ちよかった、よね？

ぱくっと口に咥えられたと思ったら、ザラザラで小さい舌が私の乳首を舐めてきて……。

舌でペロペロ舐められたり、唇で先端辺りを乳輪ごと咥えられたり、指でも弄られ

たっけ。

わ、私もお姉さんで拓也くんも子供だからって、おっぱいを弄られても余裕を見せてたけど……正直危なかったなぁ。怒るタイミングも逃しちゃってて、結局拓也くんが満足するまでさせちゃったせいで、その……反応しちゃってたし……。

「あうぅ……」

改めて思い出して、赤くなる。私は膝立ちで、拓也くんは私の胸に顔を埋めてたから気づかれなかったようだけど、あのとき私の股から太ももまで、あるものが伝っていたのだ。

……おしっことは違う、少しだけネバネバしてる、いやらしい液体が。

拓也くんが満足してくれたあと、私は拓也くんの体にシャワーをあてながら、必死で自分の股にもシャワーを当てて、そのいやらしい液体……愛液を隠したんだよね……。

私は元々オナニーなんてしたことなかったし、あんなに出ちゃうものだとは思ってなかったから、浴槽に拓也くんを入れたあとは反応しちゃった自分を情けなく思ったり、すごく出たことに驚いたり、恥ずかしくなったりして……。

「はぁぁ……」

深いため息が出てしまう。情けないなぁ……。私はお姉さんなのに。拓也くん（子供）に触られて反応しちゃうなんて……。

じゅ……。

考えていたら体がまた反応してしまった。胸のほうにも違和感が。うう……、乳首、絶対起っちゃってるよね……。私って感じやすいのかなぁ？

普段はまったく気にならないのに、ブラジャーに包まれている胸が気になり始めた。生地と肌の間に意識が集中し、違和感が大きくなっていく。

ブラジャー、外したいなぁ。布と乳首が擦れてちょっと少し痛い。……んー、ちょっとだけなら、外してもいいよね？

胸の違和感を取り除くために背中に手を回そうとして、止まる。

……あれ？　でもこのままブラジャー外したら、また拓也くんに吸われちゃうんじゃ？

まったく根拠のない考えだけど、私はそう考えてしまい、手を止めた。

眠っている拓也くんを見つめながら考える。拓也くんの口を見つめながら。

また……またおっぱい吸われちゃったら……弄られちゃったら……すごく、気持ちいいのかな？　ザラザラの舌で舐められたり、指でくりくり摘まれたり……。こ、今度は噛まれちゃったりするのかな？

「……ぁ」

頭の中で広がっていく妄想に、自然と内股になってしまう。太もも同士を擦り合わせ

ると、オマンコからくちゅくちゅといういやらしい音が脳内で響いてきた。
ああ、私……また濡れちゃったの？　お、オマンコ、くちゅくちゅいってるよぉ……。
「はぁ……はぁ……」
息が苦しく鳴り始め呼吸が乱れる。
「ん……っ、んん……」
下着を越えて、太ももにも感じ始めた湿り気。も、もしかして下着まで濡れちゃったかな？
気になって、スカートのなかへ手を入れてみた。下から捲るように入れて、下着越しに触れる。
「――っ」
なに、これ……っ！　下着の上からちょっと触っただけなのに……っ！
手が……っ！

◆

「はぁはぁ……、ん、あ、あんっ……」

……。

「うん……、いい……、はぁはぁ……いい、よ……っ」

……え？　何、この状況？

お昼寝から起きてみたら、目の前にスカートを捲って下着に手を入れてる美由希さんがいた。……いや、自分自身何を言ってるかよくわからないんだけど、実際に目の前で起こってることだ。

向かい合うように、横向きで寝転がっている美由希さんと俺。

俺の頭は丁度美由希さんの胸の前にあり、おまけに下を向いているせいで、美由希さんがスカートのなかに手を入れているところがはっきりと見えている。頭の上辺りからは美由希さんのエッチな声が聞えてきていた。

――というのが、今の状況だった。

美由希さんは俺が起きたことに気づいていないのか、スカートをさらに捲りあげた。スカートのなかからライトグリーンのパンツが現れた。確か、美由希さんのお気に入りの下着だったな。

下着を見ていると、頭の上からこんなつぶやきが。

「はぁはぁ……直接、触ったら、どうなるのかな……？」

美由希さん……？　顔を上げて自分が起きていることをアピールしようとするが……。

突然、美由希さんが前かがみになってきた！　ボフっと俺の頭が美由希さんの胸の谷間の間に埋まる！

「――ん、ああっ！」

美由希さんの大きな声。パンツに入れていないほうの手が俺の頭に回され、ぐいぐいと胸に押し付けられた！

いちおう、頭のてっぺんが埋まっている状態だから、呼吸はできるけど……美由希さんがそのままさらに体を丸めたせいで、俺の視線の、顔のすぐ前に美由希さんの下半身がやってきた！

「ああっ……、やっぱり……、直接触るの……、気持ち、いい……っ」

うわわわわ……っ!?　パンツのなかの手、すごく動いてる!?　くちゅくちゅなってるのが聞えてるよぉ……。それに、近いから匂いが……。

「はぁはぁ……、ん、ダメ、なのに……。手が、止まらないよぉ……っ」

そんな言葉と共に激しくなっていく手の動き！　その光景に目を離すことも忘れて見入っていると、美由希さんの体が突然ビクビクと震え始めた！

「……く、ぁあう……はぁはぁっ、ダメ……、たく、やくんの、まえでなんて……。し、

しちゃいけないのに……、どんどん、気持ちよくなっちゃってる……っ、もう、片手じゃたりないよぉぉ……。――んんっ」

もう片方の手をパンツのなかに入れる美由希さん。パンツが伸びてしまうんじゃないかと思うぐらい、パンツのなかで両手を動かし、体をビクビクと大きく震わせた！

「ああっ、やっぱり……、すごくいい……っ。……あ、ああっ、く、あんっ！　はぁはっ、あ、あああっ！　きちゃう！　すごいのがきちゃう！」

ブルブル震える美由希さん。足の先が開いたり閉じたりして、パンツのなかの手が一段と速度を増して動いて――。

「ああっ、イクッ！　イクよっ！　私っ、初めてなのに、イッちゃうぅぅぅぅぅぅぅっ！」

――ビクッ！　ビクビクッ！

体を小さく丸めて何度も体を大きく跳ねさせる！　何が、起こったの……？　み、美由希さん……？

気づかれないように視線だけで様子を窺って見る。さっきまでパンツのなかで激しく動いていた両手は動きを止めていたが……。

な、なにこれ……。下着の色が変わってる？　え、と……お漏らし、じゃないよね？

そういう臭いに近いけど……。この臭いはちょっと独特な感じで……。

……あれ？　この臭い……、前にも、どこかで、嗅いだこと、なかったっけ？

……うん、この臭いに似てる臭い。

「はぁはぁ……はぁはぁ……」

激しく呼吸を繰り返す美由希さん。俺はボーっと美由希さんの股を見つめながら記憶を探っていた。

「はぁぁぁ……」

俺の頭に顔を近づけて息を吐く美由希さん。首筋に当たる生暖かい息。

――そうだ。思い出した。この臭い……、吸血鬼のお姉さんに似てるんだ。

夢のなかで吸血鬼のお姉さんの股を舐めさせられるときに嗅いだ臭いに近いんだ。

ちょっとすっぱいような臭いで……舐めたら舌が少しびりっとするような味なんだよね……。

――っ！

う、あ……っ！

思い出して、たら……っ！　オチンチンが……張って……きたっ！　先端が、パンツに当たって、痛っ……！　狭くて苦しい……っ！

すぐにでもオチンチンをズボンから出したい、けど……！

み、美由希さんに起きてることがバレる！

う、うう……っ！

俺は美由希さんに気づかれないように膝を曲げる！　ズボンとオチンチンの間に少しだけスペースができて少しだけ楽になるけど、まだまだ苦しいままだ。

ど、どうしよう……っ！

俺が混乱していると、美由希さんが起き上がった！　もしかして、気づかれた!?

内心ビクビクと怯える俺。美由希さんは捲くれていたスカートを直し、ベッドから起き上がってつぶやく。

「うう～……、まさか私イッちゃった？　……初めてでイッちゃうまで弄るなんてぇ……」

頭を抑える美由希さん。少しその声は涙声で、ふらふらと部屋から出て行った。

た、助かったぁぁぁぁ……。

美由希さんが階段を下りて行く音を確認してから、慌ててズボンからオチンチンを取り出す。

取り出したオチンチンは普段よりもビンッと大きくて硬くなっていた。すごくむずむずしてるけど、これは病気じゃないって少し前に桃子さんとお風呂に入ったときに教えてもらった。お母さんも男なら誰だってなることなんだって言っていた。

あうう……、放っておけば治るって言ってたけど、むずむずする……。

くそぉ、こうなったのも全部吸血鬼のお姉さんが夢に出てくるからだ。今度夢に出てきたら退治してやるっ！

……。

……でも、吸血鬼ってニンニクや十字架ぐらいしか効かないんだよね？　木刀じゃ無理だよね……？　いくら夢のなかだからって魔法とか使えないだろうし、あのお姉さんなら魔法ぐらい無傷で乗り切りそうだし……。

……やっぱり退治するのはやめよう……。会っても全力で逃げよう……。

はぁぁぁぁ……。早くオチンチン小さくならないかなぁ……。

◆

お泊りの夜。俺は美由希さんの部屋にいた。

「じゃあ、お布団敷こうね」

「……うん」

ライトグリーンのパジャマ姿となった美由希さんと、水色のパジャマに着替えた俺。

２人で協力しながらベッドの側に布団を敷いていく。敷く布団は俺が泊まるときにいつも使う青色の布団セットだ。ちなみに俺の家にもなのはのお泊り用布団がある。いつも俺のベッドで一緒に寝るから使わないけどな。

布団を敷き終え、寝るための準備を終える俺たち。現在の時刻は夜の９時を回って、もうそろそろ１０時になるところ。寝るには丁度いい時間だし、美由希さんもこれぐらいの時間に寝てしまうそうなので、寝ることになったわけだけど……。

「拓也くん」

いつもは『たっくん、たっくん』と呼んでくる美由希さんが、俺を名前で呼んできた。ベッドに座っている美由希さんは隣に座るように指示してくる。

俺はその指示に従ってベッドに座り、美由希さんに訊ねた。

「……な、何？　美由希さん」

……ものすごく嫌な予感。今夜は恭也さんの部屋で寝る予定だったのを、突然美由希さんが「私が寝る」と言い出してきたときから感じていたものだ。

俯くように下を向いている美由希さん。ゆっくりと顔を上げて、俺の方に顔を向けてきた。……この眼光は覚悟を決めた剣士の目っ!?　士郎さんや恭也さんが２人で練習試合するときたまに見せる鋭い眼光だ！

その真剣な面持ちで美由希さんが訊いてくる。

「……見た？」
と……。
「――っ！」
美由希さんの問いに俺は思わず体を跳ねさせる！　何を見たか言っていないけど、予想はついていた。
美由希さんも俺のそんな反応を見て、『見られた』と悟ったらしい。「そっか……」とつぶやいて顔を俯むかせた。
「……どこから見たの？」
「え、えっと……」
思わず顔を逸らす。これは……言わなきゃダメか？
俺は顔を逸らしたまま、小声で話し始める。
「み、美由希さんが、その……パンツのなかに手を入れ始めたぐらいから……」
「――っ。……そう、なんだ……」
沈んだ声でつぶやく美由希さん。俯いて顔はよく見えないけど、たぶん真っ赤になっているはずだ。その証拠に耳が真っ赤になってるし……。
「……驚かせちゃったよね？　……ごめん、ごめんね、拓也くん……」
「え、えっと……」

ポタポタと美由希さんのヒザの上に落ち始めるもの。なっ!? み、美由希さんが泣いた!?

「情けないよね、私、お姉さんなのに……」

メガネを取って片手で涙を拭う美由希さん。正直何が情けないのかわからない。泣いている意味もわからない。わからないけど……。

「その……驚いたけど、俺、気にしてないよ」

美由希さんを泣かせたくないっ！ 大好きなお姉さんなんだし、いつもニコニコ笑ってる美由希さんが好きだから！

「……拓也、くん？」

少しだけ顔を上げてくれた美由希さん。俺は美由希さんの膝の上で硬く握られていた手を両手で包む。ちょっと冷たくなったその手を両手を使って開かせ、包むように握る。

自分自身泣き出した美由希さんに混乱している真っ最中だけど。俺はなるべく落ち着いた、やさしい声を出すよう意識して言う。

「俺も、寝たふり続けたまま最後まで見続けちゃったし……。おあいこだよ」

「……さ、最後まで……っ!?」

「う、うん……。片手だったのにパンツのなかに両手を入れて動かし始めて、突然ビクビ

クしたとこまで見……」
「――待ってぇぇっ！　それ以上は言っちゃダメぇぇぇっ！」
「……むがっ!?」
　両手で口をふさがれる！　目の前にはウルウル目の美由希さん。顔を上げてくれたのはうれしいけど、どうやら慰めるのは失敗したらしい。
「う、うう……。最後まで、イッちゃうとこまで見られてたの……？」
「……ふん」
　口をふさがれたままうなずく俺。その瞬間、美由希さんの顔が……落ちた。突然全身から力を抜いたようにガクッと顔が下を向き、両手も下へと滑り落ちていった。
「あぁぁぁ……」
　心なしか真っ白になったように美由希さん。これが漫画なら魂が口から毀れちゃっていることだろう。こ、これはマズいな……。
　なんとかして元気づけないと……っ！
「み、美由希さんっ！」
「……」
　名前を呼んで両肩を掴んでみるが、反応なし！　これは、無理矢理元気づけるのは無理のようだ。だっ、だったら……！

「その、俺も時々オチンチンを弄りたくなるときがあるから、大丈夫だよ！」
「……。……へ？」
意外そうに顔を上げてくる美由希さん。思いのほかすぐに反応を返してくれたことはうれしいけど、顔が熱いっ！　恥ずかしいっ！　顔から火が噴きそうだ！
それでも俺は恥ずかしいのを我慢して続ける。うう、顔を合わせていられないよ～……。
「さ、最近だけど……時々、オチンチンが大きくなったりして……。今日も、美由希さんがパンツのなかに手を入れてるの見て、大きくなっちゃって……。むずむずして弄りたくなってたから、その……だから……」
「たっくん……」
「病気じゃないから大丈夫だよ！」
そう言って体ごと顔を背ける！　下を向いて美由希さんがどう反応するのかビクビクしてると……。
ギュっ。
後ろから抱きしめられた。
「……美由希さん？」
「……」

声をかけるけど、無言の美由希さん。美由希さんは体勢を整えて体を寄せてくると、もう一度抱きしめてきた。

「えっと……」

「――ありがと、たっくん」

俺の耳元でそう小さくつぶやいた美由希さん。俺は俺の体を抱きしめている美由希さんの腕に手を重ねて、「うん」とうなずいた。

◆

「うわぁ……、すごんだね、たっくん」

「は、恥ずかしいよ、美由希さん。そんなに見ないでよ」

「ゴメンゴメン。――でも、オチンチンってこんなに大きくなるんだね。元々大きかったけど、まだ大きくなるなんて……。それに、硬くなってるし」

そう言って指でオチンチンをつついてくる美由希さん。現在俺と美由希さんはズボンとパンツを脱いでいて、ベッドの側の床に敷いた布団の上で向かい合うように座って

いた。
　つんつん、つんつんと先端をつつく指を手で掴んで止める。
「ちょっ、止めてよ、美由希さん。先端に触られるの、結構痛いんだから」
「そうなの？　あははは、ゴメンね」
「もう……」
　ゴメンゴメンと笑っている美由希さんにため息を吐く俺。全然懲りてないな、美由希さん。
　だけど――。
「じゃあ、今度は美由希さんの番だよ」
「へっ!?　……えと、やっぱり……私も見せなきゃダメ、かな？」
　ニヤリと笑って言った俺に、顔を赤くする美由希さん。恥ずかしそうな顔で、下から上に目をウルウルさせてるけど、
「うん」
　俺は笑顔でうなずいた。
「俺だって見せたんだから、今度は美由希さんの番だよ」
「……ほんとに見せなきゃ、ダメ？」
「ダメ」

「あうううぅ……」

正座した状態でもじもじと膝を動かす美由希さん。すでに下半身丸出しなのに、今さら何で恥ずかしがるのか。

俺は小さく息を吐いて言う。

「元々美由希さんが言い出したことでしょ？　『本当にオチンチン反応したの？』って。それを確かめるためにズボンとパンツ脱いだのに……」

「うう……」

俯く美由希さん。まあ、空気を変えるために脱いで見せたの俺だし、不公平だからって美由希さんのズボンとパンツを脱がせたのも俺だけどね。俺は美由希さんの腕に手を絡めながら続ける。

「俺も美由希さんのよく見たいよぉ。俺の見たり触ったりしたんだからいいでしょ？　お願いだよ、美由希さぁん」

「う～ん……」

くくっ、悩んでる悩んでる。やっぱり困った顔してる美由希さんってかわいいな。うーん、このままもう少し困らせてもいいけど、あんまり虐めちゃかわいそうだ。元々そこまで見たかったわけでもないんだし。

もういいよ、そう言って終わらせようとしたとき――。

「そんなに、見たいの？」
美由希さんがそう訊ねてきた。俺は……俺を真っ直ぐ見つめてくる美由希さんに、思わずうなずいてしまう。
うなずいた俺を見て、美由希さんは覚悟を決めたような表情になり、ベッドの端に座った。
「少し、だけだからね？　絶対、みんなには内緒だよ？」
「……う、うん」
「じゃ、じゃあ……」
俺から顔を背けた美由希さん。手をお尻の両側において、ゆっくりと膝を開き始めた。え……、美由希さん？
呆然としている俺を無視して美由希さんは膝を開き続ける。ゆっくりと、躊躇うように時々閉じたりさせながら、大きく開いていった。
大きく股を開いた美由希さんが恥ずかしそうに訊いてくる。
「その……どうかな？」
美由希さんの行動に、無言でツバを飲む。ど、どうって……。よく見ろってことなのかな？
開いている股の間に移動して、正座する。うわ、お風呂じゃ気にならなかったけど、毛

が生えてるんだ……。
　毛が生えていることに驚きながら、視線を下へ向ける。お風呂では閉じていた割れ目が少しだけ開いてて、なかからピンク色っぽいものが見えた。
「うわぁ……」
　思わずそんな声が出てしまう。吸血鬼のお姉さんのを夢で見たことはあったけど、あのときは恐怖と驚きで見るどころじゃなかった。
　あ、そういえば……。
「ねえ、美由希さん」
「な、何かな？　もういいの？」
「えと、どこにオチンチンが入るの？」
　入れる穴なんてないよね？　吸血鬼のお姉さんはオチンチンを股の間に入れてたはずだから、穴があると思ってたんだけど……。
「……え？」
　美由希さんの顔がポカンとなった。え？　何かマズいこと聞いちゃった？
「女の人のここに入るんだよね？」
「……そ、それは、そうだけど……」
「でも、穴なんてないよ？」

「それは――」

何かを言いかけて、かぁーっと真っ赤になる美由希さん。どうしたの？　俺が首をかしげていると、美由希さんが両手を股に移動させた。

美由希さんは腰を丸めて前かがみになると、両手で割れ目に触れた。ふるふると指を震わせながら、それぞれ割れ目になってる肉に触れて、左右に開いた。

花びらのようにクパッと開いた割れ目。内側には内臓みたいなピンク色が広がっていた。

「ごくっ……」

喉をならしてツバを飲む。すごい、これが中身、なんだ……。

夢中で中身を見ていると、上のほうから声をかけられた。

「み、見えてる？　たっくん」

「う、うん……。見えてる……」

美由希さんにそう返し、さらに股の間に顔を近づける。むせ返るような美由希さんの匂いが鼻に入った。

上ずった声で美由希さんが言う。

「え、えっとね。……ち、小さい穴が見えてるかな？」

「うん……。小さい穴が、２つ……かな？」

「その、上のほうがお……おしっこの穴で、下の穴がオチンチンを入れる穴なんだよ」
「そ、そうなんだ……」
　上の穴よりもヒクヒク動いてる、この穴に……。
「じゃあ、この小さいのは？」
　ふと気になったので、指を挿して訊ねてみる。今まで穴と一緒で見えてなかった割れ目のてっぺんにある突起を。
「そ、それはクリトリスっていって、女の人の性感帯だよ」
「性感帯？」
「触ったり、触られたりすると気持ちよくなるところかな？」
「へぇー……」
　気持ちよく、か……。挿していた指を近づけて、指の腹で触ってみる。おおっ、コリコリだ。
「――あああっ！」
　うおっ!?　美由希さんがビクってなった！
　美由希さんの反応に驚いて手を引っ込める！　恐る恐る美由希さんの顔を見上げて見ると……。
「はぁはぁ……はぁはぁ……もう、いきなり触っちゃダメだよ……」

「う、うん……」
……すごく、エッチな顔をしてた。
改めて美由希さんを見上げて見る。いつもは乱さない呼吸を荒くして、体を震わせていた。
「はぁ……はぁ……そこは女の子の敏感なところなんだよ。いきなり、それも指なんかで触ったらダメじゃない」
「ご、ゴメンなさい」
素直に謝る。あれは指で触ったらいけないものだったのか。
そう反省していると、美由希さんに頭を撫でられた。
「ワザとじゃないんだし、もう許してあげるよ」
「美由希さん……」
「でも、今度から気をつけるんだよ?」
「う、うん……わかった」
「それならよし♪」
いつもの調子に戻って、ニッコリ笑顔でうなずく美由希さん。じゃあ、と膝に両手をついてベッドから立ち上がる。
「そろそろ寝ようか、たっくん」

ニッコリ笑顔を返して、ズボンをパンツを集め始めた美由希さん。
「……う、うん」
俺も美由希さんを追って立ち上がる。先に服を拾っていた美由希さんから自分の服をもらって、ズボンとパンツを穿きなおす。ちなみにオチンチンは驚いたり、怒られたせいか、元のサイズに戻っていた。
「ん……、やだ……。こんなに……？」
「どうしたの、美由希さん」
「――えっ!?　べっ、別になんでもないよ！」
くしゃっ。
何かを握りつぶす音。とても小さな音で、これは……ティッシュかな？　白いの見えてるし。
気になって見ていると、美由希さんがニコニコ笑顔を浮べて近づいてきた。俺の肩に手を置いてベッドのほうへ体を向けさせる。
「美由希さん？」
「さあ！　明日はお父さんに恭ちゃん、私とも一緒に鍛錬するんだから、早く寝ちゃおう！　今夜は同じベッドで寝ていいからね！」
「え？　どうしたの？」

「ど、どうもしないよ！　ほら、お布団に入ろうねぇ～」
そう言ってベッドの布団を捲ると、美由希さんは無理矢理俺を寝かしつけ始めた。
むぅ……ものすごく怪しいな。すっごく怪しいけど……まっ、いいか。
美由希さんにうなずいて俺はベッドに入った。
美由希さんは俺がベッドに入るのを見届けると、またゴソゴソと作業を始め、少ししてからズボンとパンツを着て、ベッドに潜り込んできた。
仰向けで寝転がり、顔だけ横にいる美由希さんに向けて訊ねる。
「……終わったの？」
「……う、うん」
小さくうなずく美由希さん。こちらはうつ伏せで寝転がっていて、枕に顔を埋めていた。
「……」
「……ねえ、たっくん」
「……なに、美由希さん」
「こ、今夜というか、今日のことは……その……」
「――わかってるよ」
「え？」

「みんなには秘密、でしょ？」
「……う、うん。ごめんね……」
「別に、気にしてないよ」
「……そう、なんだ……」
「……。うん、気にしてないよ。だって美由希さんのエッチなとこを見れたからね」
「――なっ!?　なななな、いっ、いきなり何を言ってるのかな……!?」
「女の人のあそこが、あんな風になってたなんて……。本当に驚きだったなぁ」
「そ、それは……！　え、っと……あの、私の……そんなに変、だった……？」
「……」
「なんで無言なの～!?　ねえっ、変だった？　ねえ、たっく～ん」
「ちょっ、ちょっと揺らさないでよ！　別に変じゃなかったって！　やっぱり美由希さんってちょっとズレてるな～って、思ってただけだから……っ！」
「そうなんだ……。――って、ズレてるってたっくんにだけは言われたくないよ！」
「はいはい。もう夜も遅いんだし、寝ようね、美由希さん」
「ちょっ!?　たっくん!?」
「おやすみ～」
「もう、無視しないでよぉ～」

俺の体を揺らしてくる美由希さん。なんとかいつもの調子に戻ってくれたようだ。
「たっく～ん？」
俺はもう一度大きく息を吐いて、そのまま眠り始めた。
「もうっ……。……。……ふふっ」
ギュっ。
そのまま寝ようかとしていると、いきなり隣でうつ伏せになって寝転んでいたはずの美由希さんが抱きついてきた。
「……美由希さん？」
「……」
俺を抱き枕にするように、横抱きで抱きついてる美由希さんに声をかけてみるが、無反応。……なるほど。今度は美由希さんが無視、ね……。
それなら――。
と、俺も美由希さんに対抗するように横向きになる！　腰には届かないので胸の下辺りに腕を回して、体をくっつける！
1人用の少し大きめの枕に頭を乗せて、膝同士も近づける。枕の位置が同じというか、2人で使っている状態なので、顔同士がすごく近い……。
うわ……、本当に近い……。もう少しで触れちゃうんじゃ……？

「……」

美由希さんに対抗して自分でやったことだけど、すでに後悔し始める俺。視線が美由希さんのピンク色の唇に釘づけになって――。

だ、ダメだ！　やっぱり……。

――俺は顔を背けた。

そのまま無理矢理仰向けになって寝転ぶ。両手をお腹に置いて、足も真っ直ぐ伸ばして天井を見上げる。

顔が熱いっ！　すごく熱いっ！　ううっ……思わずキスしそうになっちゃったのか、今？

「……んっ」

「――っ」

俺を抱き枕にするために、俺のお腹の上に乗せていた美由希さんの右腕。その右腕に再び力が入れられ、抱き寄せられた。

――美由希さんが俺に抱きついてきた。

と、いうほうが正しいか。

空いていたほうの左腕も使って俺の右腕を絡めとり、布団のなかでは右足を俺の足の間……というか体の上に置いて引き寄せ、俺の肩に顎を乗せてくる周到さ。

ものすごく密着されて、乗せられてる腕や足が重くて暑苦しいが、それよりも俺は戸惑っていた。

腕が、あ、足が……。い、息も耳に当たって……う、くぅ……。い、いくらなんでも抱きつきすぎだよぉ……。

「み、美由希さん……？」

「すぅ……すぅ……」

声を出してみるが、帰ってくるのは寝息だけ。……ほ、本当に寝てるのかな？

俺は起さないよう恐る恐る仰向けから体勢を変えて、美由希さんに背中を向けようとするが――。

「う、ん……たっ、くん……」

「――っ！」

もっと抱き寄せられた！　しかも、耳元で囁かれて……。

――っ。

美由希さんの声が頭のなかで鳴り響き、美由希さんの匂いや体を感じてしまい、とうとう反応してしまった。

「く……、んっ……」

大きくなってしまったオチンチンがパンツとズボン、そして美由希さんの太ももを押

し上げる。
「あ、うう……」
大きくなったオチンチンを中心に、美由希さんの太ももがもぞもぞと動き始めた。
だ、ダメ……っ！　ダメだって、み、美由希さん……っ！
オチンチンだけでなく、全身がビクビクと反応し始め、思わず美由希さんの胸にすがりつく！
あうう……こ、これって、気持ちいい……のかな？
「はぁはぁ……はぁはぁ……あううっ……」
体が熱くなって、さらに美由希さんにすがりつく！　胸の間に体を頭を埋めて悶える！
「くっ、あうう……」
オチンチンが張って、むずむずが最大まで膨れ上がる感覚。こ、この感じって、吸血鬼のお姉さんの夢と同じ……!?　ま、またあの白いのが出るの、かな？
ブルブルと震えながら、気づかないうちにこちらからも美由希さんの太ももにオチンチンを擦り付けていると、突然美由希さんの動きが停止した。
「……？」
……美由希さん？　動きが止まったことで、オチンチンから感じていたあの感覚も弱

くなる。
　オチンチンからの感覚が落ち着いてきたところで、美由希さんの胸から顔を出して見上げる見ると――。
「たっくん……」
　ぼーっとした顔の美由希さんがそこにはいた。
　寝ぼけているようにも見えるが、美由希さんの顔は少し赤くなっていて、昼間見たような、エッチな表情を浮かべていた。
「美由希、さん？」
「また、オチンチン大きくなっちゃったのぉ？」
「……え？　――っ!?」
　戸惑うのも一瞬！　いきなり手をパンツのなかに入れられた！　お腹に乗せていた太ももをどかすと、流れるような手つきでパンツをズボンごと引きずり下ろして、ペニスを掴んできた！
「ちょっ……!?　み、美由希さん!?」
「しーっ、だよ。大きな声を出したら、みんな起きちゃうから、静かにしようね、たっくん」
「で、でも……。ふ、布団とオチンチンが擦れて……い、痛くて……」

「んん～？　そうだったの？」
首を少しかしげながら、ちょっとだけ布団とオチンチンの間にスペースを作ってくれる美由希さん。はぁはぁ……ど、どうしたんだ、いきなり……。
激しく呼吸を繰り返しながら落ち着こうとしている俺。そんな俺を美由希さんは容赦なく追い詰めていく！
すごく近い距離で、美由希さんがつぶやく。エッチな、熱っぽい声で。オチンチンを触りながら。
「ビクビクしてほんとに苦しそう。やっぱり、大きくなったときにちゃんと抜いてあげといたほうがよかったね。今から抜いてあげよっか？」
「み、美由希さん、何を言って……」
「うーん……このまま手でしてあげたら、お布団が汚れちゃうしねぇ……どうしようかぁ？」
み、美由希さん？　まさか、寝ぼけてる？　かろうじで聞き取れてるけど、呂律があまり回ってない。
寝ぼけているのなら、鼻でも摘まんで起してあげようかと思っていた、そのとき――。
「そうだ♪　口で抜いてあげるほうほうがあったね♪」
「く、口？」

いきなり何を言ってるんだ？

「大丈夫、美由希お姉さんに全部任せなさい♪　これでも少女漫画とかで勉強してるんだからね♪」

「へっ!?　ちょっ……!?」

もぞもぞと動きながら美由希さんが布団のなかに消えていく！　な、何を……。

パクッ。

「――っ!?」

オチンチンが包まれる感覚！　ヌルヌルに濡れていて温かく、そしてザラザラとしたものが蠢き、時々上下から当たる硬いもの！　夢だけでなく、少し前にあった温泉旅行でも感じたこの感覚は――。

「み、美由希、さんっ……！」

ま、まさか……！　オチンチンを咥えてる!?　口で、口のなかで……。

「うう～……ん～……うぶぅ～……」

もごもごと口のなかで転がされている感覚！　だ、ダメだ！　またあの感じが……すごいのがぶり返してきて……！

「――で、出るっ！　でっ、出ちゃうよぉっ！」

ビュッ！　ビュビュッ！　ビュゥゥゥウウウ！

熱いものが上り詰め、あっけなくオチンチンの先っぽから噴出した！　俺はビクビクと跳ねながら何かを噴出し続けるオチンチンを止めることも忘れて、そのまま美由希さんの口のなかに出し続けた。

あ、あああ……き、気持ちいいぃ……っ。

「はぁはぁ……はぁはぁ……」

完全に出し終わっても包まれている感覚が続いている。まだ美由希さんがオチンチンを咥えているようだ。舌らしいザラザラのものが亀頭に当たってビクッと体を反応させてしまう。

「はぁはぁ……はぁはぁ……はぁはぁ……。……んっ、すぅぅぅ……はあぁぁぁ……」

大きく息を吸い込んで吐く。出したことが関係してるのか、段々落ち着いてきた。

そして、落ち着いてきたことで開放感や満足感に似た感情が広がっていき、一気に睡魔が襲ってきた。

まだ美由希さんに咥えられたままだけど、頭がボーッと熱くなってきて、そのまま俺は……。

◆

早朝。まだ5時にもなっていない、深夜とも取れる時刻に私は布団のなかで目を覚ました。

いつもはもっと遅くに、目覚まし時計の音で目を覚ます私が、こんな早い時間に起きたきっかけは、臭い。

生臭いような、鼻につく臭いが原因だった。

まだ寝ぼけていた私は、臭いの原因を布団のなかで鼻をヒクヒクさせて探していて――気がづいた。

口のなかにも、その臭いがついてることを。

そして、先ほどから頬っぺたなどに当たっている温かい棒の存在に。

「こ、これって……まさか……!?」

指で触ってみて、私は改めてその棒の正体に気づき、臭いの正体にも確信を得る！

これって、拓也くんのお、オチンチンなの!?

「な、なんで……？　で、でも……」

どうしてこういう状況になっているのか、わからない。必死に頭を何度もひねりながら昨夜のことを思いだしていくと……。

「――あっ！」

思い出した……。

わ、私が……く、口で……口に咥えてしゃ、射精させちゃったんだ……。

自分でなぜそうしてしまったのかわからないが、一言で言ってしまえば、「雰囲気に流されてしまった」の一言に限る。

寝たふりしながら拓也くんとベッドで抱き合って、大きくなったオチンチンを思いだしていると、丁度拓也くんのオチンチンが大きくなってて、太ももを擦り付けたら、擦り付け返してきて……その姿が子犬みたいで、かわいがりたくなっちゃって、頭がボーッとして、そのまま思いついたことを……。

「私ったらなんてことを……」

そう後悔しながらも、口のなかに感じる生臭さを消そうとツバを飲む込む。

うう、少女漫画なんて読まなきゃ良かった……。

普段は漫画などあまり読まないのに、学校の友人に勧められて試しに読んでみたのが、ここぞとばかりに災いしたようだ。もしも読まずに行為自体知らなかったら、手だけで射精……。

あうう……どっちにしろ射精させるなんてマズいじゃないの……。

むしろ手でしていたほうが大惨事だったよ……。

拓也くん、すごい量出すから飲みづらかったし……。

「――って、私ったらなんてことを……」

思い出して、顔が熱くなる。うわわぁ～……ほんとに飲んじゃったこと覚えてるよ、私……。

ピクッ。

「――っ！」

布団のなかでため息を吐いていると、拓也くんのオチンチンが動いた！　も、もしかして起きたの!?　こ、この状態で起きられると困るよぉ～！

……。

必死に気配を消して息を潜める！　どうか起きないでぇぇぇ！

……。

……。

……。

……ふぅ、どうやら起きなかったらしい。

そのまま安堵のため息を吐きたいけど、ぐっと我慢して私は布団から出る！　音を立てないようにベッドから降りて、ティッシュを取る！

まずは顔を拭いて……うわわ、このブルブルしてるのって精子、だよね？　固まりか

けててすごい臭い……。よく見るとパジャマにもついてるし、これは髪とかにもついてたりするのかな？

ティッシュを使い拭っていくが、肌のものは取れても服についたりしたものはあとが残ったりして、その特有の臭いはもっと取れなかった。

「これは洗濯しないと無理かなぁ。体の臭いはシャワーで消さないと……」

幸い早く起きたことでみんなが起きるまで時間はある。この時間ですべてを処理しないといけない。私は気合を入れて行動に移り始めた。

まずはティッシュを片手に、拓也くんを起さないよう布団を慎重に捲る！

昨夜私が捲ったと思わしきズボンとパンツが現れ、股のほうではオチンチンがボロンと飛び出していた。

あ、あれ？　意外とキレイ……？

昨夜はすごい量を口に出されたと思ったが、それは気のせいだったらしい。捲った布団の内側にもほとんどついてなかった。

「……ん？　ちょっと待ってよ……？」

眉間の中心を指で揉む。拓也くんや布団にはあんまりついてなかったけど、私には結構精子がついてたよね？　さっきもティッシュで拭うの苦労してたぐらいだし……。

……。

私にだけついてた理由をよくよく考えてみると……。

「……～～～～っ！」

ゴクッ。

大きく喉が鳴る。ああっ、顔がすごく熱いいいいっ！　うう、考えなきゃなかったよおぉぉ……。

そう後悔しつつも、口のなかで舌をもごもごさせてツバを飲み込み、私は処理を再開させる。

特に証拠が残っていさそうな拓也くんのズボンとパンツをそのまま脱がせて、起さないように慎重に慎重に、抱きかかえ、床に敷いている布団の上に寝かせる。

「んん……？　美由希、さん……？」

床の布団に寝かせて、かけ布団をかけた瞬間、拓也くんが目を開けた！　私は内心ビクビクとしながら、拓也くんの頭をやさしく撫でる！

「よしよし、大丈夫だからね～。まだ朝じゃないから寝てようね～」

声のボリュームに気をつけながら、やさしく何度も頭を撫でていると、何とか拓也くんが眠り始めてくれた！

「ん……ふわぁぁ……」

私はお腹をトントンとやさしく叩いて、そのまま待機！　するとゆっくりと瞼が閉じ

て、ほどなくして寝息が聞えてきた。
ふぅ～～～～っ。
腕で汗を拭って、心の中で息を吐く。助かったぁぁぁ……。
それから私は拓也くんを起こさないように気をつけながら、作業を再開させた。
素早く敷布団につけていたシーツをとって、布団のカバーも外してたたみ、拓也くんのズボンとパンツをその中に。
そして自分の着替えをクローゼットから取り出し、そのまま音を立てないよう、ドアを開けて1階へ。
足音を出さないよう廊下を通って、まずは洗濯機のなかに入っている洗濯物をすべて取り出し、シーツと布団のカバー、そしてなかに隠していた拓也くんのパンツとズボン、そして自分のパジャマと下着を入れて、洗濯機を回す。
洗濯機が回り始めたのを確認して、私は歯ブラシとコップを持って隣接する浴室へ。
頭の先から温かいシャワーを浴びて、全身の臭いを落とし、口のなかの臭いや何ともいえない味も処理していく。
体も口も洗い終え、もう一度全身をシャワーで流していた頃。
コンコン。
脱衣所のドアがノックされた！　ガチャと脱衣所の扉が開く音が聞え――。

「美由希？　お風呂に入ってるの？」
　こ、この声はお母さんっ!?　脱衣所の入り口に映るシルエットもお母さんのそれだった！　私は不信に思われないよう内心の動揺を隠して返事を返す。
「う、うんっ！　そうだよ～」
「何かあったの？　洗濯機も回してるようだけど……」
「べっ、別になんでもないよ！　その……ちょっ、ちょっと、汚れちゃっただけで……」
「あら？　そうだったの？」
「う、うん……。お布団も汚れちゃったから、これから2階のベランダに干すところだよ」
「あらあら、拓也くんは大丈夫なの？」
「――ふえっ!?　な、なんで!?」
　もしかしてバレた!?　私は慌てながらお母さんに言う！
「え、えっと……！　全然大丈夫だよ！　ちゃんとズボンとパンツも脱がせたし！　気づかないで寝てるみたいだったから！」
　一気にまくし立てて、気づく。
　よ、余計な事まで言っちゃったぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?　ズボンとパンツ脱がしたって、自分から何かしたことをバラしてるようなもの――。

「そうなの。しっかりと拓也くんの面倒を見てるのね」
うふふふ、と微笑むような笑い声が聞えてきた。……へ？　お、驚かないの？　えっと、お母さん、気づいてない……とか？
首をかしげる私に、お母さんは続けて言う。
「私も何か手伝いましょうか？」
「え、あ、べっ、別にいいよ！　もうほとんど終わってるし！」
「そう。わかったわ。じゃあ、私は朝ごはんの準備を始めるわね」
「う、うん。ありがと……」
お母さんのシルエットが消える。ドアが開く音がしたので、出て行ったのだろう。
「……」
浴室にひとり残される私。体が冷えていったことで頭も冷え、冷静にお母さんのあっさりとした反応の理由を考え、思いつく。
……思いついて、息を吐く。
天井を見上げて、
「ごめん、たっくん」
私は拓也くんに謝った。おそらくまだおねしょが続いていると思われてしまった、拓也くんに……。

第6話　再会　前編

高町家にお泊りしてから数週間後。待ちに待っていた夏休みがいよいよスタートしようかという頃。

「ふふふ、久しぶりね」

「お、おまえは……!?」

「あの満月の夜以来――数ヶ月ぶりになるのかしら？」

「う、嘘だ……！　な、なんで……!?」

――淡く光る紫色の長い髪。

――暗闇で輝く赤い瞳。

――唇から覗ける白い牙。

あの、夢のなかでしか会っていなかった、夢のなかの存在だと、空想だと思い込んでいた、吸血鬼のお姉さんと俺は、再会してしまった。

◆

「本当に久しぶりね」
薄暗く、朝霧が視界を霞ませるなかで、吸血鬼のお姉さんが俺に微笑みかける。
「あの夜以来、私はずっとキミが忘れられなかったのよ」
あのときと……夢のなかと変わらない姿で――。
「また、キミの血を吸ってもいいかな」
唇から覗かせた牙を、白い指先で撫でながら――。
――っ！
そんな吸血鬼のお姉さんの姿に、脳内である光景が蘇る！
繰り返し夢のなかで見ていた光景！　自分が目の前に立っている吸血鬼から襲われる光景が蘇った！
「――ヒッ！」
自分の口から漏れる悲鳴に、俺は停止させていた思考を高速で動かし始める！
やっ、ヤバイっ！　に、逃げないと、ま、また襲われるっ！
生存本能第一！　逃げるが勝ち！　これはただの逃げではない！　反撃のための戦略的撤退ぃ――、

「――ねえ、どうしたの？」
「うわぁぁぁぁっ!?」
回れ右をする前に吸血鬼のお姉さんが近づいてきた！　近づいてくる速度はゆっくりと、歩きながらだけど、迫力が凄まじい！
紫色の髪が映える、白いドレスのような服を揺らし、真っ赤な瞳を輝かせながら近づいてくる姿はモンスターそのもの！
って、見入ってる場合じゃない！　早く、早く逃げないと……！
俺はその場で回れ右！　太ももを９０度という美しい角度まであげて、腕をＬ字に固定！　そのまま両手両足を動かしてスタートを切れば、吸血鬼のお姉さんからも逃げ切れるはず！
さあ、スタートを切れ、中村拓也！
気合を入れて地面を踏み込み、そのまま重心を前へ！　恭也さんや美由希さんに習った走法で走り出し始める！
「あっ、コラ！」
後ろから吸血鬼のお姉さんの声をかけられる。その声には動揺の色が混じっていた。逃げるとは予想していなかったようだが、もう遅い！　俺はこのまま後ろを振り返らず、ダッシュで家、ではなく、人類最強の戦闘民族が住んでいる高町家まで――。

ボフンッ。

「ふがっ!?」

スタートの走り出しから全力の走りに移ろうとした瞬間、何かに体が、顔が埋まった！

それはまるで壁のようなもので、肌触りのいい布のようなもので、顔を埋めているふたつの玉は柔らかく、温かかった。

なんだこれ？　さっきまで道にこんなのなかったはずだぞ？

スタートするとき見たときも一本道だった。壁など存在するはずなどありえない。

俺は顔面を挟んでいる、というか顔を埋めている玉を手で探る。ふむむ……、このハリのあって、程よく温かいモチのような感触、どこかで……？

むむっ？　それにこのいい匂い……。香水か？　それも女性モノで、あんまり強くない香水。

……。

と、いうことは……。

俺の顔を挟んでいるものは……俺が顔を埋めて、さらに両手で探る、というか、揉んでいるものは……。

女の人のおっぱい!?

気づいた俺はすぐに両手を離し、顔を谷間から出す！
叱られる！　そう思って顔を伏せようとして思い出す！　背後に迫る人間の脅威に。
そ、そうだ！　この人もここにいたら襲われる！　は、早く吸血鬼のことを伝えて逃げないと！
俺は顔を上げて、
「あのっ！　ぶつかってすみません！　でも、それよりも後ろに吸血鬼の……」
言葉がピタリと止まる。
……え？　あ、れ……？
「い、石、仮面……っ!?」
顔を上げたその先にいた女の人の顔には、石仮面が嵌められていた。
太古の時代に創られたような、顔全体を隠すような石仮面。
図工の時間に俺が作ったようなまがい物とは遥かにレベルが違う、石仮面。
「その石仮面は……まさかＤＩＯの!?　ブランドー家の一族か!?」
「？」
「いや、ＤＩＯは確かに死んだはず……。じゃあ、ジョバァーナの？」
と、マズイ！　のん気に考えてる場合じゃない！　この人も後ろのお姉さんと同じ吸血鬼ならすぐに逃げないと……！

「――うふふふ、つーかまーえたー♪」
背中から、首から前へ回される２本の白い腕！　その腕に引き寄せられ、ずむっと後頭部が埋まる！
２つのおっぱいに挟まれた俺が上を見上げると、そこにはニッコリ笑顔を浮べた吸血鬼のお姉さんと、石仮面をつけた女の人が俺を覗きこんでいた。
「もう逃げられないわよ～♪　うふふふ……」
「ぎゃあああああああっ!?」
俺は、あっけなく意識を失った……。

◆

「あららら、脅かしすぎちゃったかしら?」
私の腕のなかにはだらりと力なく気を失っている拓也くん。
「ん～、でも気絶までされちゃうなんて。やっぱり最初の『出会い』が悪かったからなのよねぇ」

ほんと、出会ってすぐに吸血して、そのまま逆レイプまでしちゃったからなぁ～。しかも、全部夢のなかでの出来事だと思っていたのに現実で再会することになったら気絶もするわね。

「……いえ、それだけではないと思われますが」

正面から声をかけられる。視線を拓也くんから上げてみると、いつものメイド服を着込み、顔にはフルフェイスの、石でできた仮面をつけたノエルが立っていた。ふふ、正体を隠させるために付けさせた石仮面だけど、我ながらなかなかの出来ね。これでアステカの儀式でもすれば、数百年後には本当に……。

「――と、それよりも……」

「はい。すでにお車の準備は出来ております」

「そう。なら拓也くんが目覚めないうちに向いましょう。拓也くんはこのまま私が車まで運ぶから」

「はい」

いつも通りしっかりとした口調でうなずくノエル。メイド服のポケットから携帯電話を取り出し、電話をかけ始めた。おそらく電話の相手はもうひとりのメイドであるファリン。

電話を終えてしばらく待っていると、一台のリムジンがこちらにやって来た。

リムジンは私たちを追い越し、そのすぐ後に急ブレーキをかけながら停車した。
……い、いつみても手荒い運転ね……。
ドジっ子メイドの運転に呆れていると、リムジンのエンジンが完全に停止し、運転席のドアからファリンが降りてきた。
「お待たせしました忍お嬢さま～、メイド２号、ファリンただいま参上ですぅ～♪」
元気一杯に笑顔を浮べるファリン。かわいらしいけど、今は時間がない。早くこの場から離れないといけない。
「ご苦労様、ファリン。今度は、拓也くんを後部座席に乗せるのを手伝ってもらえるかしら？」
「はい！　かしこまりましたぁ忍お嬢さまぁ」
元気よく返事をしたファリンと一緒に、リムジンの後部座席に拓也くんを乗せる。そして運転の上手いノエルが運転席へと乗り込んだ。
ノエルは石仮面を外して助手席に置き、バックミラー越しにこちらを見て言う。
「忍お嬢さま」
「なに、ノエル」
「あの石仮面というものは付けないといけないのですか？」
「当たり前じゃない。私たちの正体を隠すためには必要よ。ああでも、運転中は危ない

から付けなくてもいいわよ」

「……」

無言のノエル。バックミラー越しに見える表情はどことなく硬い。それからノエルは車のエンジンをかけ、屋敷へ向い始めて数分後。覚悟を決めたように再び口を開いた。

「忍お嬢さま、あの石の仮面は……石仮面はやめませんか？」

「？　どうして？」

吸血鬼としては１番有名な仮面。といっても過言ではない石仮面。その石仮面を再現した石仮面のどこが気に入らないのかしら？

「それは……拓也さまも怖がりますし。何よりも重いですし、窮屈ですし……」

ノエルの口から次々と漏れる不満。どうやら石仮面はノエルにはそうとう不評らしい。

「ふはははは！　私は人間を止めるぞ！　ジョジョ～！」

ファリンにはこんなにも大好評なのに……。ＤＩＯの真似をして車の中でジョジョ立ち、ジョジョ座り？　をしているファリンから視線をノエルへ向けると、

「ファリンも今だけです。その内飽きて勝手に外しますよ」

私の考えていたことを読んだかのように忠告してきた。……まあ、確かに。ファリン

ならあんな顔全体を覆うような仮面なんかすぐに飽きて外しちゃいそうね……。
「やっぱり今忍お嬢さまが付けていらっしゃるような、目元だけを隠す覆面のほうがいいかと……」
「これのこと？」
　石仮面よりもミュータントな亀を連想させる、この穴あきリボンがいいと？　黒いリボンのような覆面を指差す私に、ノエルは前方に顔を向けたままうなずいた。
「はい。そちらのほうが何かと都合がいいかと思われます」
「うーん……でも、これって製作時間数分の代物よ？　それに目元しか隠してくれないし。すぐに正体がバレるんじゃない？」
「それでも、石仮面よりはマシかと……」
　ノエルはそう言ってくるけど、石仮面ってすごく時間と手間がかかってるのよねぇ。もう付けないなんてそんな勿体無いこと――。
「でしたら、忍お嬢さまも一度あの仮面を付けて見てはいかかですか？」
「へ？」
　ノエルの提案に、ファリンもノってくる。
「そうですよぉ～！　試しにこれを付けて拓也くんに会ってみてはどうですかぁ？」
「私が、石仮面を付けて？」

首をかしげると、２人のメイドは同時にうなずいて見せた。……私が石仮面を付けて、拓也くんと会う。

……。

それはなかなか……おもしろそうじゃないの♪

「ではでは、忍お嬢さま」

「ええ」

ファリンから石仮面を受け取る。ふふふふ、まだ付けないわよ。付けるのは拓也くんをＶＩＰルームに案内してからよ。

うふふふふ……。

◆

「……あ、れ？　ここ……どこだ？」

目を覚ましてみると、俺は知らない部屋のベッドで寝かされていた。

部屋を観察してみると、天井や壁まで木で出来ていて、まるでログハウスのような部

屋だった。

「窓もあるみたいだから地下……じゃないよな？　壁の両側にも窓があるし……小屋？」

窓から差し込む太陽の光に首を傾げる。ちなみに見える景色は木、木、木、木、木、の森林だった。自分がいるベッドの反対側にある窓からも、木しか見えていない。

「……」

いや、本当にここ、どこ？

俺、昆虫採集に行こうとしてたよな？　夏休みの自由研究用に。まだ日も上がってないような早朝に虫取りに行こうとしてたよね？　なんで窓からギラギラと輝く太陽が見えてるんだ？　なんでログハウスのベッドなんかで寝てるの、俺？

「何があった、何があった、何があった、何があった……？」

両手で頭を抱えて、思い出す！

早朝から今、ベッドで起きるまでに起きたであろう空白の時間を！

「え、ええっと……家を出るときお父さんとお母さんにもきちんと言ってから出かけた。昆虫採集をする予定の森……というか、家の敷地にある森に入る許可はしっかり月村さん家から前もってもらってる。虫取り網とカゴも持ってきて――今はベッドの側に置いてある。月村さん家に向う道を歩いていた記憶もある。でも……」

――それから。

それから――何が、あった？

俺が頭を抱えたまま、思い出そうとしていると――。

コンコン。

ドアをノックされた。

「――っ!?」

ノックの音が耳に入ってきた瞬間、即座に臨戦態勢を整える！　誰っ!?　誰だっ!?　誰がやってきたんだ!?

ベッドの上でシーツを被り、完全防御体勢の構えをとったままドアのほうを偵察する！　くそぅ、ふ、震えが止まらねぇッ！　止まれッ、止まれよおッ！

体の震えを止めようとしているうちに、ガチャっとドアノブが回った。ギィっと音を鳴らしながらドアが開いていき、誰かが部屋のなかへと入ってくる。俺は起きているのが気づかれないように、シーツを深く被って耳を澄ませた。以前、恭也さんに習った『足音で人数を把握する』という技を使うために。

……あ、足音から相手はひとり……か？

足音が重なるような音は聞えなかった。どうやら入ってきたのはひとりらしい。

その足音は段々と大きくなって、ベッドへと近づいてくる。

だ、誰……、誰なんだよぉぉ……。
怖くて怖くてしょうがない。
近づいてくる足音。かすかに聞える呼吸音。聞えてくる音すべてが怖くてしょうがない。
ここで勇気を振り絞ってシーツから飛び出し、誰とも知らない相手を無効化できるのならいいが、そんな勇気は俺にはない！
俺に出来る事は、そう、寝たふり――。
「――あら、起きたのね」
……寝た、ふり……。
「うふふふ、丁度お茶の用意ができたところなの。あなたも一緒にいかが？」
全身を隠すように頭から被っていたシーツを捲り、そう俺に微笑むお姉さん。寝たふりは開始して数秒、速攻で寝たふりがバレてしまった。
「美味しいお菓子もあるわよ」
「え、あ、い……え……」
「そうなの。じゃあ、あなたのぶんも用意するわね」
「……は、い……。ありがとう、ございますぅ……」
「ふふ♪」

うれしそうに再びドアを開けて部屋から出て行くお姉さん。……紫色の長い髪をしたお姉さん。夜によく光りそうな赤い目をしたお姉さん。

……。

あはっ、あは、あはははは……。

そうでしたね、俺……。月村さん家に向っている途中で吸血鬼のお姉さんと再会したんでしたね……。

あはははははは、あはははは……はぁぁぁぁ……。

◆

「どう、美味しい？」

「はい……」

「ふふ、それはよかった。ほら、お菓子も美味しいわよ」

「あ、ありがとうございます」

お礼を言って、吸血鬼のお姉さんから勧められたお菓子を手に取り食べる。口のなか

に広がる甘さを紅茶で流して、新しいお菓子に手を伸ばしてちびちびと食べる。吸血鬼のお姉さんは何がおもしろいのか、俺の向かい側の席に座って俺を眺めながら紅茶とお菓子を楽しんでいる。

……。

……なんで俺、吸血鬼のお姉さんとお茶してるんだ？

「あら？　どうかした？」

吸血鬼のお姉さんが首を傾げる。俺は即座に首を横に振って「なんでもありません」と返して会話を終了させようとしたところで――止まる。

俺はティーカップを置いて、吸血鬼のお姉さんを正面から見る。

ものすごく怖いけど、正面から吸血鬼のお姉さんを見つめて、

「――その仮面……はなんですか？」

と、訊ねた。

「あら？　これのこと？」

吸血鬼のお姉さんは仮面に手で触れて、首をかしげた。俺はそんな吸血鬼のお姉さんにしっかりとうなずく。

「はい」

ほんと、そのどこかで見たような石仮面はどうしたんですか？　その石仮面でどう

やって紅茶とお菓子食べてるんですか？　まさか吸血鬼繋がりでＤＩＯさま狙ってます？　吸血鬼＝石仮面っていう発想ですか？　実は石仮面って有名ですけど、ほとんど被ってるところないんですよ。

その他諸々言いたいことがあった俺は、どうしても気になって石仮面について質問したわけだが……吸血鬼のお姉さんは一言。

「日焼け対策よ」

と、バッサリ両断してきた！

「ひ、日焼け、対策ですか？」

「ええ、吸血鬼って太陽が苦手でしょ」

「それは……そう、ですね……」

確かに、大半の吸血鬼は太陽光を浴びると灰になってしまう。……けど、それならなんでノースリーブのドレスなんて着てるんだ？　腕とか腕とか腕とか丸出しなんだけど。そっちは日焼け止めでも塗ってるのかな？

「まあ、でも確かにこの仮面は重たいわね」

「へ？」

疑問符を浮べた俺を無視して、吸血鬼のお姉さんは石仮面に両手を添える。そしてそのまま吸血鬼のお姉さんは何を思ったのかガパッと石仮面を外して、テーブルの上へと

置いた。
テーブルの上に、置いた。
石仮面を……。
「……へ？　え……？」
簡単に外してもいい代物だったの？
すでに完全用済み扱いでテーブルの隅に置かれた石仮面。そんな漫画でもアニメでも速攻で用済み扱いされる石仮面から吸血鬼のお姉さんへと視線を戻すと――。
「やっぱり石の仮面は重いわよね。フルフェイスで窮屈だし。これぐらいが楽だわ」
……目元を隠す黒リボン、もとい科学変異の亀ズを意識したと思われる仮面？　いや、覆面をつけて優雅に紅茶を味わう吸血鬼のお姉さんがそこにはいた。
「あの、お姉さん？」
「あら、何かしら？」
「さっきの、日焼け対策じゃ……？」
「？　別に平気よ。私は太陽なんて克服してるし」
「……そ、そうでしたか……」
ならなんで石仮面を？　そして今も目元を隠すリボンなんて付けてるんだよっ!?
この吸血鬼のお姉さんと話してると頭が混乱する……。

「――拓也くん」
「は、はい！」
いきなり吸血鬼のお姉さんに名前を呼ばれ、俺は背筋を伸ばす。今度はなんですか!?
俺が椅子の上でビクビク小鹿のように震えていると、吸血鬼のお姉さんは小さくため息を吐いた。困ったような表情を浮かべて吸血鬼のお姉さんは言う。
「もう、そんなに警戒しなくてもいいわよ」
「え？」
呆ける俺をよそに、吸血鬼のお姉さんはカップを机の上に置き、席から立ち上がる。
そして無言のまま俺の席へと歩いてきて――。
――っ！　ヤバイッ！　逃げ――。
「――大丈夫よ」
――吸血鬼のお姉さんに抱きしめられた。
「……あ、――っ！」
また襲われるッ！　血を吸われるッ！　吸血鬼のお姉さんの匂い、熱、感触、息づかいを強く感じた俺の脳内で、最大限の危険信号が鳴り響こうとした瞬間、
「――大丈夫。大丈夫だから。今度は襲ったりなんかしないから……」
耳元で、そう優しくつぶやかれた。

「え、ぁ……」
「あの時はごめんなさい。怖かったわよね。こんなに震えて。ごめんなさい……」
「……」
ギュゥウウっと抱きしめてくる吸血鬼のお姉さん。涙声の、震えた声で俺は何度も謝られた……。

◆

吸血鬼のお姉さんに抱きしめられてからしばらく。涙ながらの謝罪を受けた俺は、吸血鬼のお姉さんに対する警戒レベルを落とすことにした。
俺は大きく息を吐いて全身の緊張を抜く。……うん。落ち着いた。
落ち着いたところで、体を抱きしめ続けている吸血鬼のお姉さんの腕をポンポンと叩く。
「お姉さん、もう大丈夫だよ。怖がったりしないから」
「すぅ……すぅぅ……ぁあ……」

「？　お姉さん、寝てるの？」
「――っ！　あ、えっ……ご、ごめんなさいね」
抱きしめる腕を解いて離れる吸血鬼のお姉さん。……ん？
「あの……大丈夫、ですか？」
「ええ、大丈夫よ」
平気だと、ニッコリ笑顔を浮べる吸血鬼のお姉さん。……そのわりには目がギンギンに輝いてるんだけど……。
ん～……でも……。
「本当にごめんなさい。あのときはどうしても自分が抑えられなくて……」
まっ、悪い人ってわけでもなさそうだし。
「本当は夜中に出歩いてるのを注意しようとしたんだけど、拓也くんからすごくいい匂いがして……我慢できなくなって、そのつい襲って……」
わ、悪い人じゃ……。
「そ、それに血も、今まで飲んだのとは全然違ってて、すごく美味しくて……。ごくっ、ん……本当に、美味しくて、ね」
「もういいから、ね。もう気にしていませんから、大丈夫です」
「――っ。ありがとう、拓也くん」

床に膝立ちになって、吸血鬼のお姉さんは深々と頭を下げる。俺の膝に頭を埋めるように。

「はぁ……はぁ……。本当に、いい匂い……」

……訂正。悪い人ではなさそうだけど、この吸血鬼のお姉さん、危ない人？　みたいだ。

「すぅはぁ、すぅはぁ……すぅぅ、はぁぁぁぁ……」

俺の股間に顔を埋めて匂い嗅ぎまくってるし。紫色の長い髪の間、目線を隠してる黒いリボンの穴部分から赤い光が漏れ出してるし……。

「ん、すぅぅぅ、はぁぁぁ……」

幸せそうに息を吐く吸血鬼のお姉さん。俺の足にすがりつきながら匂いを嗅いでくる姿は、アリサのとこで飼ってる犬に見えた。

試しに吸血鬼のお姉さんの頭に手を置いて撫ぜてみる。うわ、髪の毛、サラサラだな。

「ん～……」

頭を撫でられた吸血鬼のお姉さんはうれしそうな声で唸り、膝に頬ずりしてくる。これで尻尾が生えていれば、さぞパタパタと振って喜びを表現してくれていたことだろう。

「すぅぅぅ……はぁぁ……」

……ほんと、ハートマークでもつきそうなぐらい幸せそうに匂いを嗅ぎ続けてる。
「あの、お姉さん？」
「ん～？　なーにい？」
「俺の匂いってそんなにいいんですか？」
俺の質問に吸血鬼のお姉さんは顔を上げる。俺の膝の上で腕を組んで幸せそうな顔のまま言う。
「それはもう最高よ！　いままで嗅いだなかでも最高……いえ、拓也くんと出会うまでは匂いなんかで吸血衝動が抑えられなくなるなんてなかったのに。拓也くんの匂いは嗅いだ瞬間に自分を抑えられなって、今も嗅いでるとすごく満たされて……」
急に言葉を小さくして吸血鬼のお姉さんは頬を赤らめて太ももをすり合わせる。恥ずかしそうに視線を俺から外して、
「とにかく最高にいい匂いなの……」
と、小声でつぶやいた。
「そ、そうなんだ……」
俺自身、いい匂いと言われても香水とかつけてもないし、何も変わったことなんかしてないからイマイチ納得や理解はできないけど、いい匂いと言われてるんだから、悪い気はしなかった。

むしろお姉さんに褒められてうれし……。
「――それに、匂いもだけど味も、最高に美味しかったから」
「……あ、味ですか？」
「ええ」
「へぇ、そうなんですか」
吸血鬼のお姉さんと視線が合わさる。真っ赤な瞳で、唇からは鋭そうな牙が……。
ごめんなさい！　やっぱりうれしくないです！　匂いとか味って、完全に捕食対象としてみられてるじゃないかっ！
「ああっ、ごめんなさい！　こ、怖がらせるつもりじゃなかったのよ！」
「嘘だ！　信じられないですよっ！　さっき俺のこと完全に食料として見てたでしょ！
いやぁぁぁ、誰かぁぁぁ！　助けてぇぇぇ！」
「見てない、見てないから！　怖がらないで！　あと、騒いでも誰にも気づかれないんだから騒いでも無駄よ！」
「なっ、騒いでも無駄!?」
「そうよ、ここは森の奥に建ってる山小屋なんだから。大声だしても誰も来ないわよ」
だから静かにしましょ。と、注意される俺。……どうやら俺は完全に捕らわれていたようです。クソッ、逃げ場も助けもないのかっ!?

「ふぅ、やっとわかってくれたのね」
ほっとため息を吐く吸血鬼のお姉さん。うう、俺が生き残るにはこの吸血鬼の言いなりになるしかないのか……。
クソぅ……人外をも倒せる力さえあれば……。誰にも負けない力が欲しい……。
そう心の中で強く願い、何とかパワーアップフラグを立てようとしていると、吸血鬼のお姉さんが両手を握ってきた。
吸血鬼のお姉さんは俺の目を正面から見つめながら真剣に説明し始める。
「これ以上誤解されないために言っておくけど。この山小屋に拓也くんをつれてきた理由は襲ってしまったことを謝りたかったからなのよ」
……え？
「じゃ、じゃあお、襲ったりとかは……？」
「――しないわ。するつもりもないわよ。まあ、いきなり襲ってしまった前科がある私をそう簡単に信用できないと思うけど……」
そう言って目を伏せるお姉さん。ど、どうやら本当に襲うつもりはないらしい。
そ、そういえば今まで忘れていたけど、俺の体に何も異変がない。これが襲うつもりの吸血鬼だったら、寝ているうちに血を抜いたり、お菓子やお茶にクスリを仕込むはず。
そういう事情を考えてみると、本当に俺を襲うつもりがないと、信用できる。

俺はそこまで考えて、吸血鬼のお姉さんに頭を下げた。
「……さ、騒いでごめんなさい」
「こ、こっちこそ、怖がらせるようなこと言っちゃってごめんなさい」
吸血鬼のお姉さんも謝り、繋いでいた手を離した。
「……」
「……」
なんとも言えない沈黙。吸血鬼のお姉さんは空気を変えるようにその場から立ち上がろうとして――。
「――ん……」
ふらり、とふらついた。
吸血鬼のお姉さんは倒れまいと机に両手をついた。
「だ、大丈夫ですか!?」
俺は慌てて椅子から立ち上がる。吸血鬼のお姉さんの体を支えるように立って顔を覗き込んで見るが、顔色が悪い。
ど、どうしよう!?　すごく苦しそうだ！　え、えっと、こ、こういうときは１１０番するんだっけ!?　１１１番だっけ!?　で、でも、吸血鬼のお姉さんって普通の病院でもいいのかな？　いや、ダメだよね!?　……お、俺はいったいどうすればぁぁぁ!?

とりあえず元気付けるためにも吸血鬼のお姉さんに呼びかける！
「お姉さん！　大丈夫!?　救急車呼ぶ!?」
「ふ、ふふ、大丈夫よ。これぐらい……」
ダメだ。表情にいつものような余裕がない。顔から汗も伝ってるし、結構ヤバイいんじゃないか？
「大丈夫だから……。少し、血がね……」
「血っ!?」
つまり吸血衝動ってヤツ!?　つ、つまり……俺の血を、飲みたいと……。
「だから、拓也くん」
「ひゃ!?　は、はいっ!?」
ま、まさか血を吸わせろなんて、言わないよな？　言わないよね……？
「今日のところはもう帰って」
お姉さんの口から放たれた言葉は俺が予想していた言葉と違っていた。
「……え？　お、お姉さん？」
「まだ、軽いから我慢できるけど……このままじゃ、また、襲っちゃいそうだから、ね……」
吸血鬼のお姉さんは無理矢理笑顔を浮べてつぶやいた。

……。
「はぁ……はぁ……ん……」
吸血鬼のお姉さんは苦しそうに息を吐く。俺を襲わないよう我慢してるんだ……。
苦しいのに……。
「……お、お姉さん……」
「私は……だい、じょうぶだから……」
無理に気丈に振る舞っている。
俺は……。
「お、お姉さん」
「何、拓也、くん……」
「血……吸われたら、吸血鬼になっちゃうの？」
「？　いえ……。それはないわ」
「……吸われるとき、痛い？」
「それは……吸う側だからわからないけど……」
「前は……かなり痛かった」
「……うっ、ご、ゴメンなさい」
「うん」

……。

俺は覚悟を決めて、お姉さんの手を握る。

心の中で膨れ上がる恐怖心に気づかれないように笑顔を浮べて、

「す、少しだけなら、血……吸ってもいいよ」

俺はお姉さんに首筋を差し出した。

「……い、いいの？」

「うん。お姉さん、苦しそうだし……。女の子には優しくしなさいっていつも言われてるからね」

桃子さんや美由希さんから。

「だから、いいよ」

「拓也くん……。ありがとう」

「うん」

◆

「ちゅっ……じゅるるる……。はぁ、んくっ……おいしい……」
「んっ、はぁっ……はぁっ……お、お姉さん……っ。うぐっ、ううっ……」
首筋に感じる痛み。傷口から溢れる血を舐められ、吸われる感覚。唇と舌の感触が首筋をくすぐった。
密着している吸血鬼のお姉さんからシャンプーの匂いが香る。淡く薄紫色に光る長くてサラサラとした髪は幻想的で綺麗だった。
「あっ、ああ……あああぁぁ……」
俺に抱きつき、首筋に顔を埋めている吸血鬼のお姉さん。
吸血鬼のお姉さんの首筋に顔を埋め、背中に手を回す。
目が……霞む。
手足が冷たい。
頭が……回らない。
痛みも、ない……。
吸血鬼のお姉さんに吸血の許可を出して、すでに１０数分。
体の感覚がなくなり始め、ゆっくりと目の前が真っ暗になっていく。
「……」
「ちゅっ、はぁ……じゅるる……」

吸血鬼のお姉さんはまだまだ吸血中。俺の体内からはまだまだ血が減り続けている。
……あれ？　これ、物凄くマズい状況なんじゃ……？
……あれ？　でも、気持ちいいぞ？　……力が抜けていって……。
……真っ白に……。俺、真っ白に……。
「しっ、忍お嬢さま！」
「？　何よ、ノエル。今、すっごくいいところなのに」
「拓也さまの顔色を見てください！　これ以上は危険です！」
「顔色？　危険って……。――っ!?　まっ、マズいわ！　ノエル！　すぐに輸血の準備を始めて！」
「はい！　直ちに！」
「しっかりして、拓也くん！　うう～……まさか夢中で吸血しすぎてしまうなんて……」
……。
……俺、真っ白……。

第７話　再会　後編

目覚めてすぐに目に入ってきたのは、少し前に見上げたばかりの天井だった。
ここは……ん？
現在いる場所を思い出そうとして感じた全身のダルさ。頭がボーッとして手足が上手く動かせない。何とか首だけ動かして視線を横に向けると、そこには吸血鬼のお姉さんがいて。吸血鬼のお姉さんは俺が目覚めたことに気づくと、涙を流しながら謝ってきた。
「ゴメン、なさい……」
「お姉、さん？」
「ゴメンなさい、拓也くん。私……自分が抑えられなくて……」
その言葉にすべてを思い出す。ボーッとする頭が心よりも先に現在の状況を理解する。俺、血を吸われすぎて倒れたんだ……。
「もう少しで私は……あなたを……っ」
ボロボロと涙を流がす吸血鬼のお姉さん。顔を歪めて謝るその姿に、
「……大丈夫だよ、お姉さん」

自然と口が動いた。
「……えっ？」
「俺、全然気にしてないから……。だから、泣かないで」
「拓也くん……」
「元々俺が望んだこと、なんだし。ワザとじゃないんでしょ？」
「それは……そう、だけど……」
「だったら、事故みたいなものだから。俺は……お姉さんを責めないよ」
「拓也くん……ッ」
涙を赤い瞳いっぱい溜めながら見つめてくる吸血鬼のお姉さん。何とか笑顔を作って「大丈夫だから」と伝えようとするが強い眠気に襲われる。
「まだ、眠いや……。ゴメン、もう少し……寝るね」
きっと、血が足りてないせいだろう。
すごく……眠い……。

◆

待ち望んでいた夏休みに入って2日。家でゴロゴロしていると、吸血鬼のお姉さんに呼び出された。

なんでも吸血鬼のお姉さんは数日前に迷惑をかけてしまったお礼がしたいそうだ。

「ん～……迷惑って言ったらアレしかないよなぁ？」

吸血のされすぎで気絶したアレ。でも、元々自分から言い出したことだし……。全然気にしてないんだけどなぁ。お姉さん自身もワザとじゃなくて、事故のようなものだったし。貧血で倒れたボクを介抱してちゃんと家まで送ってくれた。

「お礼って言われてもなぁ……」

むしろこちらが迷惑をかけたような……。このままお礼をしてもらってもいいのかな？

そう悩みながらも吸血鬼のお姉さんに指定された場所へ行ってみると――、

「お待ちしておりました、拓也さま」

メイドさんがいた。

メイドカチューシャにエプロンドレス。紫色の髪をショートカットにしてるメイドさん。

黒いリムジンの横に立っているメイドさん。

メイドさん、メイドさん、メイドさん……。
吸血鬼のお姉さんと同じく、メイドさんの目元には黒いリボンが巻かれているけど……。
「えっと、ノエルさん……ですよね？」
「……。いいえ。違います」
「でも……」
「私はノエル・K・エーアリヒカイトという月村家のメイドではございません」
いや、俺も知らないノエルさんの本名を言えてる時点でノエルさんだよね？　そもそも髪が紫色でメイド服っていうレアな格好の人ってそうそう存在しないと思うんだけど？
疑問符を浮べる俺を無視して、ノエルさん（？）はリムジンのドアを開ける。
「主がお待ちです。お乗りください」
「……う、うん」
質問には応えませんという態度のノエルさん（？）に、ボクはしぶしぶうなずいてリムジンに乗り込む。シートに腰を下ろして運転席を見ると……、
「ファリンさん？」
「はーい。なんですかぁー？」

ノエルさん（？）と同じくメイド服を着た月村家のメイドさん、ファリンさんがいた。こちらも目元に黒いリボンを付けていたが、いつもの陽気な調子で返事を返した時点でファリンさんであると確定した。

「……え？　やっぱりさっきのはノエルさん？　で、でも、俺は吸血鬼のお姉さんに呼び出されて……そういえば、教えてもないのに俺の家の電話番号知ってるのっておかしいよな？」

うんうんと唸りながら混乱していると、助手席に座ろうとしていたノエルさんが俺の座る後部座席のドアを開けて隣に座ってきた。

「皆さん乗りましたねー。ではでは出発しますよー♪」

ファリンさんの陽気な言葉と共に車が走り出す。走り出した車内で、ノエルさんが口を開く。

「拓也さま」

「はっ、はい！　……なんですか？」

「そう緊張なさらないで下さい。危害を加えようなどとは考えておりません」

いや、危害とかじゃなくて！　ノエルさんとファリンさんがいるのに混乱してるんだけどっ！

吸血鬼のお姉さんに呼び出されたはずだよね!?

混乱する俺を、ノエルさんは真っ直ぐ見つめて言う。
「どうかこのことは忘れてください」
「……え？　忘れる？」
突然何を言ってるんだ、このメイドさん。そもそも何を忘れろと？
「はい。私たちが月村家のメイドであること。吸血鬼の正体。そのすべてを。忘れてください」
「え？　それって……？」
どういう意味？　そう訊ねようとする前に、ノエルさんは言う。
「どうか、今は訊ねないで下さい。拓也さまには話せない、複雑な事情があるのです」
……複雑な、事情？　それって……、
「お願いします、拓也さま」
真っ直ぐ正面から見つめられ、頭を深く下げられる。その姿からは、ノエルさんの真剣さが感じられた。
……。
「……わかった。わかったよ、ノエルさん。これ以上、訊かない」
「拓也さま……」
「複雑な事情があるんでしょ？　なら、そっちが話してくれるまで、これ以上こっちから

は何も訊かないよ」
「ありがとうございます」
もう一度頭を頭を下げるノエルさん。それにしても複雑な事情、かぁ。こんな必死なノエルさんは初めてだし、きっとすごく複雑な事情なんだろう。
「もうすぐ目的地に着きますよ～♪」
ニコニコ笑顔で運転をしているファリンさんはいつも通り能天気みたいだけど……。

◆

リムジンに揺られること３０分ぐらい。ノエルさんとファリンさんに連れられてやって来たのは、周囲を森で囲まれた洋館だった。その洋館は小説やアニメなんかでお馴染みの、いかにも吸血鬼が住むような洋館で、日当たりが悪く、陰気な雰囲気をかもし出している。
「あれ？」
「どうかなさいましたか、拓也さま」

「……べ、別になんでもないよ」
「そうですか？」
「うん。気にしないで」
ここって月村のお屋敷の裏口だよね？　ものすごーく見覚えあるんだけど……。車で通った道もすずかの家の近所だったし。
「では、まいりましょう。主がお待ちです」
「……うん」
ノエルさんに連れられて裏口からお屋敷に入る。ファリンさんとはどうやらここでお別れのようだ。こちらに手を振り、車に乗ったままどこかへ行ってしまった。
ノエルさんのあとについていきながら屋敷の中を進む。……うん、中もいたって普通。ドクロの蝋燭立てとか気味の悪い絵画も飾ってない。ちっとも吸血鬼の根城っぽくない普通のお屋敷だった。
先を歩いていたノエルさんがドアの前で立ち止まる。
「こちらになります」
「この部屋に忍さん……吸血鬼のお姉さんがいるの？」
「はい」
ノエルさんがドアをノックすると、部屋の中から声が返ってきた。入室の許可を貰

い、ノエルさんがドアを開ける。うながされるように先に部屋へ入ると……、
「いらっしゃい、拓也くん」
「お、おじゃまします。しの……吸血鬼のお姉さん」
薄紫色のネグリジェを着た忍さんがいた。……もはや正体を隠すつもりもないらしい。
ベッドの端に腰掛けた忍さんが側に来るよう手招きをする。俺は手招きされるままに忍さんの隣に座った。
忍さんは俺の手に自分の手をやさしく重ね、正面から俺の目を見つめながらつぶやく。
「拓也くん。突然のことで戸惑ってると思うけど、今は何も聞かないで欲しいの」
「それは……わかってるよ。お姉さんたちが事情を説明してくれるまで俺からは何も聞かないって、ノエルさんとも約束したし……。このことは誰にも言わないよ」
「ありがとう、拓也くん。いずれは私のほうから事情を説明するから」
「うん……。でも、言いたくなったらでいいからね？」
無理矢理聞きだしたり、嫌々聞かされるのも嫌だし。話せるときに話してもらえればいいよ。
それに……。今はそれよりも――、

「あの……忍、さん……？」
「なに、拓也くん」
「その……下着着けてないの？」
　薄いネグリジェから覗けてるモノのほうが気になってしまう！　距離が近いから色々見えてるんだけど……。乳首とかさ。
「あら？　気になるの、拓也くん」
「そ、そんなことないよっ」
　お母さんや美由希さんとお風呂入るときも見てるし！　なのはとかアリサとかすずかのも見ても全然気にならなかったし！　忍さんのだって気になるわけが……。
「気になるんだったら直で見せてあげようと思ったんだけどなぁ」
「なっ……！　直って!?」
「ほらほら、見たいでしょう？」
　チラチラとネグリジェを肌蹴させる忍さん。……な、なんだかわからないけど、すごく見てみたい……ような、気がする。
「本当に見てもいいの？」
「ええ、いいわよ♪　――ほら」
　忍さんは立ち上がり、ネグリジェに手をかける。何のためらいもなく忍さんはネグリ

ジェを脱いで裸になった。
「う、あ……」
気づいたら口から声が漏れていた。
目の前に立っている裸の女性。
家族じゃなくて、物心つく前から一緒だった高町家の人じゃなくて、最近知り合ったばかりの女の人の裸。
温泉で見たすずかと似てるけど、全然違う。胸が大きくて、下のほうに毛が生えてる。
あそこは……この前美由希さんが弄ってたところだったはず……。
太ももとか位置とかで見えないけど、あそこは美由希さんと同じなのかな？
「――っ！」
思わず両手で股間を押さえる！　なっ、なんだこれ!?　オチンチンが反応してる!?
「あら、ふふふっ……」
「――っ」
小さく笑い声を漏らした忍さんがゆっくりとこちらに近づいてくる。肩膝をベッドに乗せて、股間を押さえてる俺の手を解いていく。
なすがままに手をどかされると、そこには大きなってズボンを持上げてるオチンチンが。

「まあ、すごいのね」
「す、すごいって……？」
「もちろん、拓也くんのオチンチンがよ」
ニッコリと微笑む忍さん。忍さんは大きくなったオチンチンを見つめ、顔を近づける。
「し、忍さん!?」
突然股の間に顔を埋められ、驚いた声を出すが、忍さんは無視してズボンの上からオチンチンに触れた。細くて長い指が根元から先端へツーッとなぞられる。
「――っ」
オチンチンから伝わってきたモノにビクッと体が跳ねる。……な、何だ今の!?　一瞬でよくわからなかったけど、背筋がゾワってしたぞ!?
「ふふっ、いい匂い」
「なっ!?　……し、忍さんっ！　いくらなんでも顔が近い、です……」
ズボンに息が……ズボン越しに当たってるっ。息の熱や風がズボンからオチンチンに伝わってきてる！
全身から汗を滲ませながら戸惑う俺を無視して忍さんは熱っぽくつぶやく。
「こんなにパンパンになって……すごく苦しそうね」

「……忍さん？　あのなんでズボンのベルトを外して――なっ!?　ちょっと忍さん!?」
「コラ、暴れないの。少しの間じっとしてて」
「じっとって、ズボン脱がされてるのにできないよ！」
必死になって忍さんからズボンを守ろうとするが、忍さんの力が強すぎて敵わない！
こんな細腕なのにどこに力が……まるで美由希さんみたいだ！
抵抗空しくカチャカチャとベルトを外され、チャックを下まで下ろされ、そのままズボンを脱がされる。ズボンの下に穿いていた青色のトランクスが露出したが、それでも忍さんの気は済まないみたいだ。俺をベッドの上へ寝かせ、最後の砦だったトランクスまでポイっと脱がし、ついでとばかりに上着まで脱がされた。
「うん、これでよし」
生まれたままの姿となった俺を見下ろしながら、満足そうにつぶやく忍さん。この場での抵抗はすべて無駄だと悟った俺はすでに股間を隠すのを諦め、ベッドの上に大の字で寝転がった。
ギシッと小さくベッドを軋ませ、忍さんがベッドの上へと昇ってくる。忍さんは俺の真上、覆いかぶさるようにベッドに手をつき、四つんばいになった。
視界のほぼすべてが忍さんの顔で埋まる。目を逸らそうにも紫色の長い髪が顔の周りに降りてきてるために顔を逸らせない。

俺の胸に、忍さんの大きな胸が触れてくる。ゆっくりと、探るように体重がかけられていき、それに比例して密着が増していく。
大きくなったオチンチンが、忍さんのお腹に触れる。忍さんのサラサラとした肌に亀頭が擦れて小さな痛みと気持ちよさが伝わってきた。
「拓也くん」
「忍、さん……」
普段とは違う、爛々と輝く真っ赤な瞳。
生暖かい吐息に、肌から伝わる感触。
肉食動物にこれから食べられる草食動物の気持ち。
もう随分と前になる、初めての夜が思い出す。
あのときは月の出た夜だったけど、状況は前とあまり変わらないと思う。
前と同じように、これから俺はこの吸血鬼のお姉さん……忍さんに襲われる。
もう逃げ場はない。
ここは彼女の城のなかだ。
「さあ、お姉さんといいことしましょ」
——だけど、前と違って恐怖はなかった。
「はい」

俺はうなずいて忍さんに両手を伸ばす。折れそうな腰に両手をまわすと、忍さんはうれしそうに微笑み、唇を重ねてきた。

プルプルした忍さんの唇……。密着してる体からは忍さんの体温や感触が伝わってきて、呼吸すると鼻から忍さんの匂いが入ってくる。

「はぁ……はぁ……、忍さん……」

「うふふ、もっとキスしたいの？　いいわよ。今日はお礼するつもりだったから、拓也くんの好きにしていいのよ」

もう一度、忍さんと唇を重ねる。腰に回していた手を胸へ移動させ、忍さんの胸を両手で掴む。

体の内側から溢れてくる感情に任せて乱暴に胸を揉みながら唇を押し付ける。忍さんはそれらをすべて受け入れ、さらに体を密着させてくる。

「忍さん……忍さん……忍さん……ッ！」

ああ……。

俺は吸血鬼の誘惑に完全に取りつかれてしまったらしい。

体の上に覆いかぶさっていた忍さんを、気づいたら俺はベッドへ押し倒して体を重ねていた。

唇や大きな胸、脇やお腹など様々な部分を俺は両手や口を使って味わっていた。

心まで熱くなった全身がまるで言う事を聞かず、感情のままに忍さんを抱きしめていた。
大きく開かれた忍さんの股の間に、誘われるままに腰を入れていた。
従順な犬のように忍さんの指示に従い、美由希さんに教えてもらったあの穴にオチンチンを入れていた。
腰が抜けてしまうような怖ろしい感情の波に、逃げ出そうにも両足でお尻を挟まれそのまま白いおしっこ……精子を漏らしてしまった。
その射精と呼ばれる行為が気持ちよくて……俺は忍さんに導かれるまま忍さんのなかで射精を繰り返した。
色んなものでドロドロになったオチンチンを抜くと、すぐに忍さんに咥えられ、しゃぶられた。
しゃぶられ、射精するとお風呂へ通され、そのまま湯船のなかでもう一度した。
お風呂を上がってからも、俺は忍さんから離れたくなくてずっと抱きついていた。
まるで赤ん坊のようにおっぱいを吸わせてもらい、温泉旅行のことを思い出した。
おしっこを飲んでもらったことも思い出して、冗談で言った忍さんにうなずいておしっこを飲んでもらった。
そのまま夕方になるまでベッドの上でキスしたり、触らせてもらったりした。

ノエルさんの運転で家まで送ってもらう間も、忍さんとのことが頭を離れない。
「俺はもう、ダメかもしれない……」
「何かおっしゃいましたか、拓也さま？」
「はぁ……」
「？」
——また遊びに着ていいわよ。着たい時はこの機械でメールすればいいから。
別れ際に忍さんから渡された携帯電話っぽい機械を取り出し、電源を入れる。
『いつ、遊びにいっていいですか？』
『今度の水曜日はおやすみだし、家には誰もいないからいいわよ』
『だったら、水曜日に行ってもいいですか？』
『ええ、もちろんよ。歓迎するわ♪』
『はい！　楽しみにしてます』
気づいたらそうメールを送っていた俺はもうダメだと思う。
……水曜日、か……。